

— 茨城県土浦市 —

かんたついせき

神立遺跡

—— 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2018

土浦市教育委員会

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川といった水源に恵まれ、古くから人々の暮らしが営まれてきました。そのため、市内には貝塚や古墳など数多くの遺跡が立地しています。これらの遺跡は、昔の生活や文化を現代の私たちに伝えてくれる貴重な遺産といえます。このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの重要な任務であり、郷土の発展のためにも大切なことがあります。

この度、神立町において店舗建築が計画され、工事予定地内に所在する神立遺跡の発掘調査が行われました。本書が、土浦市の歴史・文化の究明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し心から厚く御礼を申し上げます。

平成30年3月

土浦市教育委員会
教育長 井坂 隆

例言

1. 本書は、茨城県土浦市神立町字新田前748番1外における、株式会社セブンイレブン・ジャパンが計画する店舗建築に伴う神立遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、事業者の委託を受け、有限会社日考研茨城（代表取締役小川和博）が発掘調査支援を行い、土浦市教育委員会が行った。調査期間は平成27年9月27日から11月17日である。
3. 発掘調査は主任調査員を比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が務め、亀井翼・一木絵理（同学芸員）・宮窪ひろみ（同嘱託職員）が補佐した。報告書は比毛が第1章、第3章第2節の遺構、第4章第2節、島崎達也（同嘱託職員）が第3章第2節の遺物を執筆し、それ以外の執筆と編集を亀井が行った。
4. 調査参加者【敬称略 五十音順】
石川雅啓、柏昌美、窪田恵一、高野敏江、田邊えり、中村佐太男、丸岡公子
5. 整理作業は、調査終了後の平成28年4月から平成29年3月まで実施した。作業員は小林圭子・高梨智恵子の2名である。
6. 本遺跡調査に関する資料は、すべて上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて保管している。なお遺物の記録や整理、保管に際して、「KSK1」の略称を使用している。
7. 出土遺物のうち中世古瀬戸製品に関しては愛知学院大学藤澤良祐氏に、中世常滑製品に関しては中野晴久氏に、器形・様式・年代等についてご教示を頂いた。
8. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、次の方々および諸機関からご助言・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略 五十音順）。 宇留野主税 唐島健知 川村満博 越田真太郎
高野久夫 高野光正 榎山悠希 額賀大輔 広瀬季一郎 茨城県教育委員会文化課 株式会社セブン・イレブン・ジャパン 株式会社若柳建築事務所

凡例

1. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。
竪穴建物：S I 土坑：S K 地下式坑・不明遺構：SX 搅乱：K ピット：P
2. 遺構・遺物の実測図中の表記は以下の通りである。

炉・焼土範囲	炭化物範囲	硬化面：一点鎖線
スス		
3. 遺構・遺物の記述は以下を原則とした。
 - (1) 水准レベルは海拔高度(m)を示す。
 - (2) 遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。
 - (3) 遺構全体図は任意の縮尺で、各遺構の実測図は1/60、遺物実測図は4/5、1/3、1/6の縮尺で掲載してスケールで表示した。
 - (4) 遺構の「主軸」は原則カマドあるいは炉を通る軸線とし、主軸方向はその他の遺構の長軸(径)方向とともに、座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。
 - (5) 遺物の観察表の法量は、A：口径、B：底径、C：器高、()が現存値、〔 〕が復元値を表す。胎土の表記は肉眼観察の結果確認できた鉱物を記した。
 - (6) 土層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小川正忠・竹原秀雄編著 2002 日本色研事業株式会社）を使用した。

目次

序

例言

凡例

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査経緯と経過	1
第2章 環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	8
第1節 縄文時代	8
1 壺穴建物	8
2 土坑	22
3 遺構外出土遺物	31
第2節 中世	35
第4章 まとめ	45
第1節 縄文時代	45
第2節 中世	45
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 発掘調査区の位置	2	第17図 第4号壺穴建物遺物出土状況	21
第2図 神立遺跡 遺構全体図	3	第18図 第4号壺穴建物出土遺物	21
第3図 土浦市周辺の地形	3	第19図 第1号土坑	22
第4図 神立遺跡周辺遺跡分布図	5	第20図 第1号土坑出土遺物	22
第5図 第1号壺穴建物	8	第21図 第2、5号土坑	23
第6図 第1号壺穴建物出土遺物	9	第22図 第2号土坑遺物出土状況	23
第7図 第2号壺穴建物・第18号土坑	10	第23図 第2号土坑出土遺物	24
第8図 第2号壺穴建物 遺物出土状況	11	第24図 第3、4号土坑	24
第9図 第2号壺穴建物出土遺物(1)	12	第25図 第3号土坑出土遺物	25
第10図 第2号壺穴建物出土遺物(2)	13	第26図 第4号土坑出土遺物	25
第11図 第2号壺穴建物出土遺物(3)	14	第27図 第5号土坑出土遺物	25
第12図 第2号壺穴建物出土遺物(4)	15	第28図 第6,8~13号土坑	26
第13図 第2号壺穴建物出土遺物(5)	17	第29図 第6号土坑出土遺物	27
第14図 第2号壺穴建物出土遺物(6)	18	第30図 第8号土坑出土遺物	27
第15図 第3号壺穴建物遺物出土状況	19	第31図 第9号土坑出土遺物	28
第16図 第3号壺穴建物出土遺物	20	第32図 第10号土坑出土遺物	28

第33図	第11号土坑出土遺物	29	第40図	第7号土坑・第1号地下式坑	36
第34図	第12号土坑出土遺物	29	第41図	第2号地下式坑、第1号不明遺構、 第19号土坑	37
第35図	第13号土坑出土遺物	30	第42図	第17号土坑・第3号地下式坑	39
第36図	第18号土坑出土遺物	30	第43図	地下式坑等出土遺物（1）	40
第37図	遺構外出土遺物（1）	32	第44図	地下式坑等出土遺物（2）	41
第38図	遺構外出土遺物（2）	33	第45図	地下式坑等出土遺物（3）	41
第39図	遺構外出土遺物（3）	34			

表目次

第1表	神立遺跡周辺遺跡一覧表	6	第8表	第12号土坑出土石器観察表	29
第2表	第1号堅穴建物出土土製品観察表	9	第9表	遺構外出土土器片錐観察表	34
第3表	第2号堅穴建物出土土器片錐観察表	16	第10表	遺構外出土石器観察表	35
第4表	第2号堅穴建物出土石器観察表	17	第11表	地下式坑等出土遺物観察表（1）	42
第5表	第4号堅穴建物出土土器片錐観察表	21	第12表	地下式坑等出土遺物観察表（2）	43
第6表	第5号土坑出土石器観察表	26	第13表	地下式坑等出土遺物観察表（3）	44
第7表	第9号土坑出土石器観察表	28	第14表	地下式坑等出土遺物観察表（4）	44

写真図版目次

P L 1	調査区全景・第1号堅穴建物、第6、8~13号土坑・第2~4号堅穴建物、第18号土坑	
P L 2	第1号土坑・第2、5号土坑・第2号土坑貝集中地点	
P L 3	第3、4号土坑・第1号地下式坑・第2号地下式坑、第19号土坑	
P L 4	第2号地下式坑セクション・第1号不明遺構・第3号地下式坑、第17号土坑	
P L 5	第1号堅穴出土遺物・第2号堅穴建物出土遺物（1）	
P L 6	第2号堅穴建物出土遺物（2）	
P L 7	第2号堅穴建物出土遺物（3）	
P L 8	第2号堅穴建物出土遺物（4）	
P L 9	第2号堅穴建物出土遺物（5）	
P L 10	第3号堅穴建物出土遺物・第4号堅穴建物出土遺物・第1号土坑出土遺物	
P L 11	第2号土坑出土遺物・第3号土坑出土遺物・第4号土坑出土遺物・第5号土坑出土遺物	
P L 12	第6号土坑出土遺物・第8号土坑出土遺物・第9号土坑出土遺物・第10号土坑出土遺物・第11号 土坑出土遺物	
P L 13	第12号土坑出土遺物・第18号土坑出土遺物・第13号土坑出土遺物・遺構外出土遺物（1）	
P L 14	遺構外出土遺物（2）	
P L 15	遺構外出土遺物（3）	
P L 16	遺構外出土遺物（4）・地下式坑等出土遺物（1）	
P L 17	地下式坑等出土遺物（2）	
P L 18	地下式坑等出土遺物（3）	

第1章 調査の経緯と経過

株式会社セブン・イレブン・ジャパン(事業者・土地所有者、高野久夫氏・高野光正氏)が、土浦市神立町字新田前748番1外に位置する、県道牛渡馬場山土浦線に面した当該地に新規店舗の建築計画を立案したのは、平成26(2014)年度の初頭である。この計画地は周知の遺跡である神立遺跡(土浦市遺跡番号203-185)に該当するため、計画当初から事業者と市教育委員会との間で埋蔵文化財取扱の協議を進め、平成26(2014)年7月4日に埋蔵文化財の取扱についての照会文書が事業者より提出された。同年8月19・20日に試掘確認調査を実施し、調査の結果、計画地内には広範囲に縄文時代等の遺構が多数分布することが判明した。結果を受けて8月26日に回答を行い、翌日開発計画と発見した埋蔵文化財の保護について協議を行った。この時点では計画地よりも県道の方が標高が高いことから、土盛によって建物基礎高を上げ、遺構を地下保存する方向性であったが、その後に実施した地質調査の結果を踏まえ、建物基礎を安定した深い地盤にまで構築したい意向が後日、事業者側から示された。12月25日に再度協議を行い、店舗建物を発掘調査対象区域として事業者の費用負担協力による埋蔵文化財発掘調査を行い、それ以外の区域は土盛による地下保存を行う方向で同意が得られた(第1図)。これを受け、平成27(2015)年3月13日に調査体制についての協議を行った。主任調査員を埋蔵文化財担当の市学芸員が担当し、労務管理については発掘調査支援によって民間発掘調査会社に委託することとなった。

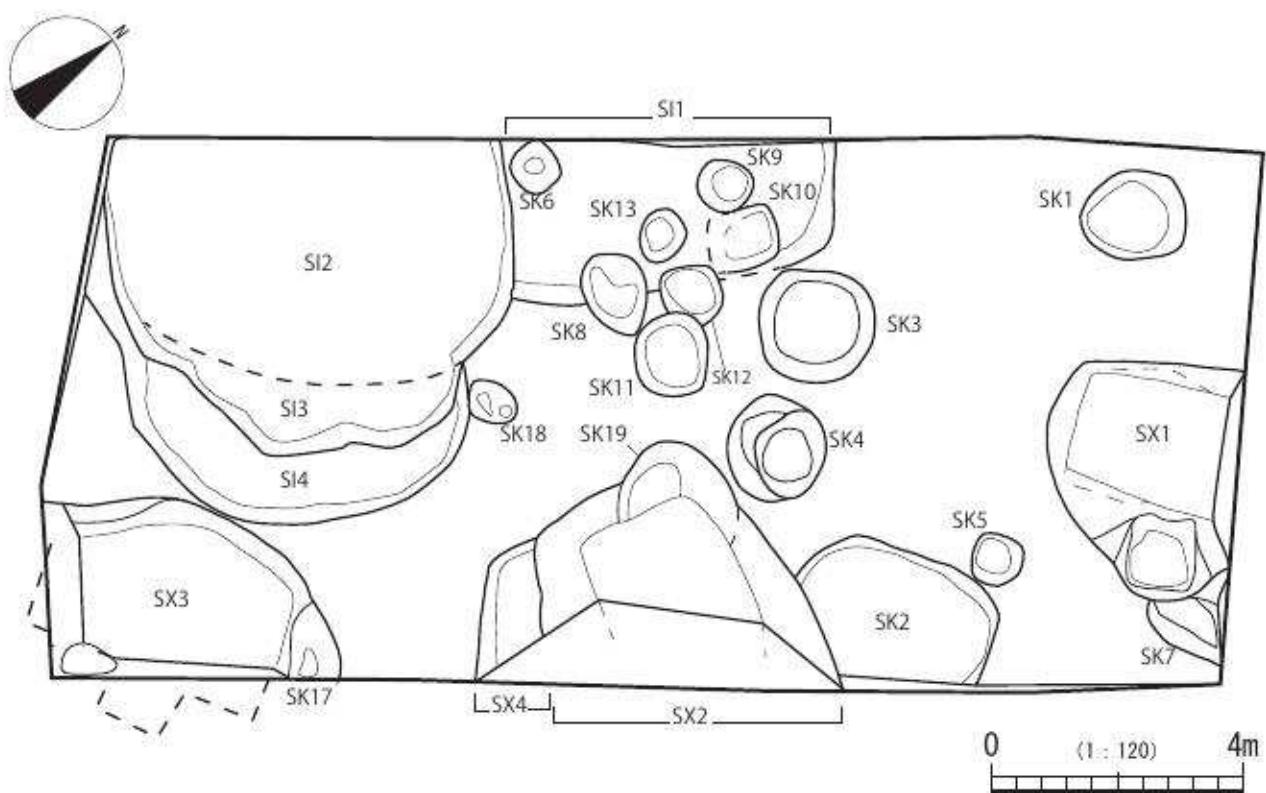
文化財保護法に基づく第93条の届出は平成27年8月4日に茨城県教育委員会に進達し、茨城県教育委員会からは平成27年8月13日付け文第1270号で発掘調査を実施するように通知がなされた。

これを受け、市教育委員会・事業者・民間発掘調査会社の三者による協定書を平成27年8月22日に締結し、事業者・民間発掘調査会社間で平成27年8月22日に神立遺跡埋蔵文化財発掘調査支援委託契約を締結、市教育委員会と民間発掘調査会社間で平成27年8月22日に発掘調査支援委託に関する覚書を締結した。

現地の発掘調査は平成27年9月29日から開始し、文化財保護法第99条に基づく発掘調査報告を土教委発第1016-2号により平成27年10月13日に茨城県教育委員会に通知した。調査は同年11月17日まで実施し、発掘調査終了確認依頼を11月19日に土教委発第1116号にて茨城県教育委員会に進達し、11月26日付け文第2160号で茨城県教育委員会は調査の終了を確認した。埋蔵物発見届は、11月19日付で土浦警察署に提出し、11月20日付で遺失物の手続が終了した。発掘調査終了後は、引き続いて平成29(2017)年3月末まで整理作業を実施した。



第1図 発掘調査区の位置



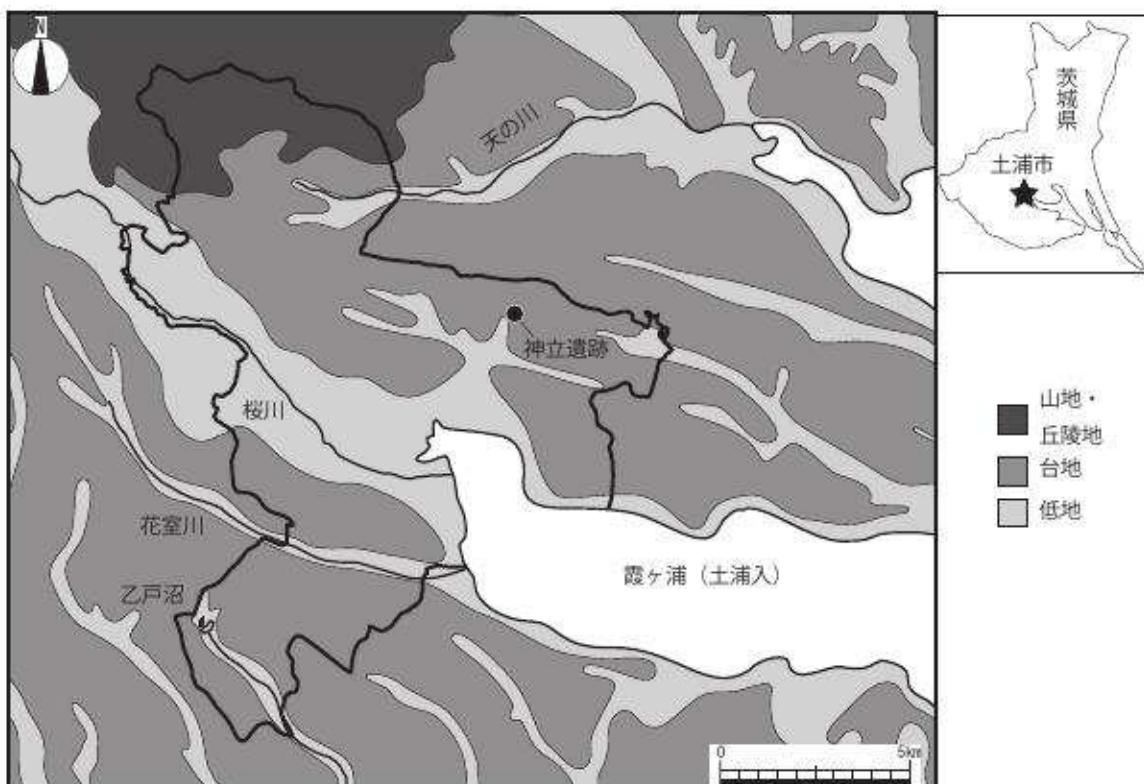
第2図 神立遺跡 遺構全体図

第2章 環境

第1節 地理的環境(第3図)

神立遺跡は、土浦市神立町に所在する。土浦市は茨城県南部に位置し、土浦入りで霞ヶ浦に接している。市域の地形は台地と低地に大きく分けられ、台地は市内中央を流れる桜川低地を境として、北に新治台地、南に筑波稲敷台地が分布している。神立遺跡は、境川に合流する支谷を西に臨む新治台地上に立地する。標高は25～26mである。

遺跡の立地する新治台地は、下総層群を基盤とし、その上に武藏野ローム層、立川ローム層に相当する新規関東ローム層が堆積している(宇野沢ほか1988)。下総層群は下位から地蔵堂層、藪層、上岩橋層、木下層、常総層に区分されている。これらは、海と陸の環境を繰り返していたことを反映して、陸成の砂礫層と海成の砂や泥の繰り返しによって構成されている。そのうち最も新しい海成層である木下層は、主に浅海成の砂からなり、12～13万年前、関東平野が古東京湾と呼ばれる海域であったころに堆積した。海水準の低下に伴い淡水環境になると、氾濫原に常総層が堆積した。常総層では当時の堆積環境を反映して、河道には礫や砂が、後背湿地には泥が堆積している。新規関東ローム層は富士・箱根起源の降下火山灰が風化したものであり、約6万年前から1万年前に、陸地化した台地に堆積した。現在の地表には黒褐色の土壤が発達しているが、これは風成塵などの堆積と土壤生成作用が同時に起こって形成された堆積土壤である。



第3図 土浦市周辺の地形
(20万分の1 土地分類基本調査「茨城」をトレース、改変)

第2節 歴史的環境（第4図）

南に霞ヶ浦を望む新治台地には、多くの遺跡が残されている。とくに、神立遺跡(1)から小河川を挟んで南側の木田余台地区と手野地区では、これまでいくつかの遺跡が発掘調査されている。本節では、これらの遺跡について時代別に概観する。

旧石器時代

木田余台地区の宝積遺跡(24)、東台遺跡(26)、御灵遺跡(27)、粉買場遺跡(28)において、旧石器が発見されている。特に宝積遺跡では石器集中地点が検出されており、硬質頁岩や黒色安山岩製の削器や搔器が出土している。

縄文時代

手野地区のゴリン山遺跡(45)で出土した早期前葉の撚糸文系土器が、市内でも最古級の土器である。このほか、原ノ内遺跡(43)で炉穴が発見されている。前期には集落跡は希薄であるが、第4図図示範囲の南東、田村地区に所在する下郷遺跡では、前期前葉から末葉に及ぶ竪穴建物跡が発見されている。中期になると、木田余台の東台遺跡(26)、御灵遺跡(27)において、竪穴建物跡と多数の土坑が検出されている。

本書で報告する神立遺跡(1)は、木田余台に匹敵する中期の集落である。これまで本格的な発掘調査は行われていないものの、試掘確認調査の結果、遺跡範囲中央に認められる凹地を取り巻くように、直径100m程度の環状に竪穴建物が分布すると考えられる。道路の拡幅に伴い立ち合いを行った際には、土坑内から貝ブロックが確認され、ハマグリを主体としシオフキ、オキシジミ、アサリなどが出土している。なお、神立遺跡の範囲は、後述するよう神立寺が存在していたという謂れがある。凹地の成因についても、自然地形のほかに、園池の可能性も考えられる。試掘確認調査でこの凹地にトレンチを入れたところ、ローム層が検出されず、地表化3～1.8mに常総層と思われる泥混じりの砂層や、極めて堅くしまった淘汰の良い中粒砂層が堆積しており、その上位に地表まで褐色土壤が認められた。凹地の成因を特定するには至らなかったが、単なる地表面の凹みではなく、何らかの要因によってローム層が堆積しなかったか、浸食あるいは掘削されたことがわかった。

後晩期には、神立平遺跡において後期前葉を中心とする集落が形成される。同遺跡は、市内でも上高津貝塚と並ぶ後晩期の拠点的集落と考えられ、土偶や土製品、石棒などの祭祀遺物も多数出土している。また、完形製塙土器2点をはじめ製塙土器がある程度出土しているほか、住居内にはハマグリやシオフキを主体とする小貝塚が形成されており、上高津貝塚よりも海に近い環境での生活が想起される。

弥生時代

市内では弥生時代後期から集落が認められるようになる。木田余台地区の東台遺跡、宝積遺跡において後期の竪穴建物跡が検出されているほか、紡錘車が多数出土している。

古墳時代

木田余台地区、手野地区は集落、古墳とも多数発見されている。まず木田余台地区では、竪穴建物跡の時期をみると前、中期は東台遺跡(26)、宝積遺跡(24)を中心、後期は粉買場

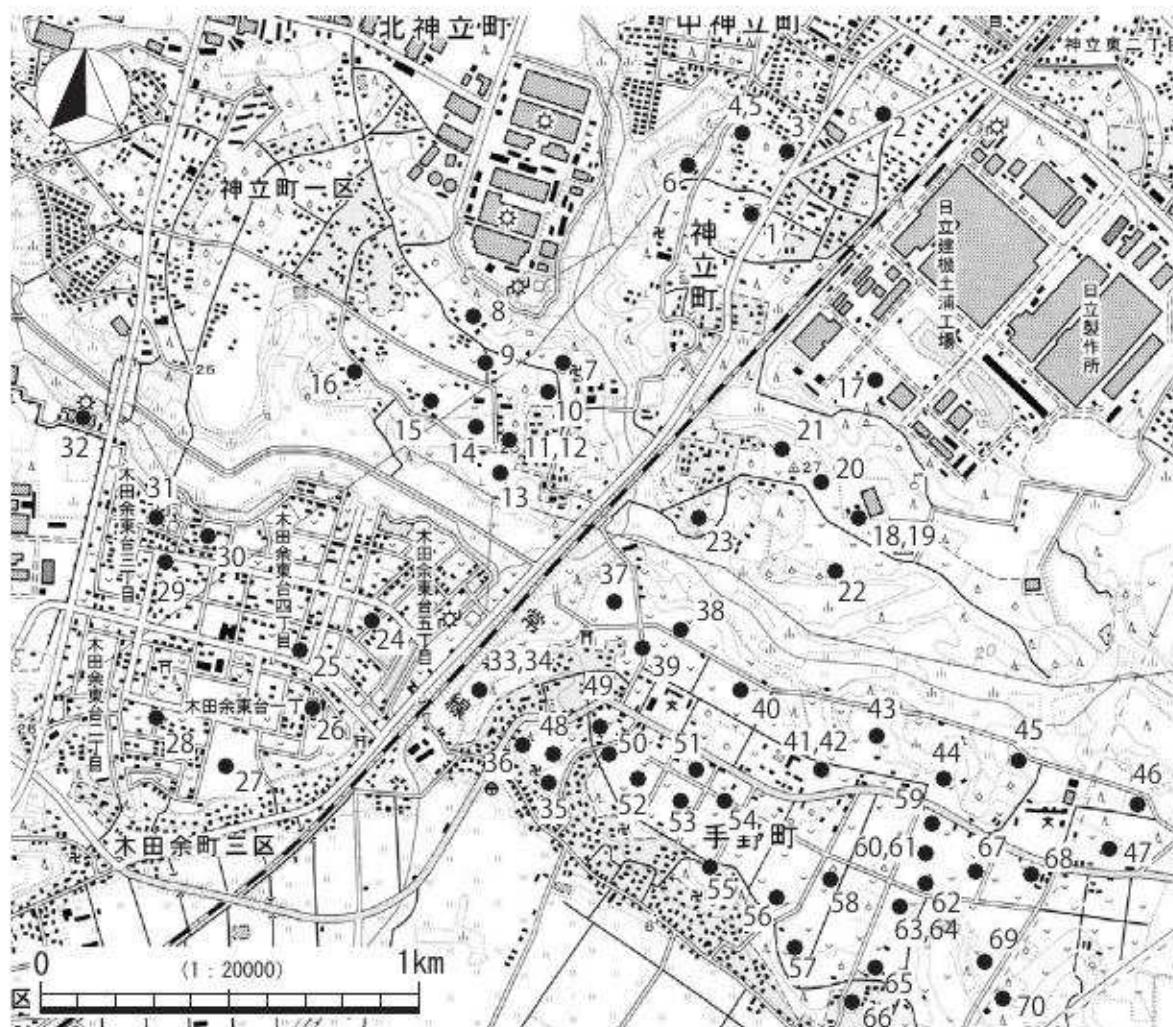


図4 神立遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000地形図 常陸藤沢 使用)

遺跡(28)、御灵遺跡(27)が中心となる。特に粉買場遺跡では100軒を超える堅穴建物跡が検出されており、市内でも有数の大集落である。東台古墳群(25)には19の古墳が存在し、帆立貝形を含む前方後円墳が多く、雲母片岩でつくった箱式石棺をもつ。13号墳の石室からは、成人人骨3体分、直刀5振り、短刀1、刀子2、鉄鎌46点、土製丸玉130点などが出土している。また、19号墳からは完形の円筒埴輪などが出土したと伝えられている。手野地区では、集落遺跡の発掘例はなく詳細は不明であるが、市内最大の前方後円墳である王塚古墳(35)が特筆される。王塚古墳は近年、筑波大学考古学研究室により詳細な測量が行われ、全長約84m、狭く長い前方部をもち、後円部と前方部の比高差が大きいという特徴をもつ。これらの形態から、「桜井茶臼山系列」とされる畿内の前期大型前方後円墳の影響下に成立した可能性が指摘されており、築造年代についても、古墳時代前期前半にまで遡るという(滝沢2017)。后塚古墳(36)は全長約65mの前方後方墳とされ、隣接する王塚古墳に先行して築造されたと考えられている。

第1表 神立遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	時代
1	185	神立遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世	36	298	后塚古墳	古墳
2	247	不動塚	近世	37	300	五斗落遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良平安
3	182	原口遺跡	縄文	38	301	大儘遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良平安
4	183	神田遺跡	縄文	39	302	羽田赤遺跡	古墳・奈良平安
5	290	アタゴ所在塚群	近世	40	303	弁ノ内遺跡	縄文・弥生・奈良平安・中世
6	184	セイペイ山遺跡	縄文	41	304	豪師塚	縄文・奈良平安・中世
7	186	青木遺跡	縄文・奈良平安	42	305	豪師塚	近世
8	187	松山遺跡	縄文・古墳・中世	43	306	原ノ内遺跡	縄文・奈良平安
9	188	神立八幡遺跡	縄文・奈良平安	44	307	畜土塹遺跡	縄文・古墳・奈良平安
10	189	天神平遺跡	縄文・古墳・奈良平安	45	308	ゴリン山遺跡	縄文・近世
11	190	坪内遺跡	縄文	46	431	真木ノ内遺跡	縄文・古墳・中世
12	283	坪内貝塚	縄文	47	309	皮開供養塚	近世
13	191	花輪遺跡	縄文	48	310	姫塚遺跡	弥生・古墳
14	192	蟹久保遺跡	縄文	49	311	手野宮脇遺跡	古墳・奈良平安
15	193	中道遺跡	縄文・奈良平安・中世	50	312	手野ドンドン塚古墳	古墳
16	194	前神田遺跡	奈良平安	51	314	平外遺跡	古墳
17	446	神立平遺跡	縄文	52	313	上大津西小学校前遺跡	古墳・奈良平安
18	423	前原北遺跡	縄文・奈良平安	53	315	久保上遺跡	縄文・古墳
19	424	前原不動塚	近世	54	316	長堀遺跡	奈良平安
20	425	根本東遺跡	縄文	55	317	馬坂古墳	古墳
21	426	根本西遺跡	縄文・奈良平安	56	318	手野坂上遺跡	古墳
22	422	前原遺跡	縄文・奈良平安	57	319	手野天神遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世
23	427	樋下遺跡	縄文	58	320	天王前遺跡	縄文・古墳・奈良平安
24	195	宝積遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良平安・近世	59	327	天王後遺跡	縄文
25	262	東台古墳群	古墳	60	326	八坂東遺跡	奈良平安
26	292	東台遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳	61	328	井戸山遺跡	中世・近世
27	199	御吳遺跡	旧石器・縄文・古墳	62	460	八坂東貝塚	中世
28	200	糲買場遺跡	旧石器・縄文・古墳・奈良平安	63	325	宿後遺跡	奈良平安・中世
29	197	宮崎遺跡	奈良平安	64	465	宿後貝塚	中世
30	196	宮脇遺跡	奈良平安	65	321	平遺跡	古墳・奈良平安
31	248	一丁田台東遺跡	縄文・奈良平安	66	432	正東院一字一石經塚	近世
32	198	一丁田台遺跡	古墳	67	329	天王場貝塚	中世
33	299	立遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良平安	68	330	手野原口遺跡	縄文・奈良平安・中世
34	434	手野城跡	中世	69	324	吉池遺跡	古墳
35	297	玉塚古墳	古墳	70	331	田村向原遺跡	縄文

※土浦市遺跡地図での番号

奈良・平安時代

木田余台地区では、前代同様に御灵遺跡(27)、糲買場遺跡(28)を中心として集落が形成されている。糲買場遺跡では、青銅製の帶金具(丸鞆)が出土しており、類例は市内常名の弁才天遺跡でも出土している。手野地区では、五斗落遺跡(37)、大儘遺跡(38)、弁ノ内遺跡(40)において堅穴建物跡が検出されている。

中世・近世

手野城跡(34)は、戦国時代に小田氏の家臣、中根氏の居城であり、土塁、堀が残されている。また、井戸山遺跡(61)は15世紀後半から16世紀の井戸跡であり、東京都西部から埼玉県に分布する、「まいまいいず井戸」と呼ばれる地面をすりばち状に掘りくぼめた大型井戸と類似している。県内に類例がなく、特異な遺構である。このほか、手野地区には八坂東貝塚(62)、宿後貝塚(64)、天王場貝塚(67)といった中世のヤマトシジミ貝塚が残されている。

なお本書で報告するように、神立遺跡では中世の地下式坑が発見されている。本遺跡の範囲は、小田氏の部将菅谷氏の菩提寺である神竜寺の前身、神立寺があったといわれており、本調査で発見された遺構も、神立寺や神立館跡と関係するのかもしれない。

引用文献

- 土浦市史編さん委員会編1975『土浦市史』土浦市
土浦市遺跡調査会編1991『井戸山遺跡確認調査報告書』土浦市教育委員会
神立平遺跡調査会編2009『神立平遺跡』土浦市教育委員会
上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2007『神立遺跡』『土浦市 上高津貝塚ふるさと歴史の
広場年報』第12号—2005(平成17)年度 43-53頁
茨城県教育財団編1987『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団
文化財調査報告第43集 茨城県教育財団
土浦市遺跡調査会編1991『木田余台I』土浦市教育委員会
滝沢 誠2017『霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳—土浦市王塚古墳の測量調査—』『筑波大学
先史学・考古学研究』第28号 77-94頁
土浦市遺跡調査会編2002『木田余台II』土浦市教育委員会
上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2016『棚買場遺跡(第2次調査)』土浦市教育委員会

第3章 遺構と遺物

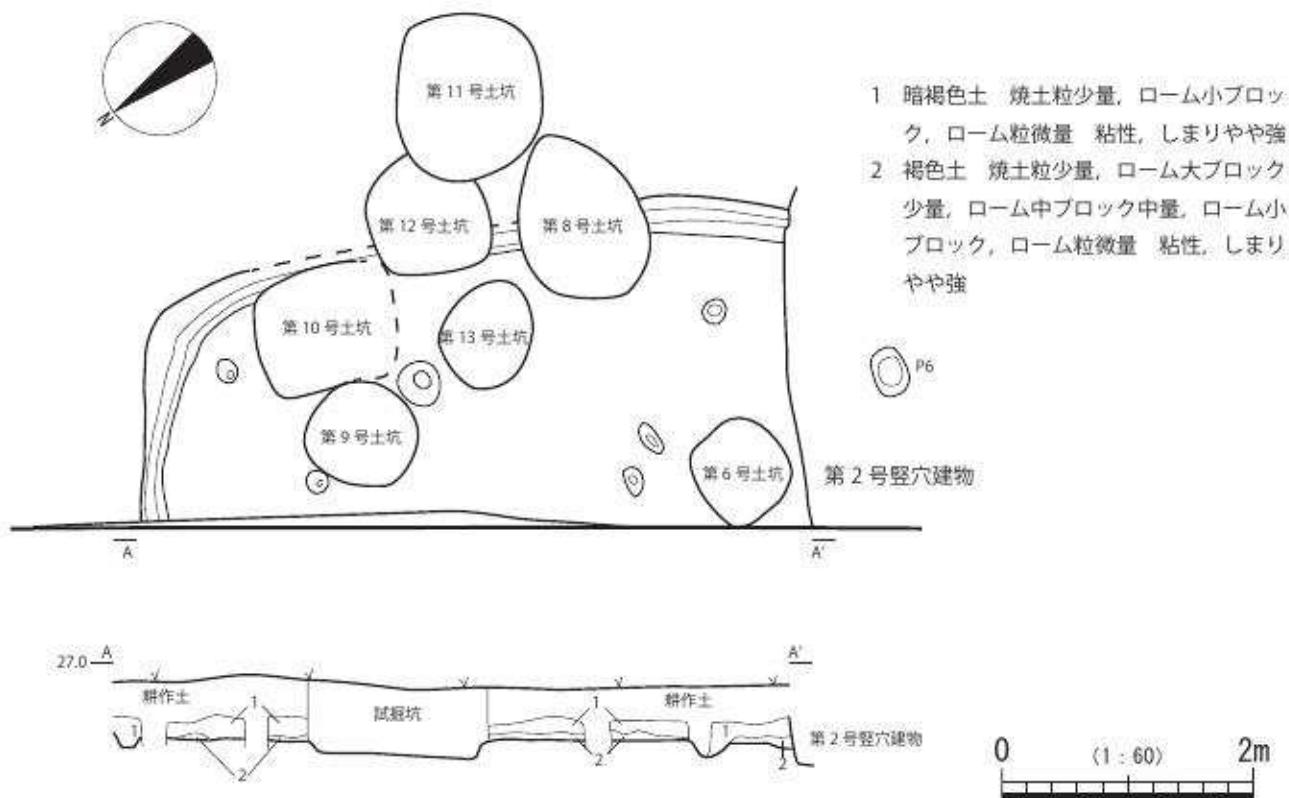
第1節 繩文時代

今回の調査で発見された縄文時代の遺構は、竪穴建物4軒(SI1～4)、土坑14基(SK1～13,18)である(第2図)。なお第14～16号土坑は整理の過程で住居内ピットや倒木痕と判断したため、欠番である。第17、19号土坑は第2節で記載する。

1 竪穴建物

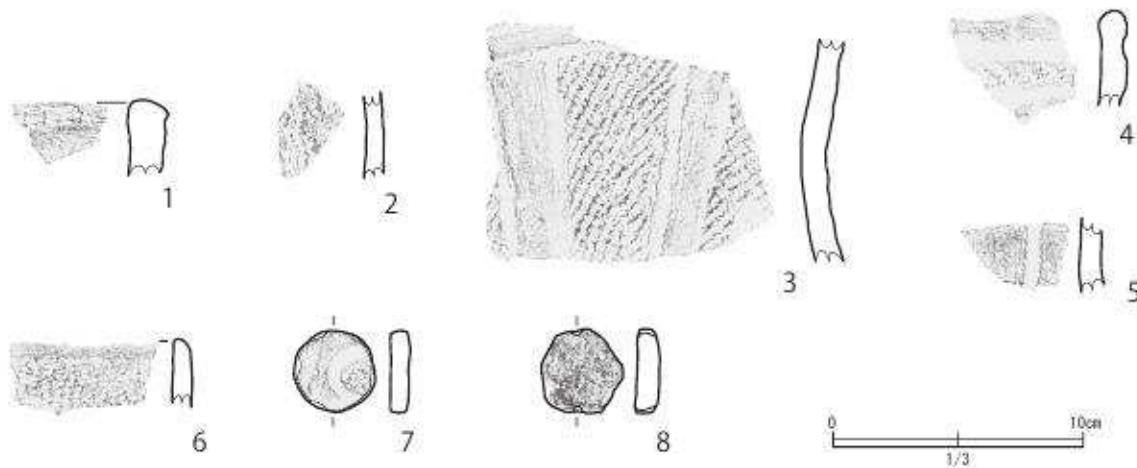
第1号竪穴建物【SI1 第5図】

位置 調査区中央、北東壁にかかって検出された。南西側を第2号竪穴建物に切られるほか、第6、8～13号土坑も本跡より後に構築されている。
規模 検出されたのは約2.6×5.4mの範囲で、1辺6m程度の方形あるいは隅丸方形を呈すると考えられる。
壁 調査区壁面で確認された残存高は25cm程度である。
床 床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面は検出されなかった。床面の外周には幅20cm程度の周溝が検出された。
柱穴 不規則な配置の小ピットが6基検出されているが、柱穴とはみなしづらい。第2号竪穴建物内のP6が、規模、配置から主柱穴の一つと考えられる。
炉 検出されなかった。
覆土 明瞭な堆積構造は示さないものの、ロームの混入はさほど多くないことから、自然に埋没したものであろうか。
遺物(第6図、第2表) 縄文時代中期の土器片が出土している。1、2は押し引き文や鋸歯状文が施される阿玉台式土器。3は磨消繩文が施される加曾利E2式土器。4は波状口縁の破片、5は磨かれた無文地に単沈線が施されるもので加曾利E式。6は後期であろうか。7は加曾利



第5図 第1号竪穴建物

E式の土器片を利用した土製円盤。破断面がよく磨られており滑らかである。8は無文の土器片を利用した土器片錘。所見 遺構の規模から、縄文時代の竪穴住居跡であろう。加曾利E2式の第2号竪穴建物、加曾利E1式の第8号土坑に切られていることと、出土遺物から帰属時期は縄文時代中期中葉以前と考えられる。



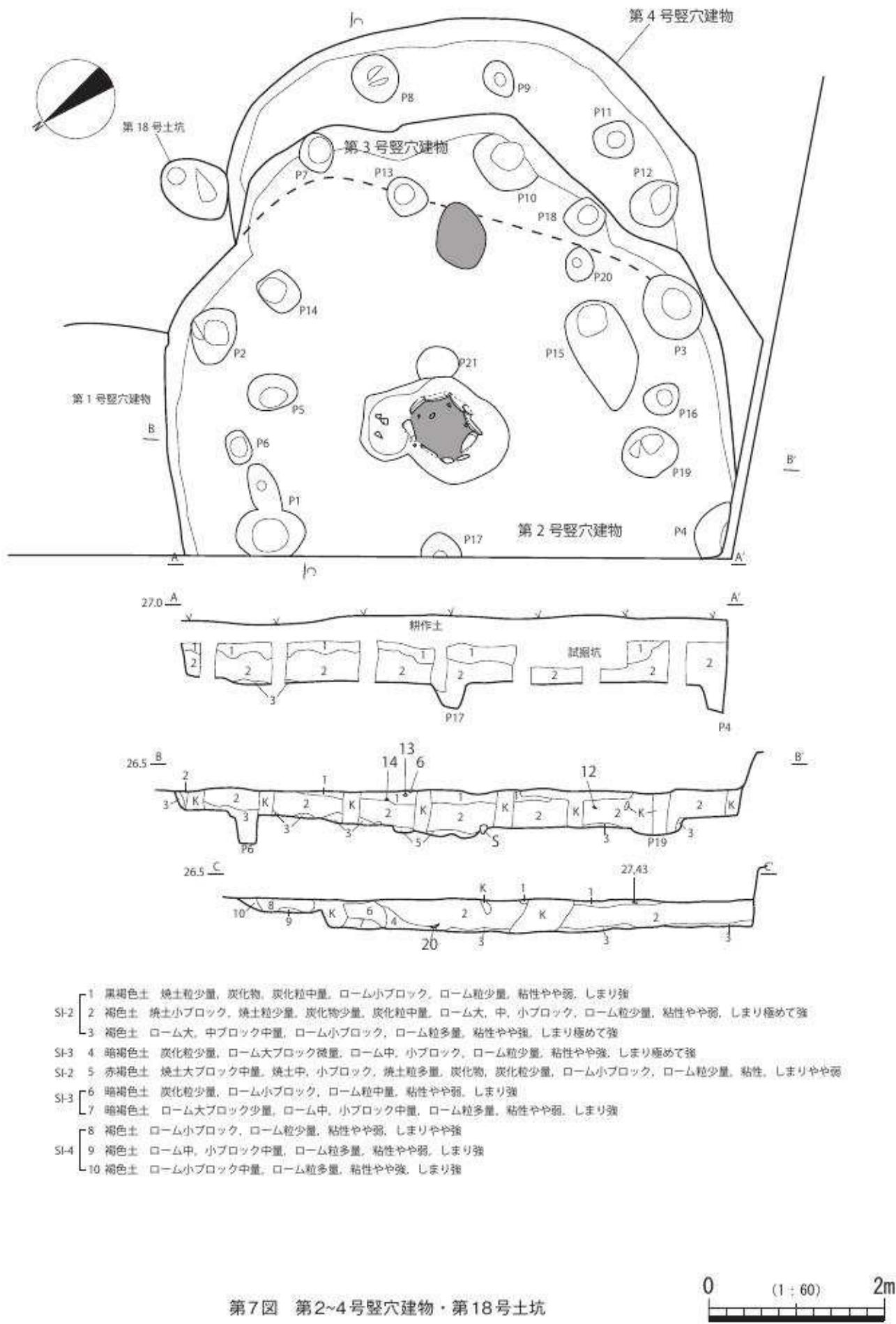
第6図 第1号竪穴建物出土遺物

第2表 第1号竪穴建物出土土製品観察表

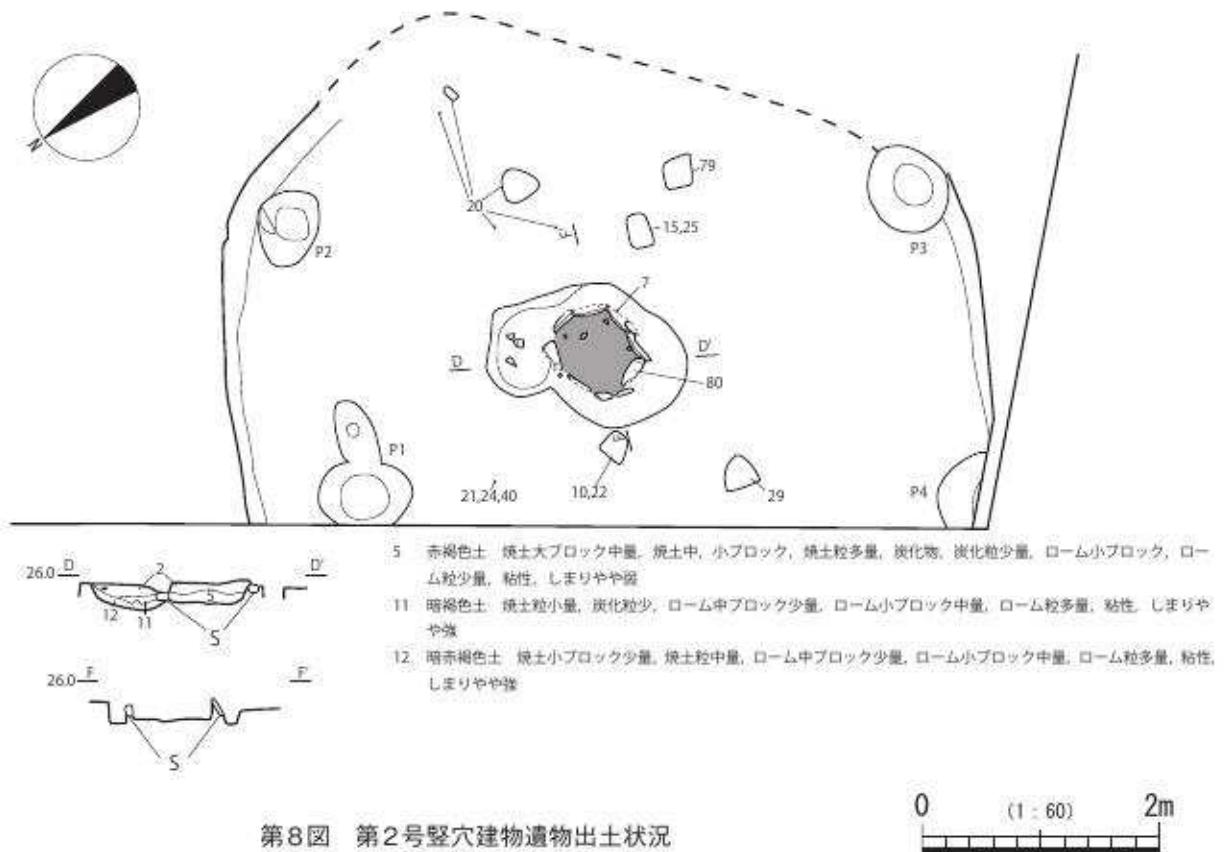
番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	文様・整形の特徴	時期
7	土製品	土製円盤	9.7	3.2	3.2	0.8	沈線による区画内に縄文を施す。破断面はよく磨られており滑らかである。	加曾利E
8	土製品	土器片錘	11	3.4	3.2	0.8	無文。	中期?

第2号竪穴建物【SI2 第7、8図】

位置 調査区西隅に位置し、第1号竪穴建物と第3号竪穴建物を切っている。規模 約6m × 4m、全体の3分の2程度を検出した。直径6m程度の円形、あるいは一辺6m程度の隅丸方形を呈すると思われる。壁 残存高は20～35cm程度で、急角度で立ち上がる。床 北東から南西方向に若干傾斜するが、ほぼ平坦である。柱穴 本跡に伴うピットはP1-4である。いずれも大型で、配置から主柱穴と考えられる。炉 建物跡の中央に石窯炉が検出された。掘り方は1.4m × 1.2m程度の瓢型を呈する。北側には石窯が見られないが、雲母片岩の小破片が残されていることから、炉石の抜き取りが行われたと考えられる。現存する石窯は直径80cm程度で、一個体30cmほどの雲母片岩や花崗岩の板石を9枚並べている。石皿を転用したものも見られた。これらの炉石は強く被熱して劣化しており、とくに雲母片岩は取り上げると粉々に砕けてしまうほどであった。覆土 3層に分層された。3層、2層はローム粒を多量に含み、堅くしまっていた。1層はレンズ状の堆積構造を示し、遺物が多量に含まれる。これらのことから、竪穴建物は埋め戻されたのち(3層、2層)、窪地が捨て場として利用された(1層)可能性がある。遺物(図9～14、表3、4) 縄文時代中期の土器片を中心として、多量の遺物が出土した。1、2は雲母を多量に含み、押引文が施される阿玉台II式。3は円形のくぼみがつけられる扇状把手で阿玉台IV式。4、5は爪形文をもつ隆帯がみられる

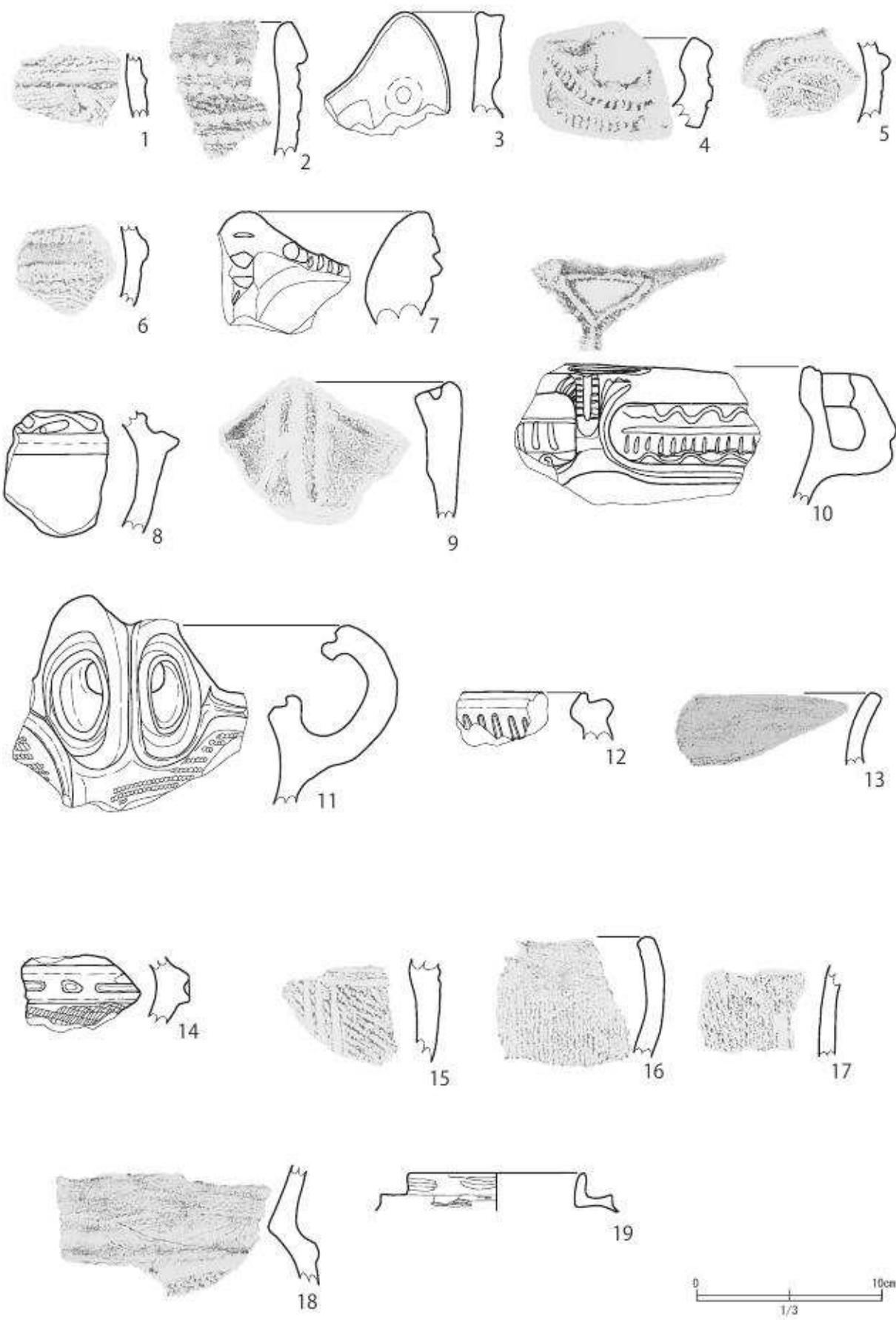


第7図 第2~4号竪穴建物・第18号土坑

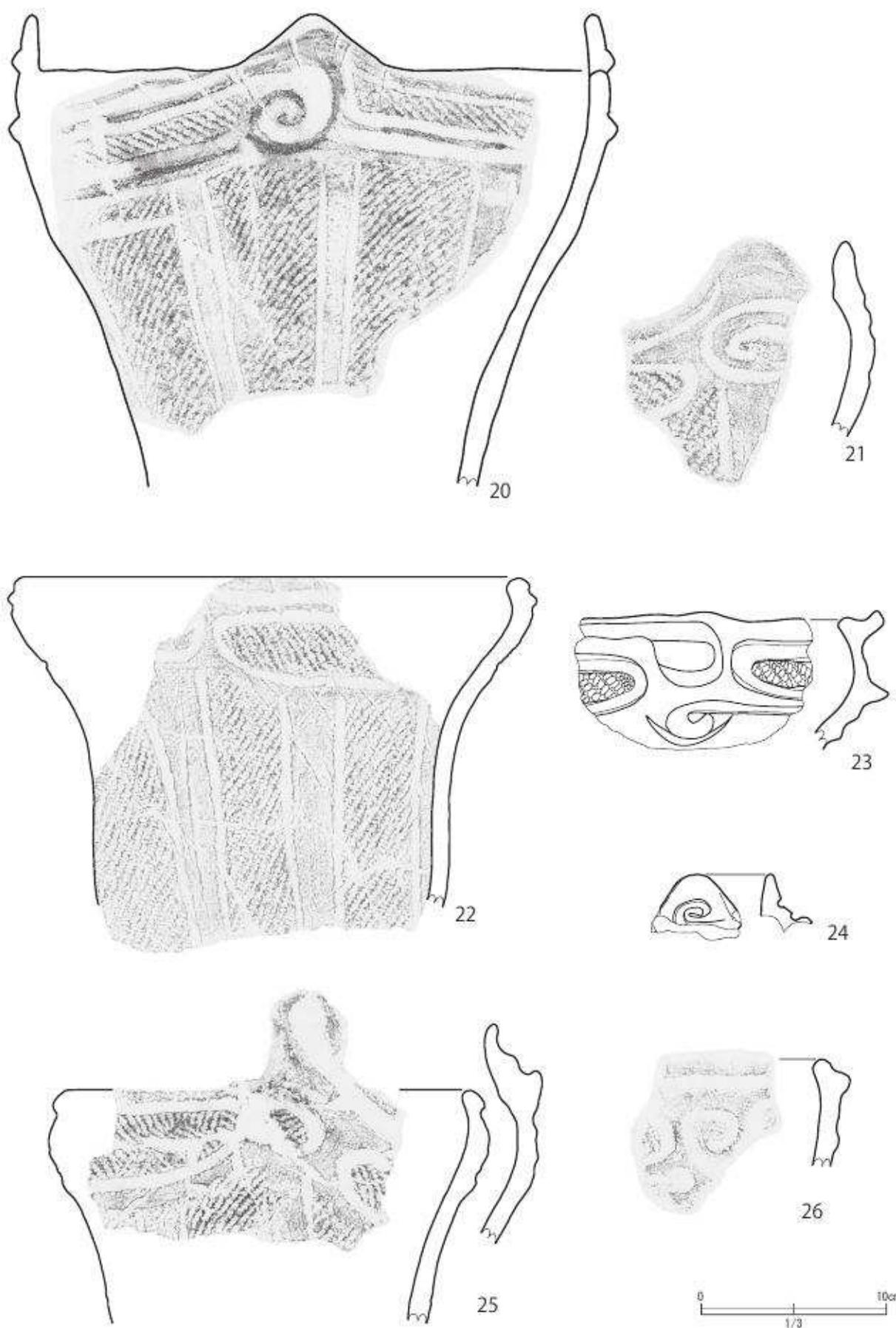


第8図 第2号竪穴建物遺物出土状況

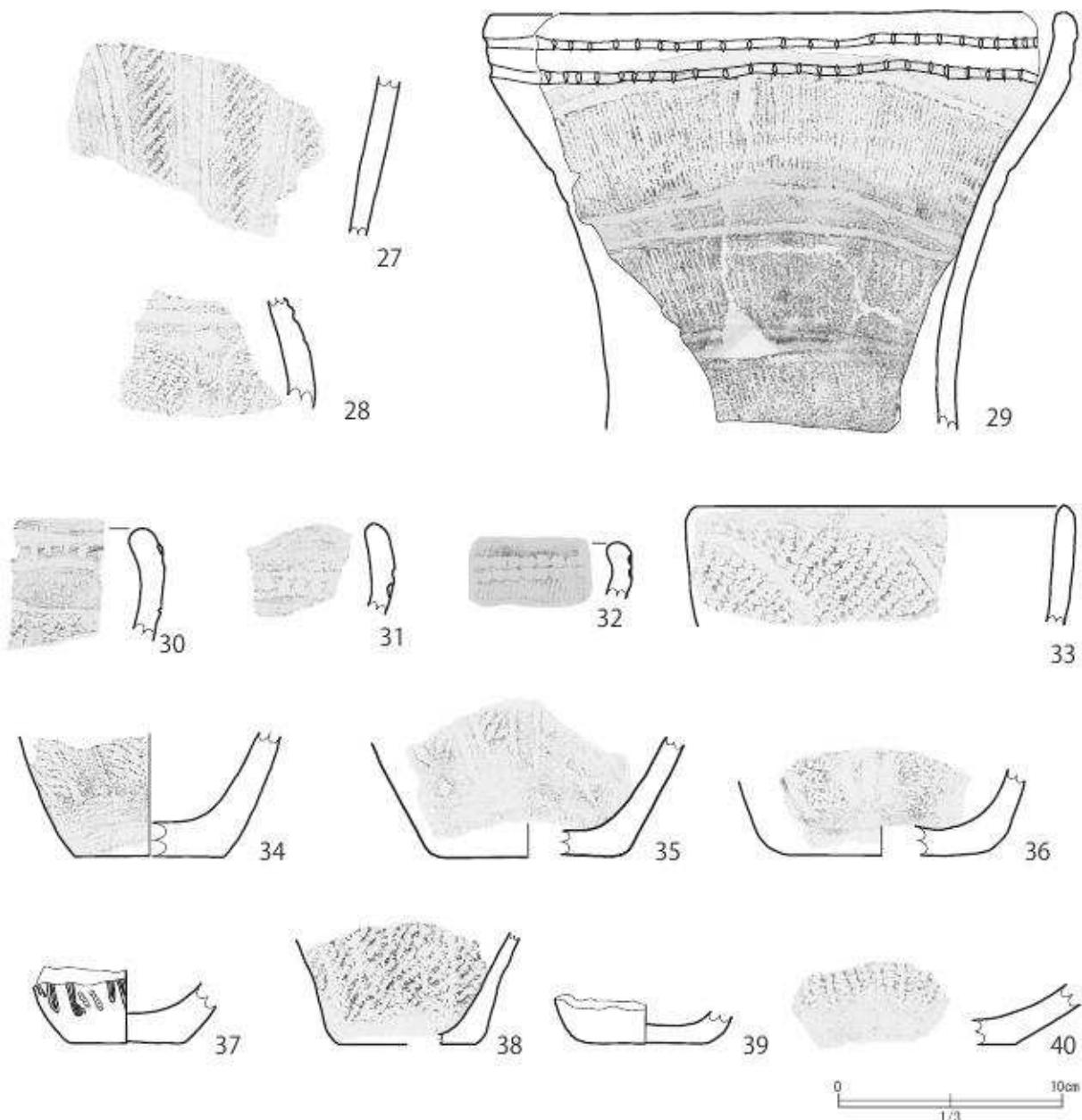
阿玉台IV式。6は隆帯に沿って爪形文が施されるもの、7は口唇部と隆帯にキザミがみられる波状口縁の頂部でともに阿玉台式か。9も波状口縁の頂部で、口唇部には沈線が施され、波頂部からは二本の隆帯が垂下する。8は交互刺突文がみられる中峠式、10は三角形の透かし穴の開いた太い把手がみられ、勝坂系の土器であろうか。11は三つの穴が開く中空把手で加曾利E1式。12～18は中期の土器と思われる。19は黒褐色を呈し、外面にはミガキが施される。下端は割れているのだが、器壁が極めて薄い。後晩期の土製品であろうか。20～28は本建物跡から出土した土器の主体となす、胴部に縦位の磨消繩文をもつ加曾利E2式である。20は復元口径30cm、残存高25.3cm、四単位の小波状口縁をもつ。口縁部文様帶には、波頂部の下に隆帯による渦巻き文が、その他の部位には沈線による区画と繩文が施される。胴部は垂下する沈線により無文帯を区画し、磨消繩文を施す。地文は無節Lで、口縁部と胴部で施文方向を90°変えており、条の傾きが逆になる。21も20と同様の文様をもち、こちらの渦巻き文は沈線で描かれる。22は復元口径36.2cm、残存高17.5cm、口縁部は平縁である。口縁部文様帶には沈線で楕円形の区画を描き、単節RL繩文を施す。胴部は磨消繩文で、やはり条の傾きが口縁部と逆になる。23は高く突出する隆帯によって楕円形の区画と渦巻き文を施す。24は波状口縁の波頂部で、沈線により渦巻き文が描かれる。25は復元口径21.4cm、残存高18.3cmで、口縁部は平縁で恐らく4単位の突起が付く。口縁部文様帶には渦巻き文と楕円形区画、胴部は磨消繩文である。口縁部と胴部で単節RL繩文の施文方向を変えている。26は太い沈線で渦巻き文が描かれる。27,28は磨消繩文の見られる胴部片。29～32は口縁部に刺突が見られる加曾利E2式。29は復元口径25cm、残存高



第9図 第2号竪穴建物出土遺物(1)



第10図 第2号竪穴建物出土遺物(2)

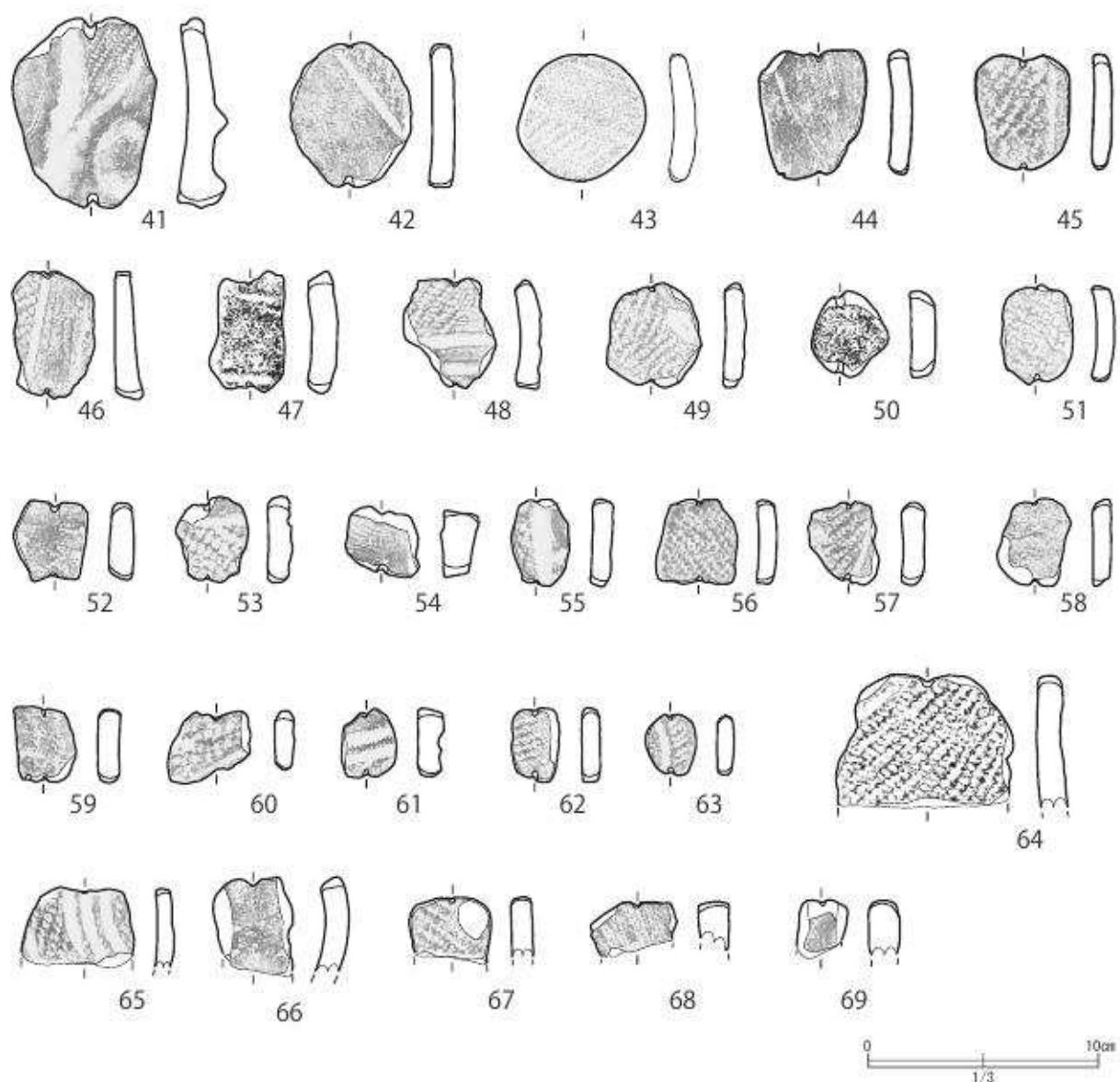


第11図 第2号竪穴建物出土遺物(3)

18.3cm、口縁部に平行な二本の沈線を引いたのち、沈線内に刺突を施す。胴部は沈線によって水平な無文帯を区画し、地文には縦位の条痕文を施す。30は割った竹管と思われる工具で、31、32は棒状工具によって刺突が施される。33は地文施文後に太い単沈線を施すもので加曾利E2式であろうか。34～40は底部で、磨消縄文の見られる34～37は加曾利E2式、その他も中期の土器であろう。

土器片錐は29点出土しており、全て中期の土器片を利用している。完形品の重量分布をみると10～15gを中心としてほぼ30g以下にまとまり、これに少数の大型品が伴うようである。

本跡では覆土の一部をふるいにかけたため、比較的多くの剥片石器を検出した。70、71は小型の凹基無茎錐で、70が黒曜石製、71がチャート製である。72はチャートの剥片で、

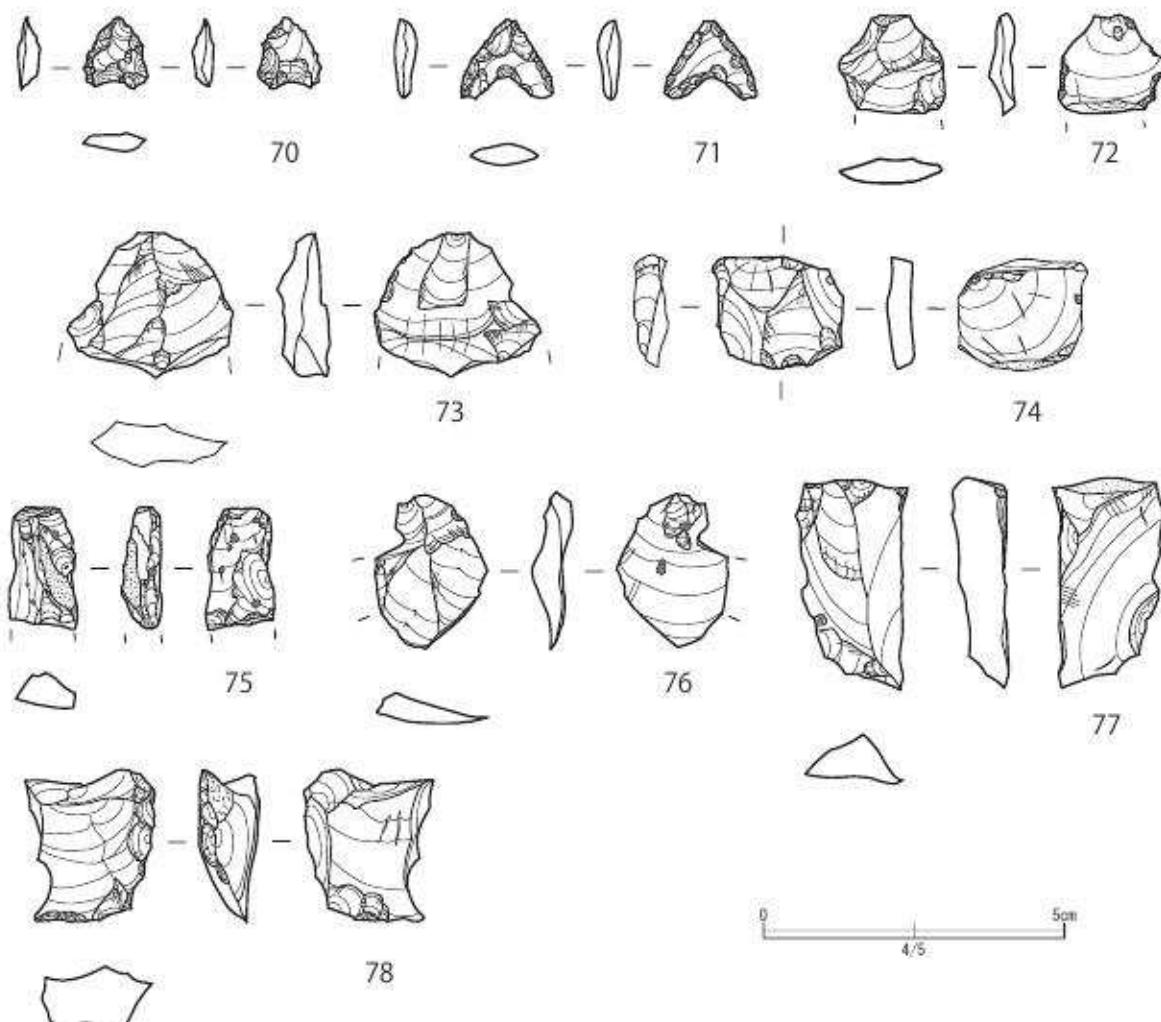


第12図 第2号竪穴建物出土遺物(4)

押圧剥離が見られることから石鎌の未成品か。73、74は両極技法による剥離がみられる剥片でそれぞれチャート、玉髓製。75、76はともに黒曜石製の剥片だが、75は球顆が多いのに対して76は透明度が高い。77は蝶面を残す剥片、78は剥離が進んだ残核である。79は大型の石皿で、磨面は平滑で中央部がわずかに凹む。磨面端部に1箇所の凹みをもつ。裏面は蜂の巣石状に凹部や敲打痕が多数みられる。花崗岩製で、風化が著しい。80は炉石として転用されていた石皿で、表面は良く研磨され一部に敲打痕や凹部が見られる。裏面は図右上におびただしい敲打痕が見られるのに対し、図左下はよく研磨され平滑である。花崗岩製で、著しく被熱しているが、これは炉石としての使用痕であろう。所見 石囲炉が検出されていることから、本建物跡は縄文時代の竪穴住居である。その時期は、床面直上より20や29といった大型破片が出土していることから、加曾利E2式期と考えられる。

第3表 第2号竪穴建物出土土器片錐観察表

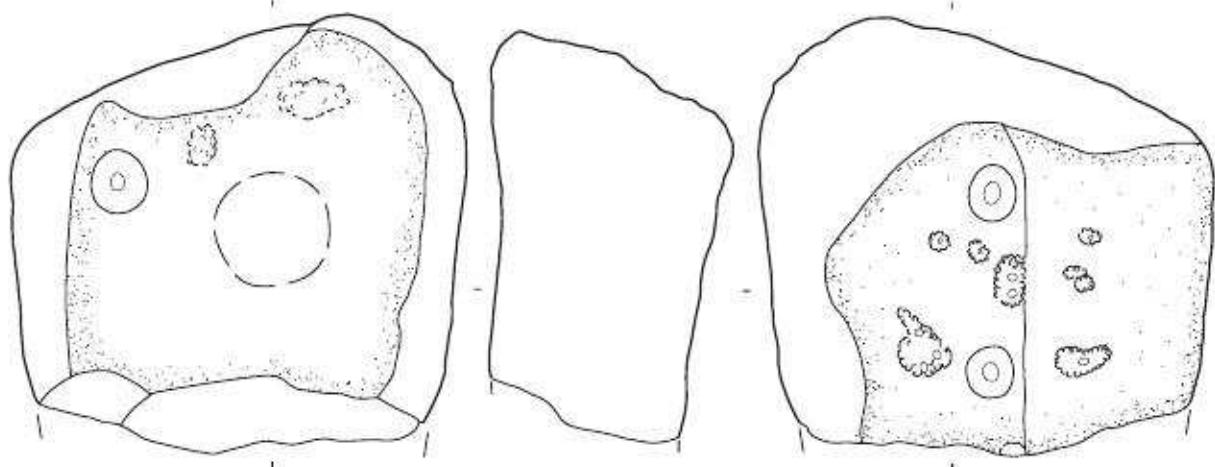
番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	文様	時期
41	土製品	土器片錐	78.9	8.1	6.1	2.0	隆帶による渦巻き文。地文単節RL繩文。	加曾利E
42	土製品	土器片錐	40.5	(6.2)	5.2	10	単節LR磨消繩文。	加曾利E2
43	土製品	土器片錐	35.3	5.4	5.4	1	沈線で無文帯を区画。単節LR磨消繩文。	加曾利E2
44	土製品	土器片錐	29	5.5	4.6	0.9	無文、口縁部。	中期
45	土製品	土器片錐	22.8	4.9	4.1	0.8	単節LR磨消繩文。	加曾利E2
46	土製品	土器片錐	20.8	5.5	3.4	1	単節LR磨消繩文。	加曾利E2
47	土製品	土器片錐	20.5	5.2	3.2	1.1	沈線。磨消繩文の磨消部区画か。	中期
48	土製品	土器片錐	19.2	4.7	3.8	0.8	単節RL磨消繩文。	加曾利E2
49	土製品	土器片錐	18.2	4.5	4.1	0.9	単節LR繩文。	中期?
50	土製品	土器片錐	13.9	3.7	3.3	1	無文。	中期
51	土製品	土器片錐	13.6	4.2	3	0.8	単節LR繩文。	中期
52	土製品	土器片錐	13.5	3.5	3.1	1.1	無文、口縁部。	中期
53	土製品	土器片錐	13.5	3.7	3.1	1	単節LR磨消繩文。	加曾利E2
54	土製品	土器片錐	12.7	3.1	3.1	1.5	無文、底部付近。	中期
55	土製品	土器片錐	12.1	3.8	2.5	0.8	隆帶。	中期
56	土製品	土器片錐	11.4	3.6	2.9	0.8	LRL複節繩文。	中期?
57	土製品	土器片錐	10.1	3.8	2.8	0.8	無文。	中期?
58	土製品	土器片錐	10.7	3.6	2.9	0.9	単節LR繩文、沈線。	中期
59	土製品	土器片錐	9.9	3.4	2.8	0.9	無文。	中期?
60	土製品	土器片錐	9.2	3.2	3.5	0.8	単節RL繩文。	中期
61	土製品	土器片錐	8.3	2.9	2.4	1.1	沈線。	中期?
62	土製品	土器片錐	6.5	3.2	2	0.8	単節RL繩文。	中期
63	土製品	土器片錐	4.5	2.6	2.2	0.8	条縞文、沈線。	中期
64	土製品	土器片錐	68.9	5.7	7.5	1	単節LR繩文。	中期
65	土製品	土器片錐	16.9	(3.4)	4.8	0.7	三本一組の沈線、複節LRL繩文。	加曾利E1
66	土製品	土器片錐	18.1	(4.3)	3.4	1	無文、底部。	中期
67	土製品	土器片錐	10.8	(2.9)	3.5	0.9	単節RL繩文。	中期
68	土製品	土器片錐	11.4	(2.1)	3.6	1.3	条痕文。	中期
69	土製品	土器片錐	7.5	(2.5)	2.1	1.3	無文。	中期?



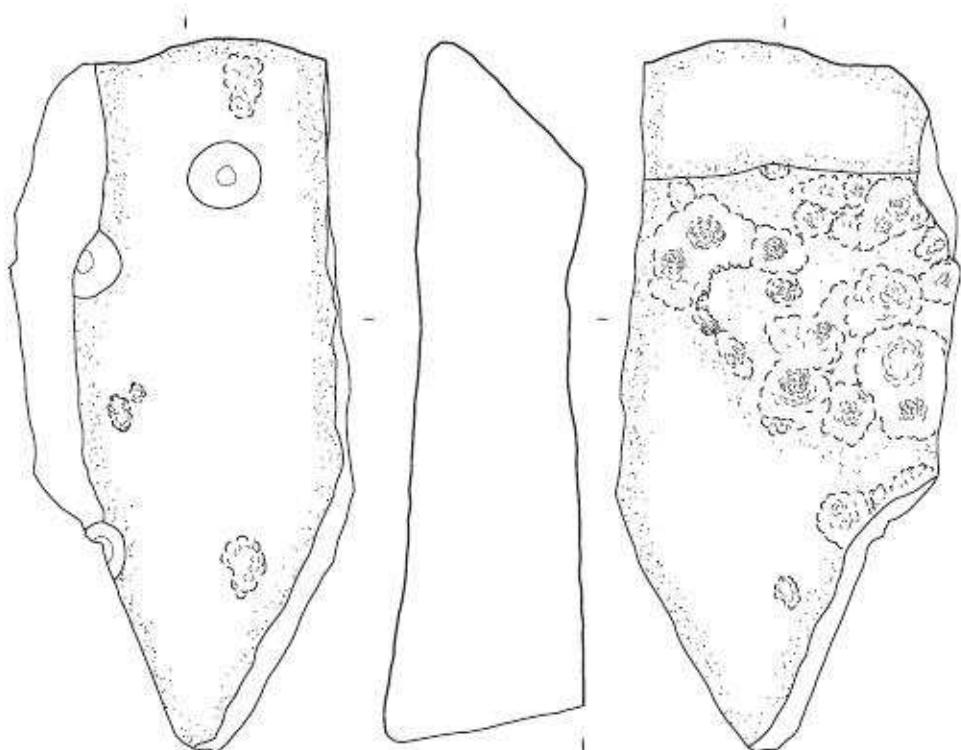
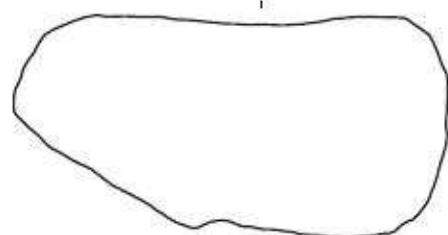
第13図 第2号豊穴建物出土遺物(5)

第4表 第2号豊穴建物出土石器観察表

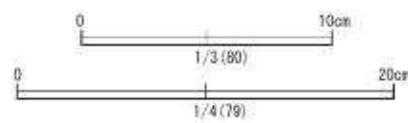
番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	整形の特徴	石材
70	石器	石錐	0.4	1.2	1.1	3.5	側縁に押圧剥離を施し、基部はわずかに凹む。小型の四基無茎錐。押圧剥離は裏面では全面に及んでおらず。未成品あるいはリタッチの途中か。	黒曜石
71	石器	石錐	0.3	1.3	1.5	0.3	小型の四基無茎錐。	チャート
72	石器	剥片	1.2	1.6	1.75	0.4	両側縁に微細剥離が認められ、腹面に押圧剥離が施される。下端部は折れている。石錐未成品か。	チャート
73	石器	剥片	5.7	2.4	2.7	0.7	上端に激しい打撃痕を残し、下部端は折れている。腹面に両極技法による剥離がみられる。	チャート
74	石器	楔形石器	2.5	18.5	2.1	0.4	まず左下と右上から、次いで上下からの2回の両極技法による剥離がみられる。	玉髓
75	石器	剥片	1.2	2	1.1	0.6	上端は敲打によるつぶれ。下端は折れている。	黒曜石
76	石器	剥片	1.6	2.1	1.9	0.6	右上側縁に微細剥離が認められる。左側縁を欠損する。	黒曜石
77	石器	剥片	5.7	3.45	1.8	0.8	上端に縫面を残し、そこに執拗に打撃し、敲打痕を残す。	チャート
78	石器	石核	7.1	2.4	2.1	1.15	上端から右側縁にかけて、敲打によるつぶれがみられる。	玉髓
79	石器	石皿	約10kg	22.5	24	11.4	大型の石皿。表面は磨面で、中央部がわずかに凹む。磨面の端部に1箇所、凹部が認められる。裏面は後をもち、縁の巣石状の凹部が多数みられる。風化が著しい。	花崗岩
80	石器	石皿	約4kg	(28.1)	(12.7)	6.8	大型の石皿破片。表面は全面よく研磨され、一部に敲打痕や凹部が見られる。裏面は、図で右上の部分におびただしい敲打痕が見られるのに対して、左下はよく研磨され平滑である。石窯炉に転用されたため、著しく被熱している。	花崗岩



79



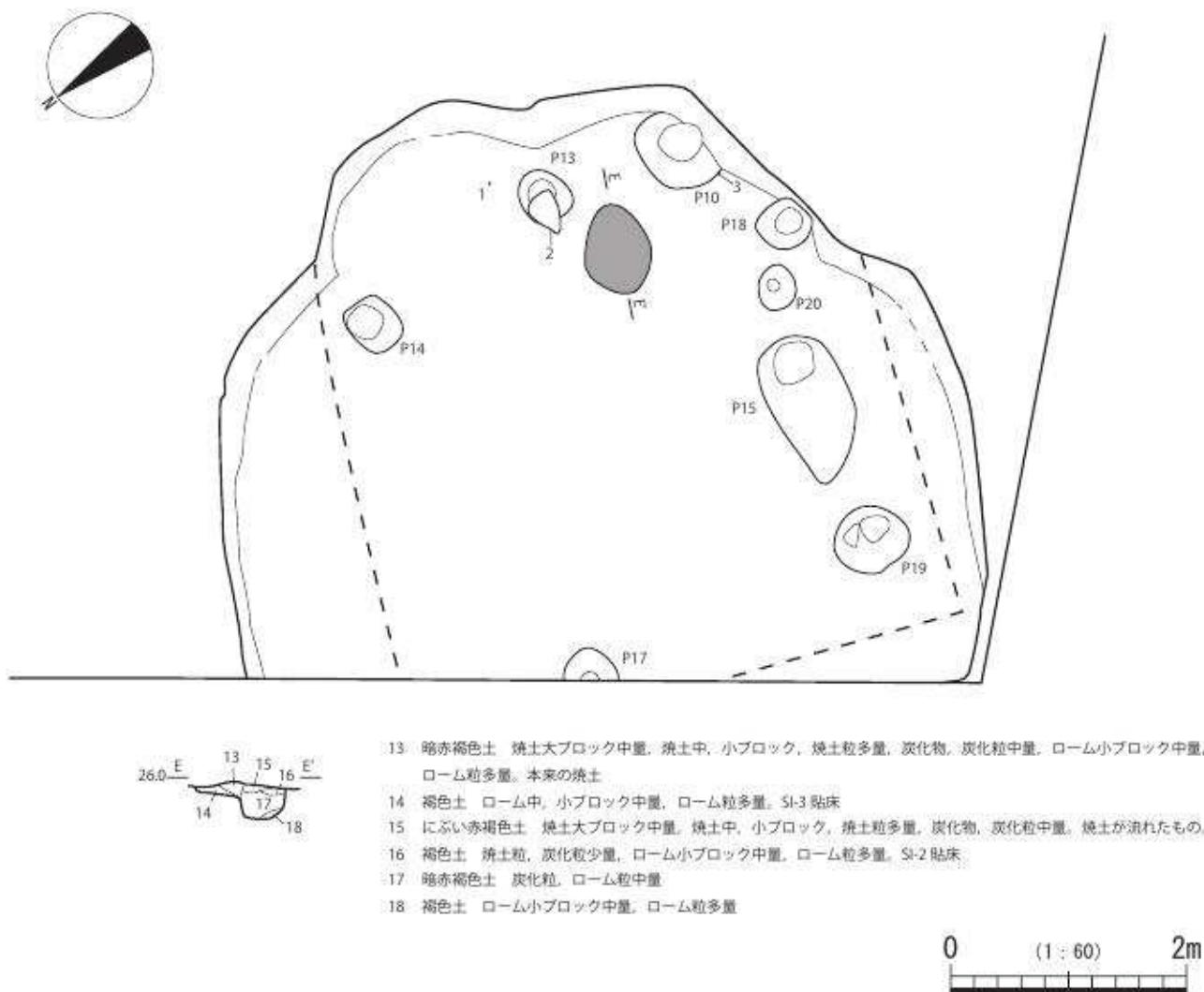
80



第14図 第2号竪穴建物出土遺物(6)

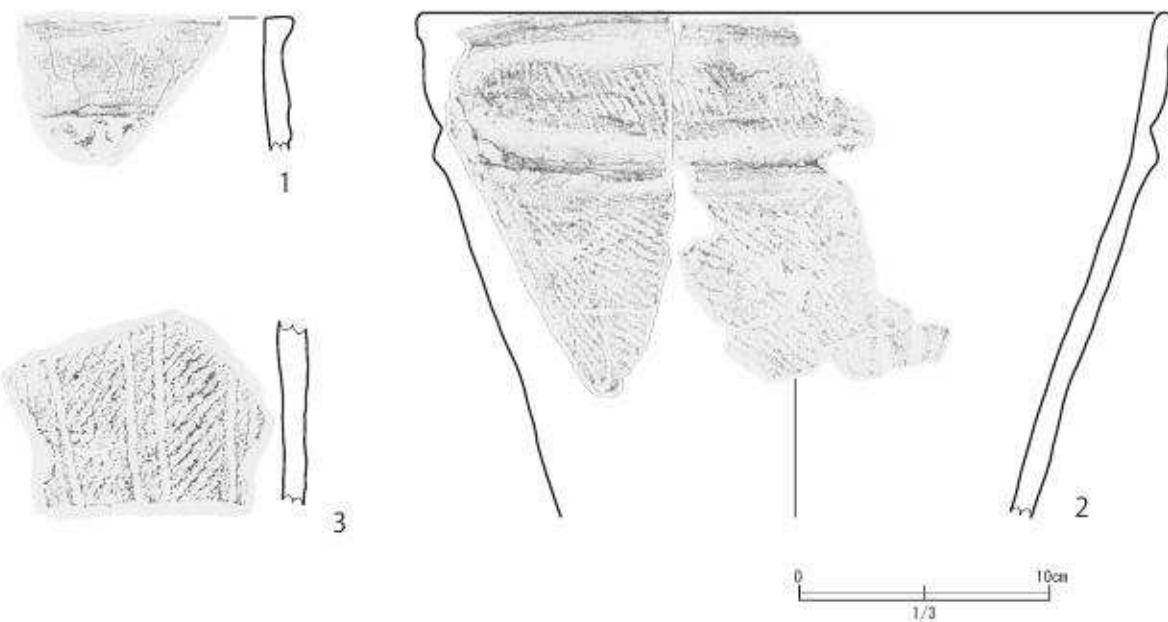
第3号竪穴建物【SI3 図7、15】

位置 調査区西隅に位置し、第4号竪穴建物を切り、第2号竪穴建物に切られる。規模 残存状況が良くないが、第2号竪穴建物よりやや小さく、1辺5m程度か。壁 残存高20cm程度、急角度で立ち上がる。床 残存状況が悪いが、平坦で、第2号竪穴建物とほぼ同じ高さである。**柱穴** 本跡に伴うピットはP14, 13, 10, 18, 20, 15, 19, 17であり、P14, 10, 15, 19, 17は規模から主柱穴と考えられる。**炉** 建物跡の南寄りに地床炉が検出された。焼土の分布範囲は70×60cm程度の楕円形だが、断面図に現れているように、第2号竪穴建物に切られているため、実際には半分ほどしか残存していない。**覆土** 良好な断面が得られていないが、覆土(第7図4、6、7層)は下層のほうがロームを多く含んでおり、自然に埋没したものか。**遺物(第16図)** 繩文時代中期の土器片が若干出土した。1は口縁部に幅広の無文帯を持ち、その下に交互刺突文を施す中峠式。2は復元口径29.4cm、残存口径20cmの深鉢形土器で、口縁部は平縁である。口縁部文様帶には低い隆帯による楕円形の区画を施し、無節Rの繩文を充填する。胴部は垂下する沈線によって無文帯を区画する磨消繩文で、口縁部と胴部で地文の施文方向を変えている。加曾利E2式。3は磨消繩文のみられる胴部片で加曾利E2式。所



第15図 第3号竪穴建物遺物出土状況

見 炉が検出されたことと出土遺物から、加曾利E2式の竪穴住居跡と考えられる。

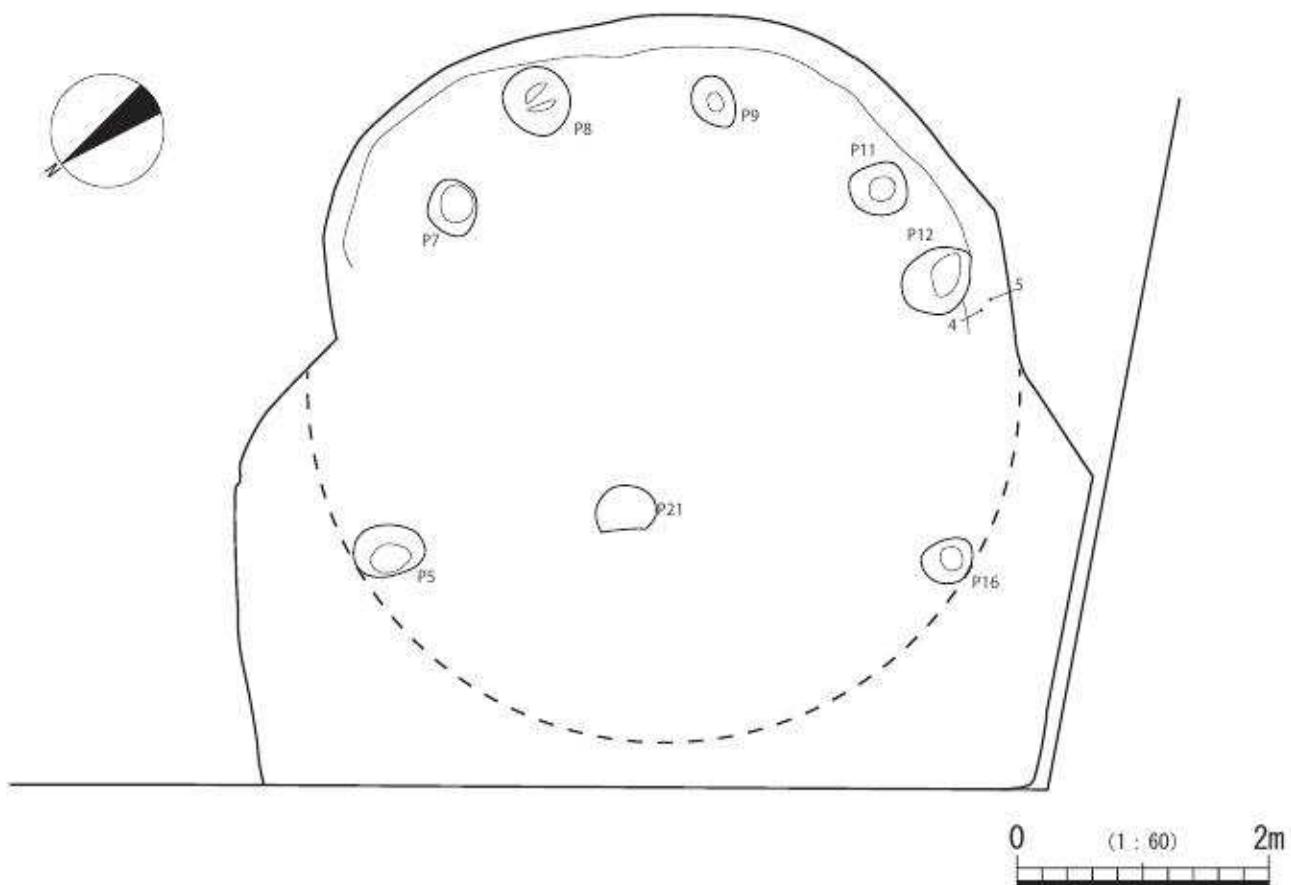


第16図 第3号竪穴建物出土遺物

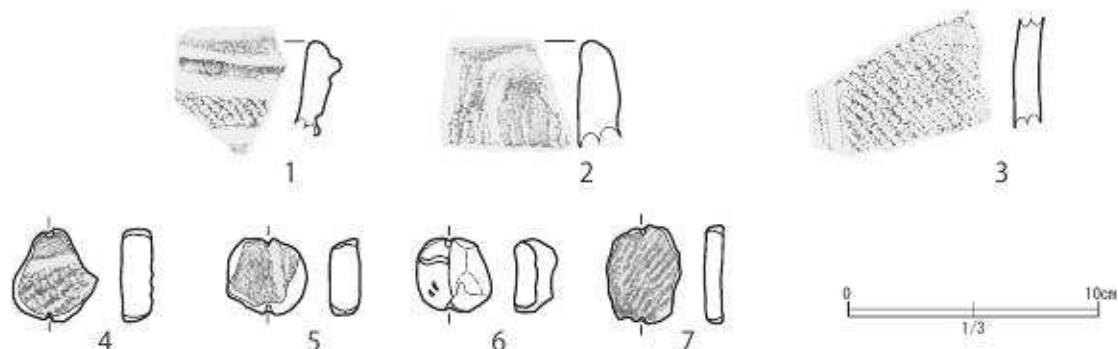
第4号竪穴建物【SI4 図7、17】

位置 調査区西隅に位置し、第3号竪穴建物に切られる。規模 残存部分から、直径5m程度の円形と推定される。壁 残存高15～20cm程度、緩やかに立ち上がる。床 平坦で、第2号、第3号竪穴建物より20cmほど高い位置にある。柱穴 本跡に伴うピットはP5、7、8、9、11、12、16、21と推定され、竪穴建物の壁際にそって配置された柱穴と考えられる。

炉 検出されていない。覆土 良好的な断面が得られていないが、壁際から漸次堆積した様相を示していることから(第7図8～10)、自然堆積か。遺物(第18図、第5表) 繩文時代中期の土器片が若干出土した。1は幅の狭い隆帯と沈線による区画内に、単節RL繩文を施す。加曾利E式。2は逆U字状の沈線が施されており、加曾利E3式もしくはE4式か。3は地文繩文に沈線が施されるもので加曾利E式か。土器片錐は小型のものが4点出土している。所見 規模、柱穴の配置から竪穴住居跡と考えられるが、時期の決め手となる遺物は出土しておらず、切りあい関係から加曾利E2式以前の遺構である。



第17図 第4号竪穴建物遺物出土状況



第18図 第4号竪穴建物出土遺物

第4表 第2号竪穴建物出土石器観察表

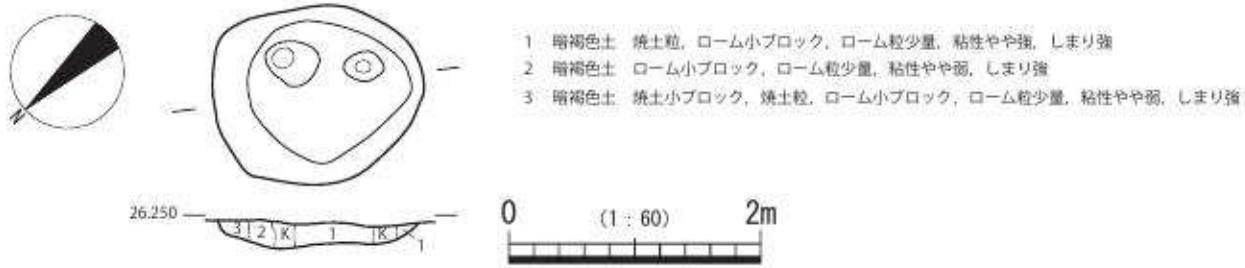
番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	文様	時期
4	土製品	土器片錐	14.2	3.7	3.4	1.2	単節RL磨消繩文。	加曾利E2
5	土製品	土器片錐	12.9	3.0	3.15	1.2	沈線。	中期
6	土製品	土器片錐	10.8	2.9	2.8	0.8	隆帶、沈線。	中期
7	土製品	土器片錐	10.3	3.9	2.9	0.6	単節RL褐色 (0段多条?)。	前・中期

2 土坑

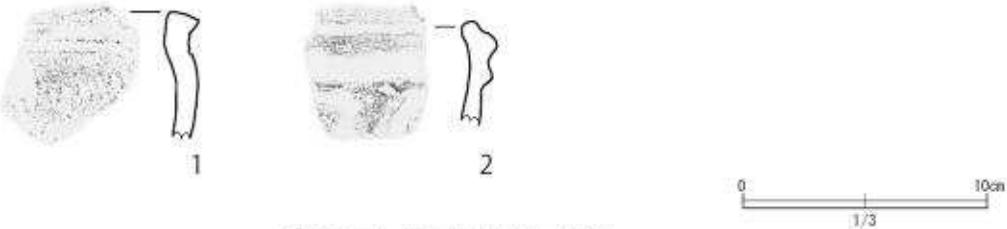
第1号土坑【SK1 第19図】

位置 調査区北隅に位置する。規模と平面形 長径1.7m、短径1.4mの不整橢円形を呈する。

断面形 確認面からの深さは20cm程度を測り、壁は不明確で緩やかに立ち上がる。覆土 3つに分層され、北側より漸次埋没したものと考えられる。遺物(第20図) 繩文土器中期の土器片が若干出土している。1は押し引き文、爪形文が見られる波状口縁部片で、阿玉台II式。2は隆帯が施され、加曾利E式であろう。所見 繩文時代中期の土坑である。



第19図 第1号土坑

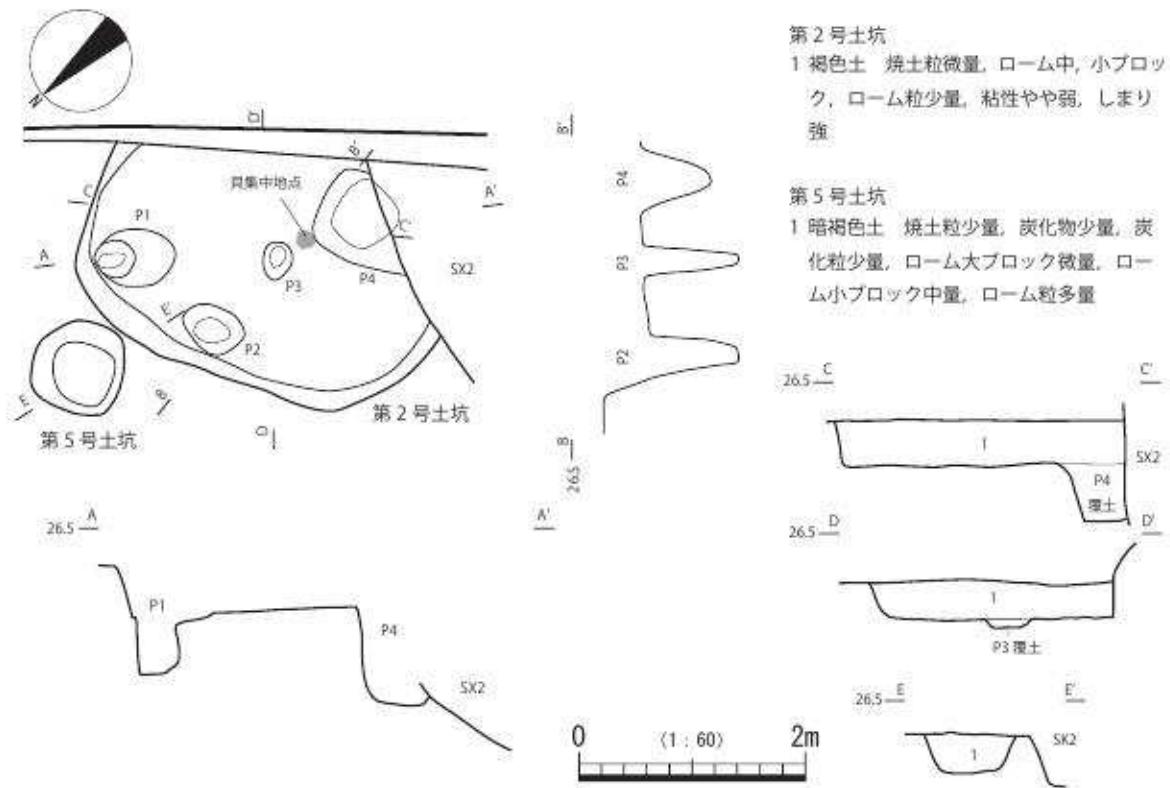


第20図 第1号土坑出土遺物

第2号土坑【SK2 第21図】

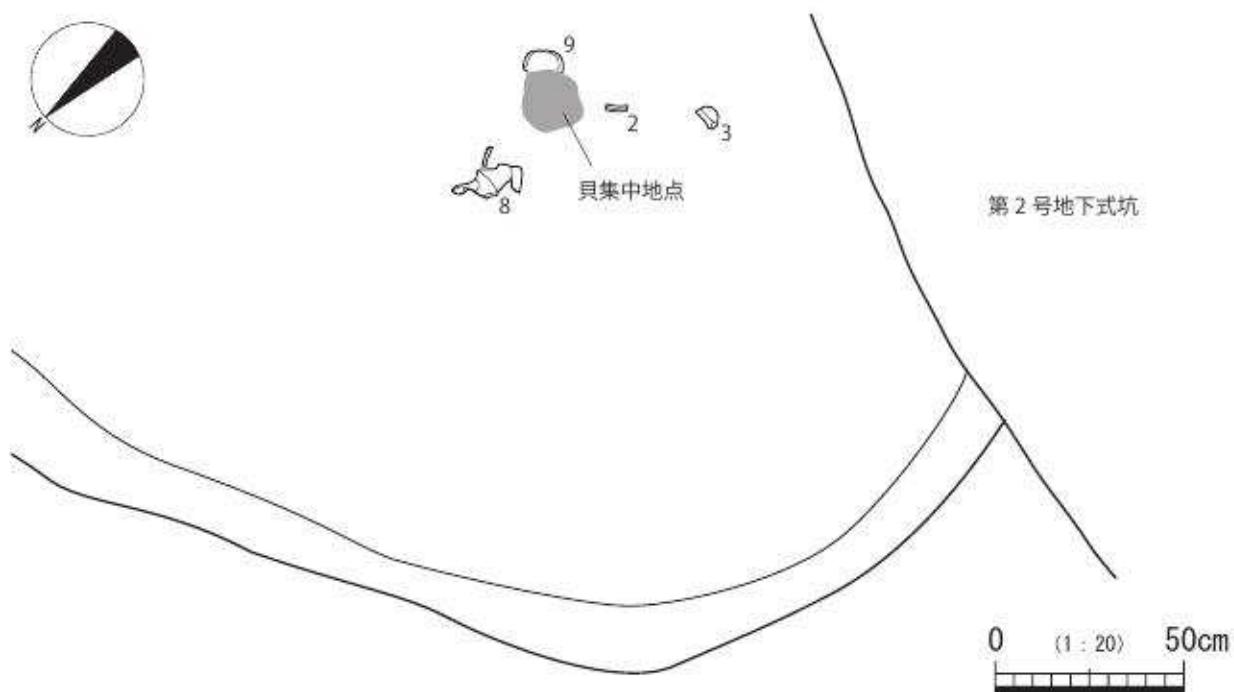
位置 調査区中央の南側に位置し、第2号地下式坑に切られる。規模と平面形 検出部分は3.3×2m程度の隅丸長方形を呈する。恐らく3.5×3.5m程度の不整円形もしくは隅丸方形を呈するとと思われる。土坑中央には20×20cm程度の貝集中地点が認められた(第22図)。至近から第23図9の底部が出土しており、土器に貝を入れてあったような印象を受ける。断面形 確認面からの深さ40cm、床面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。土坑内に4つのピットが認められ、ピット1は床面から50cm、ピット2～4は床面から90cmの深さを測る。

覆土 焼土、ローム混じりの褐色土で充填されており、埋め戻し土か。遺物(第23図) 繩文時代中期の土器片を中心として、比較的多くの遺物が出土した。1,2は隆帯に沿って2列の押し引き文が認められる阿玉台II式。3は水平な2本の隆帯の間に交互刺突文が施される中峠式。4は隆帯によって口縁部文様帶が区画され、渦巻き文と地文の条線文が施されるもので加曾利E1式。5も隆帯による区画と渦巻き文が施される土器で、同時期のものか。6,7,9は磨消繩文が施される加曾利E2式。8は復元口径19.8cm、残存高10.9cmを測る無文の深鉢で、ヘラナデが施される。中期であろう。10は逆U字状の沈線がみられ加曾利E3式であろうか。動物遺体 貝集中地点の土壤からは、ハマグリ、サルボウが検出された。貝殻の遺存

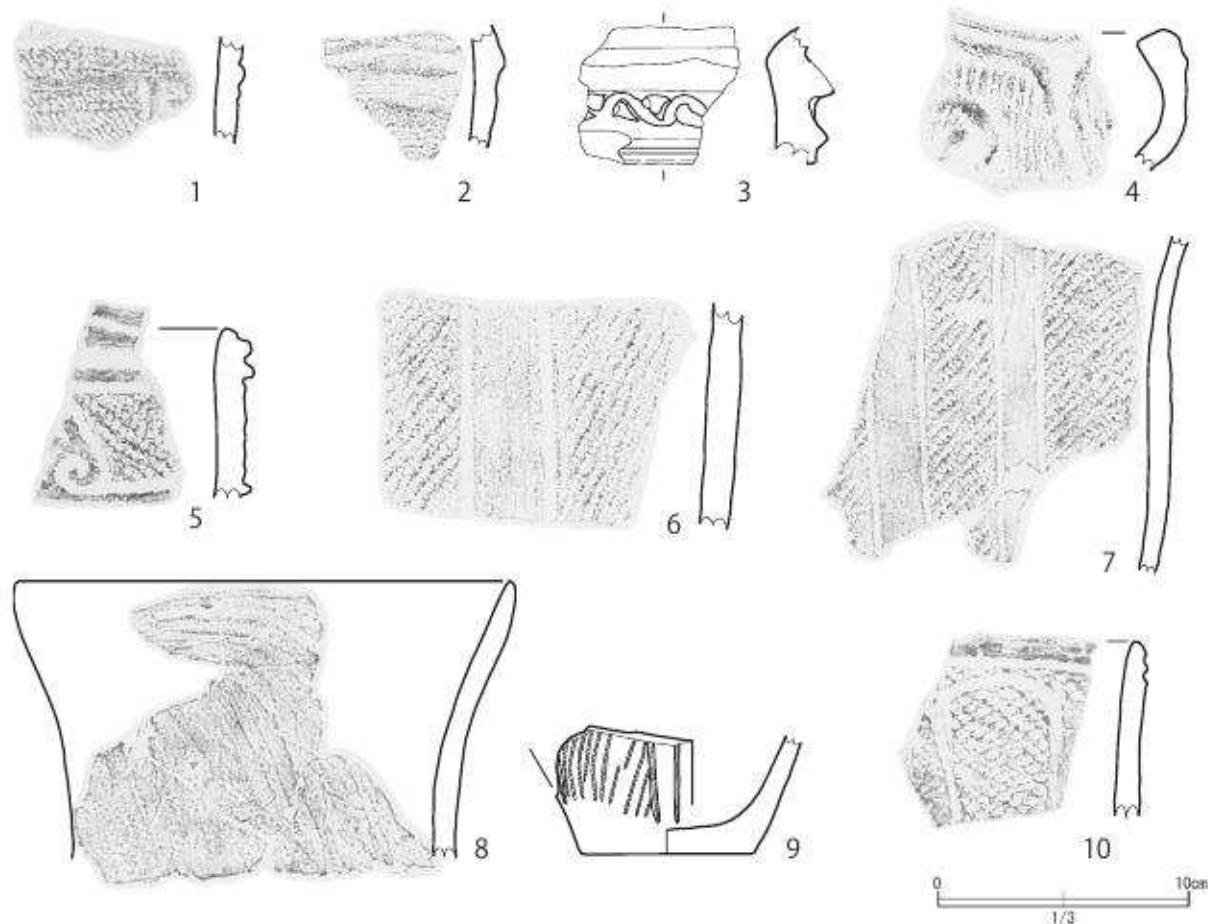


第21図 第2、5号土坑

状況は極めて悪く、ボロボロと崩れるような状態である。最小個体数はハマグリ4、サルボウ1であった。所見 規模が大きく、深いピットをもつなど建物跡の可能性もあるが、貝の廃棄がみられることから廃棄土坑と考えられる。帰属時期は、出土土器に幅のあることから中期とするにとどめたい。



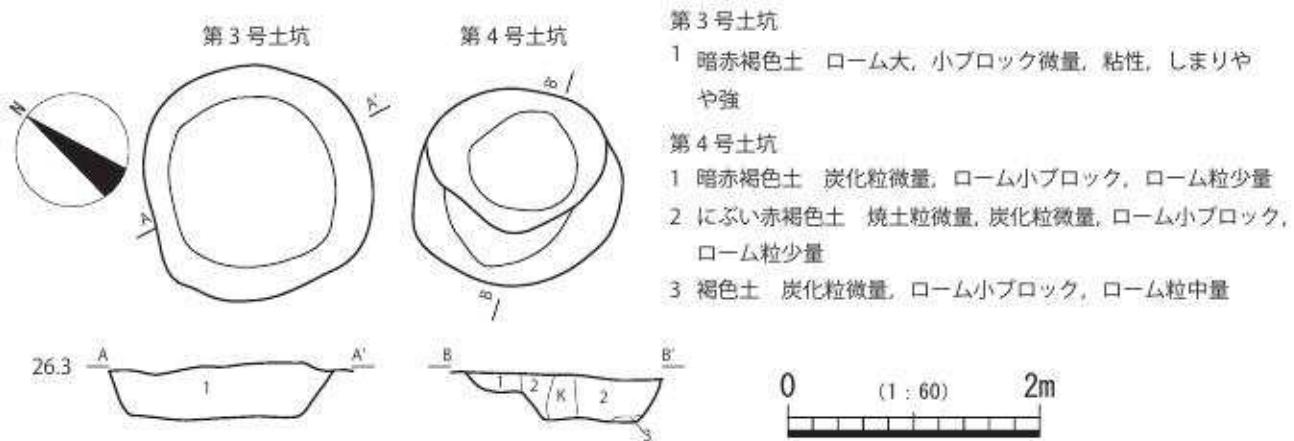
第22図 第2号土坑遺物出土状況



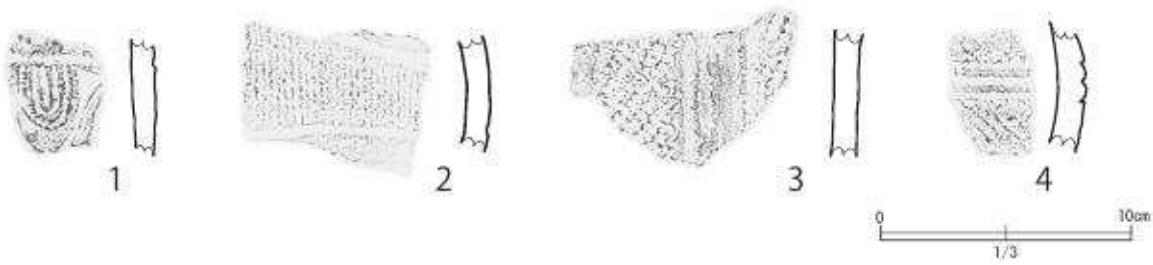
第23図 第2号土坑出土遺物

第3号土坑【SK3 第24図】

位置 調査区中央北西寄り、第1号竪穴建物の東に隣接する。規模と平面形 直径約1.9mの不整円形を呈する。断面形 確認面からの深さ40cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。**覆土** ロームブロックをわずかに含む土壤で充填されており、埋め戻したものか。**遺物(第25図)** 縄文時代中期の土器片が比較的多く出土した。1は押し引き文によるU字状のモチーフがみられる勝坂系の胴部片。2,3は無文帯が見られる加曽利E2式で、2は撲糸文、3はRLR複節縄文を地文とする。4は半裁竹管による断面かまぼこ状の隆線が施される土器で、中期であろう。**所見** 出土遺物から縄文時代中期の土坑である。



第24図 第3、4号土坑



第25図 第3号土坑出土遺物

第4号土坑【SK4 第24図】

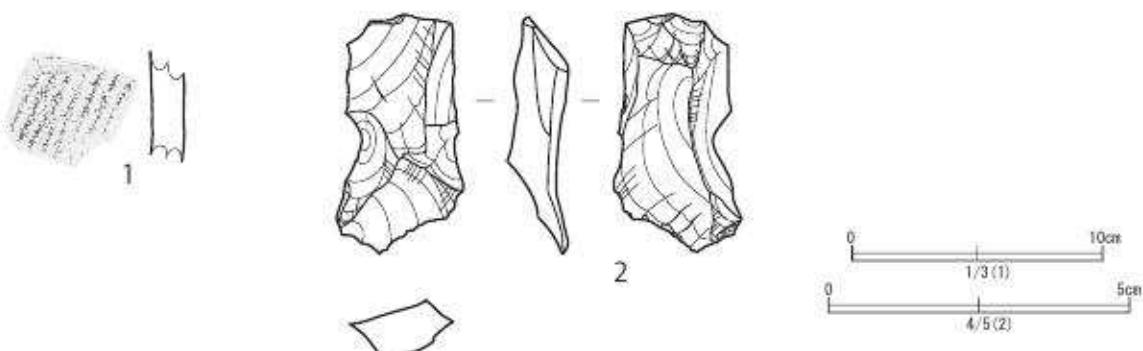
位置 調査区中央、第3号土坑と第2号地下式坑の間に位置する。規模と平面形 直径1.6m程度の円形を呈する。2つの土坑が切りあっていると思われ、新しい土坑は $1 \times 1.5\text{m}$ 程度の橢円形を呈する。**断面形** 旧土坑は確認面から深さ15cm程度で、壁はやや緩やかに立ち上がる。新土坑は深さ40cm程度、壁は旧土坑より急角度で立ち上がる。**覆土** 1が旧土坑、2、3が新土坑の埋土である。焼土やロームが見られることから埋め戻したものか。**遺物(第26図)** 繩文時代中期の土器片が若干出土した。1は隆帯が施される深鉢の破片で、加曾利E1式。**所見** 出土遺物から、繩文時代中期の土坑である。



第26図 第4号土坑出土遺物

第5号土坑【SK5 第21図】

位置 調査区南東、第2号土坑の北西に隣接する。規模と平面形 直径90cm程度の不整円形を呈する。**断面形** 確認面からの深さ30cm程度を測る。断面形は逆台形状をなし、壁は急角度で立ち上がる。**覆土** 焼土、ロームを含む暗褐色土で充填されており、埋め戻し土か。**遺物(第27図、第6表)** 繩文時代中期の土器片を中心とした遺物が、若干出土している。1は地文繩文に沈線が施される胴部片で加曾利E式であろう。2は下端部に微細剥離が認められる剥片で、チャート製である。**所見** 出土遺物から繩文時代中期の土坑である。



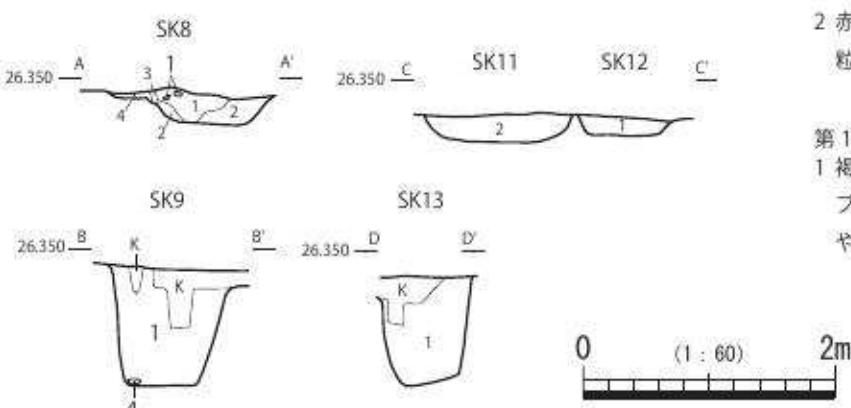
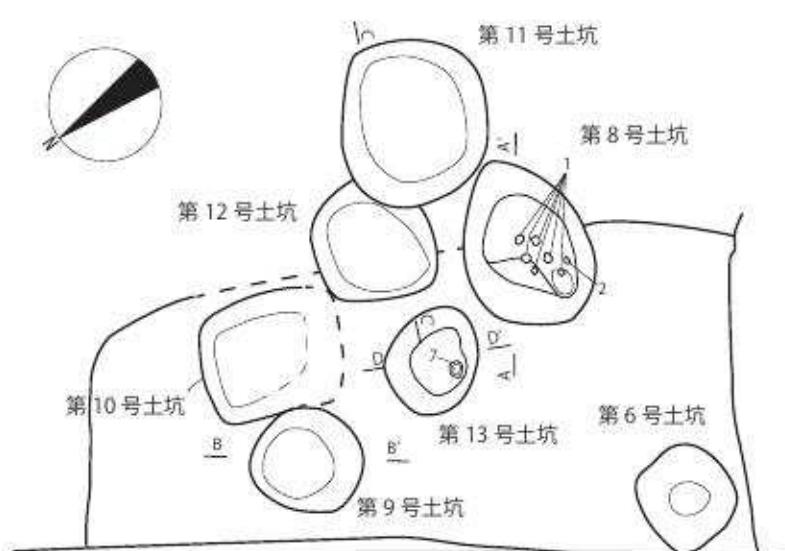
第27図 第5号土出土遺物

第6表 第5号土坑出土石器観察表

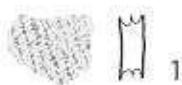
番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	整形の特徴	石材
2	石器	使用痕のある剥片	6.4	3.9	2	0.9	下端部に微細剥離が認められる。	チャート

第6号土坑【SK6 第28図】

位置 調査区中央北西側、第1号堅穴建物を掘り込んでいる。規模と平面形 直径70cm程度の不整円形を呈する。**断面形** 確認面からの深さ40cm程度を測り、壁は急角度で立ち上がる。**遺物** 繩文土器がわずかに出土した。図示できるものは少なく、1は地文縄文の破片で中期であろう。所見 切りあい関係と出土遺物から、縩文時代中期の土坑である。



第28図 第6,8～13号土坑



第29図 第6号土坑出土遺物

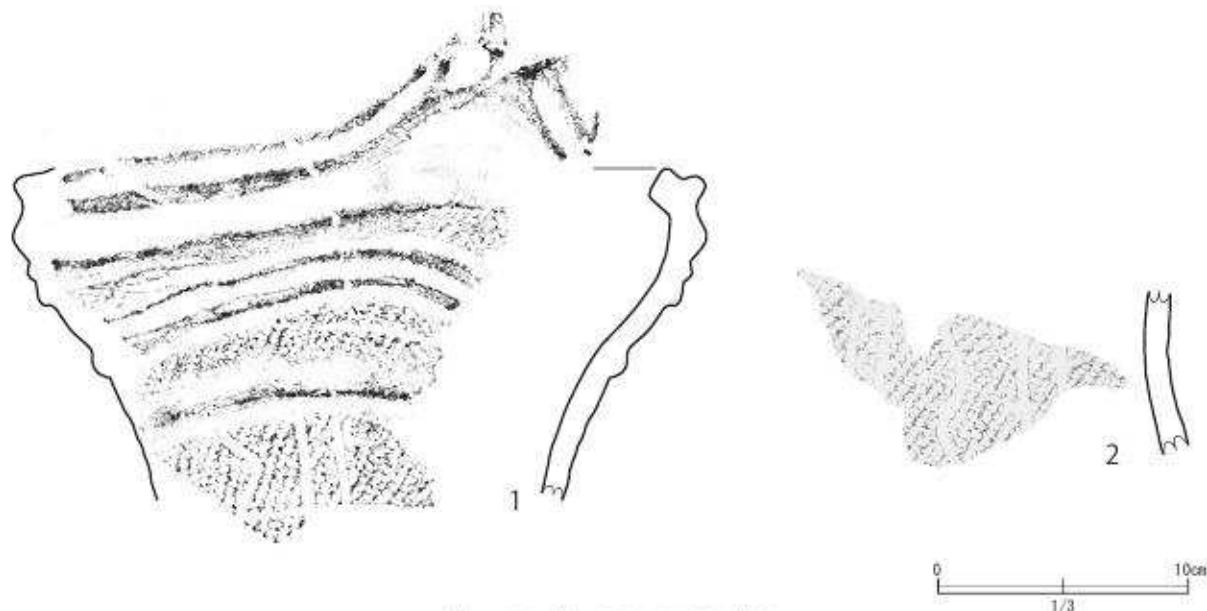
第7号土坑【SK7 第40図】

位置 調査区東隅に位置し、第1号地下式坑に切られる。規模と平面形 検出できたのは1.2×0.8m程度の範囲であるが、おそらく楕円形を呈すると思われる。断面形 確認面からの深さ40cm程度、壁は

緩やかに立ち上がる。覆土 下に凸のレンズ状堆積構造を示すことから、自然に埋没したものと思われる。遺物 図示できるものはないが、縄文時代中期と思われる土器片が1点出土している。所見 出土遺物から、縄文時代中期の土坑である。

第8号土坑【SK8 第28図】

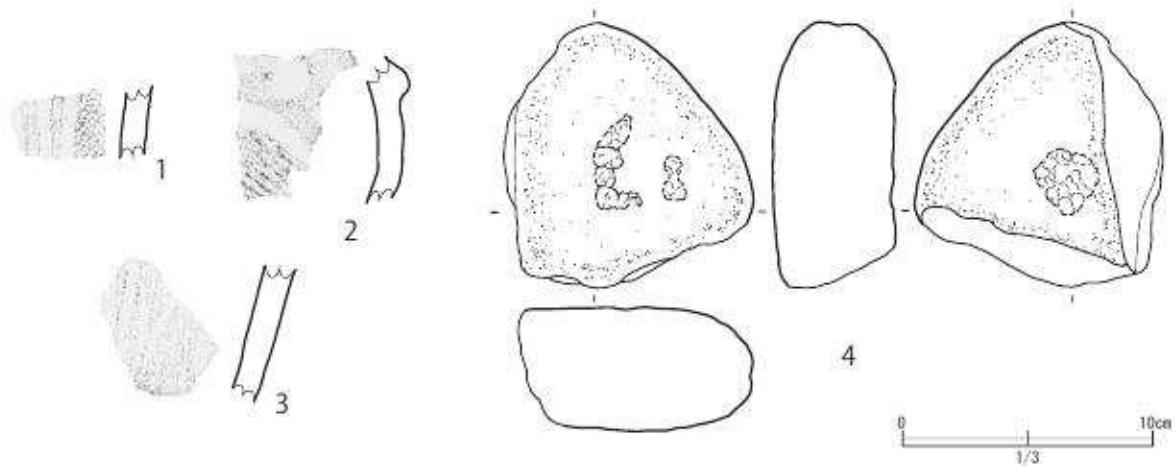
位置 調査区中央北寄り、第1号竪穴建物を掘り込んでいる。規模と平面形 長径1.4m × 短径0.9mの不整楕円形を呈する。断面形 確認面からの深さ30cm程度、底面は南東に偏つており、壁は丸みを帯びて立ち上がる。覆土 搾乱により不明瞭だが、1層は下に凸のレンズ状を示すことから自然に埋没したものか。遺物(第30図) 縄文時代中期の土器片が出土した。1は復元口径25.2cm、残存高13cm、3ないし4単位の波状口縁をもつキャリバー形深鉢である。波頂部の口唇部には沈線で渦巻き文が施される。口縁部文様帶には隆帶でクランク文が配置され、胴部には二本一組の直線や、波線の単沈線が引かれる。地文は縦位のRL単節縄文である。加曾利E1式。2も1の胴部と同様の単沈線が施される加曾利E1式。所見切りあい関係と出土遺物から、加曾利E1式の土坑である。



第30図 第8号土坑出土遺物

第9号土坑【SK9 第28図】

位置 調査区中央北寄り、第1号竪穴建物を掘り込んでいる。規模と平面形 直径90cm程度の不整円形を呈する。断面形 確認面からの深さ約1m。底は平坦、壁は急角度で立ち上がる。南側の立ち上りが若干緩やかとなる。覆土 ロームブロックを多量に含むことから埋め戻されたと考えられる。遺物(第31図、第7表) 縄文時代中期の土器片が若干出土した。1は地文縄文に沈線、2は沈線と隆帶が施される土器で加曾利E式。3は条痕文が施され、中期と思われる。4は安山岩製の磨石・敲石で、表裏および側面に敲打痕を残す。また表裏面はともによく研磨されて平滑、平坦になっている。所見 切りあい関係と出土遺物から、縄文時代中期の土坑である。



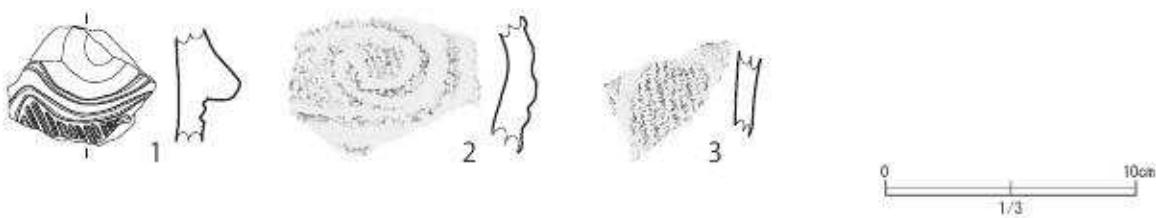
第31図 第9号土坑出土遺物

第7表 第9号土坑出土石器観察表

番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	整形の特徴	石材
4	石器	磨石・敲石	659.7	(10.4)	(9.2)	4.8	表裏および側面に敲打痕を残す。表裏面はよく研磨されて平滑、平坦になっている。	安山岩?

第10号土坑【SK10 第28図】

位置 調査区中央北寄り、第1号堅穴建物を掘り込んでいる。第9号土坑と隣接するが切りあい関係は攪乱により不明瞭である。
規模と平面形 攪乱を受けており不明瞭だが、直径1m程度の不整円形を呈すると思われる。
断面形 確認面からの深さ10～15cmを測る。
遺物(第32図) 縄文時代中期の土器片が若干出土した。1は太い隆帯による渦巻き文が施される。沈線による区画内は地文として条線文が施されており、加曾利E1式か。2はキャリバー形深鉢の口縁部で、細い隆帯により横S字文が描かれる。加曾利E1式。4は逆U字状の沈線がみられるもので加曾利E3式か。
所見 切りあい関係と出土遺物から、縄文時代中期の土坑である。



第32図 第10号土坑出土遺物

第11号土坑【SK11 第28図】

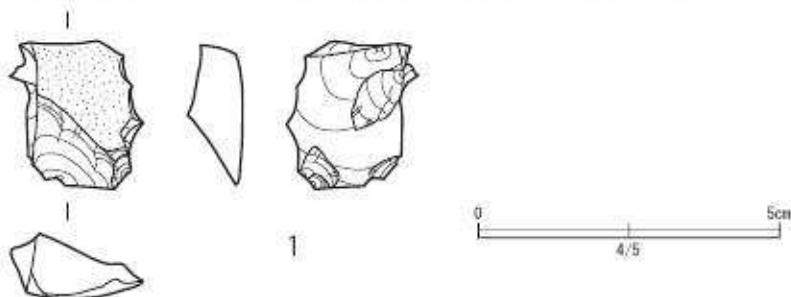
位置 調査区中央北寄り、第1号堅穴建物の南東に隣接する。第12号土坑を切っている。
規模と平面形 1.15×1.3m程度の不整楕円形を呈する。
断面形 確認面からの深さ20cm程度、壁は緩やかに立ち上がる。
覆土 ロームブロックを含むことから埋め戻されたものか。
遺物(第33図) 縄文時代中期の土器片がわずかに出土した。1は口唇部が凹む口縁部片で、肥厚した口縁部外面にはミガキが施される。
所見 切りあい関係と出土遺物から、縄文時代中期の土坑である。



第33図 第11号土坑出土遺物

第12号土坑【SK12 第28図】

位置 調査区中央北寄り、第1号竪穴建物を切って構築されている。第11号土坑に切られる。
規模と平面形 直径90cm程度の不整円形を呈する。
断面形 確認面からの深さ20cm程度、壁は緩やかに立ち上がる。
覆土 ロームブロックを含むことから埋め戻されたものか。
遺物(第34図、第8表) 1は背面に風化面を残すチャート製の剥片である。このほかには縄文時代中期の土器小破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。
所見 切りあい関係と出土遺物から縄文時代中期の土坑である。



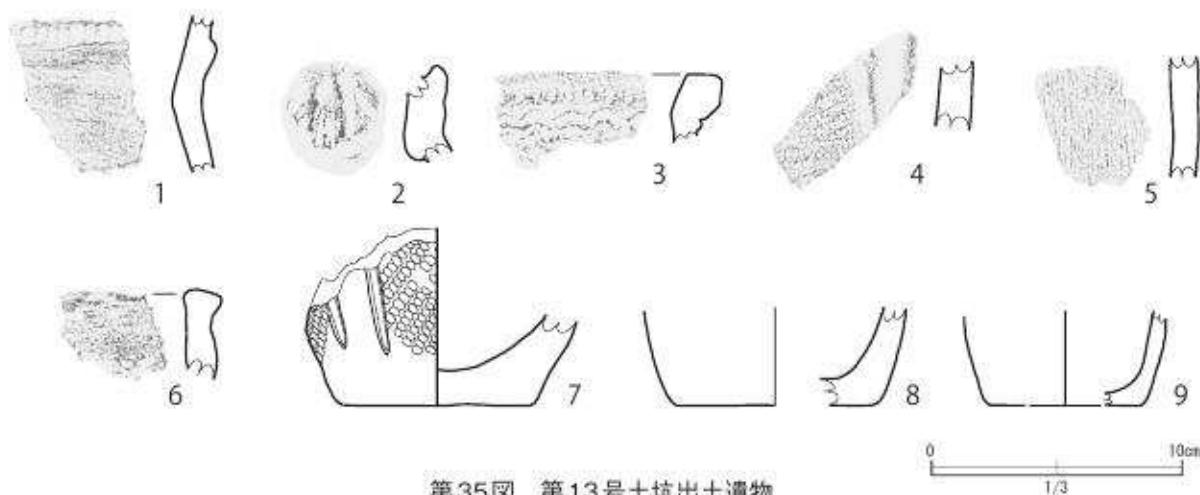
第34図 第12号土坑出土遺物

第8表 第12号土坑出土石器観察表

番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	整形の特徴	石材
1	石器	剥片	55	24	19	10	背面に風化面(自然面か二重バティナ)を残す。上部を欠損している。	チャート

第13号土坑【SK13 第28図】

位置 調査区中央北寄り、第1号竪穴建物の中央に掘り込まれている。
規模と平面形 70×90cm程度の不整楕円形を呈する。
断面形 確認面からの深さ90cm程度、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
覆土 ロームブロックを若干含んでおり、埋め戻されたものか。
遺物(第35図) 縄文時代中期の土器片が比較的まとまって出土した。1はくびれをもつ深鉢の胴部片で、横位の押し引き文が施される。阿玉台式。2は波状口縁の波頂部。3は肥厚しキザミが施される口縁部をもち、鋸歯状の沈線が施される。2,3ともに阿玉台式か。4は微隆線が施される加曾利E4式。5は条痕文が施され、6は無文でともに中期か。7～9は底部破片。7は磨消縄文の施される加曾利E2式、8,9は無文で中期か。
所見 切りあい関係と出土遺物から、縄文時代中期の土坑である。



第35図 第13号土坑出土遺物

第18号土坑【SK18 第7図】

位置 調査区西隅、第4号竪穴建物に隣接する。規模と平面形 80×65cm程度の不整楕円形を呈する。断面形 確認面からの深さ60cm程度を測る。遺物(第36図) 繩文時代中期の土器片がわずかに出土した。1は地文RLR複節縄文の磨消縄文が施される加曾利E2式。

所見 出土遺物から、縩文時代中期の土坑である。



第36図 第18号土坑出土遺物

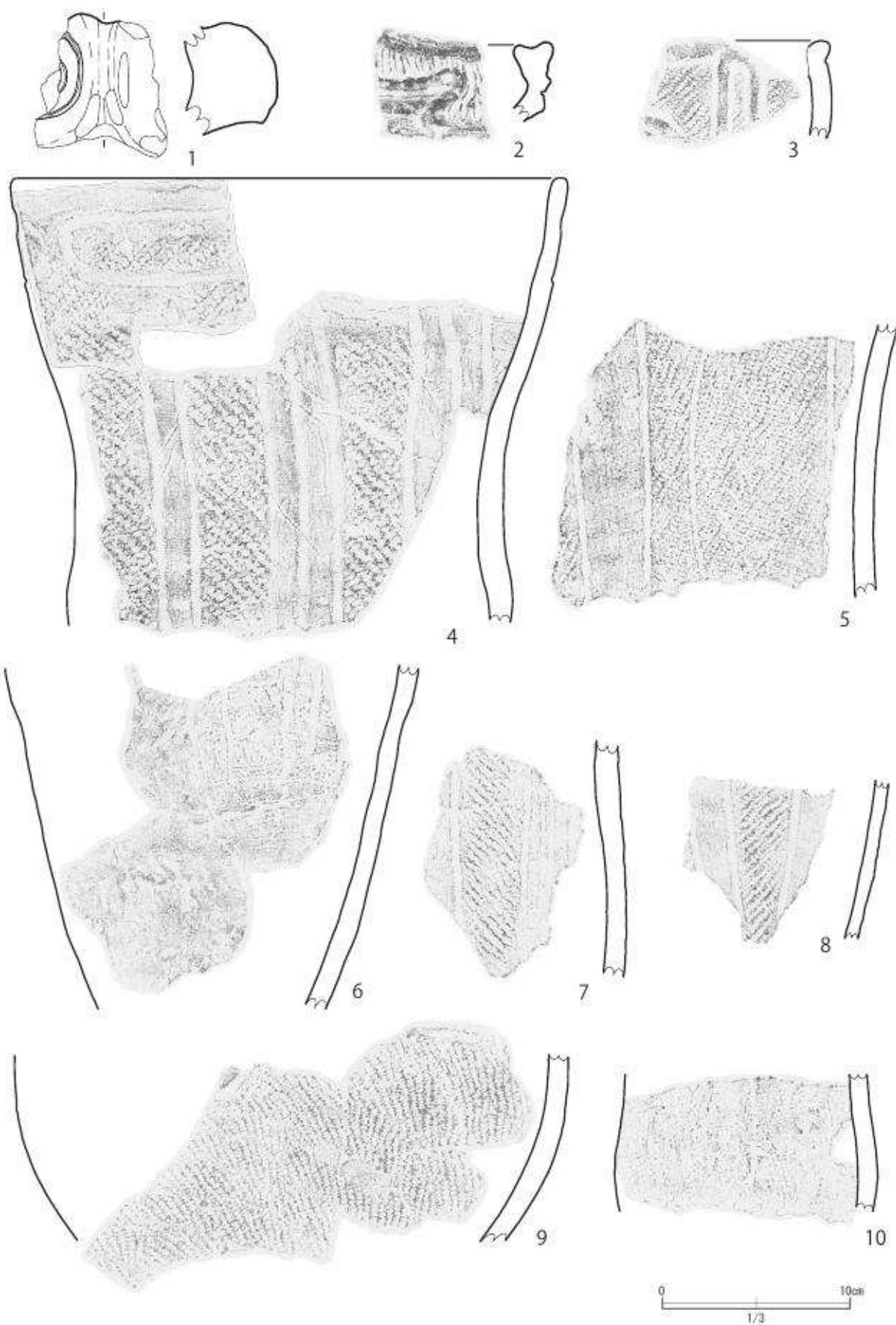
3 遺構外出土遺物(第37～39図、第9,10表)

中世の遺構である地下式坑からは、多数の縄文時代の遺物が出土している。地下式坑の埋没時に、周囲から流れ込んだものであろう。時期は縄文時代中期のなかでも、第2～4号竪穴建物の時期である加曾利E2式が多い。

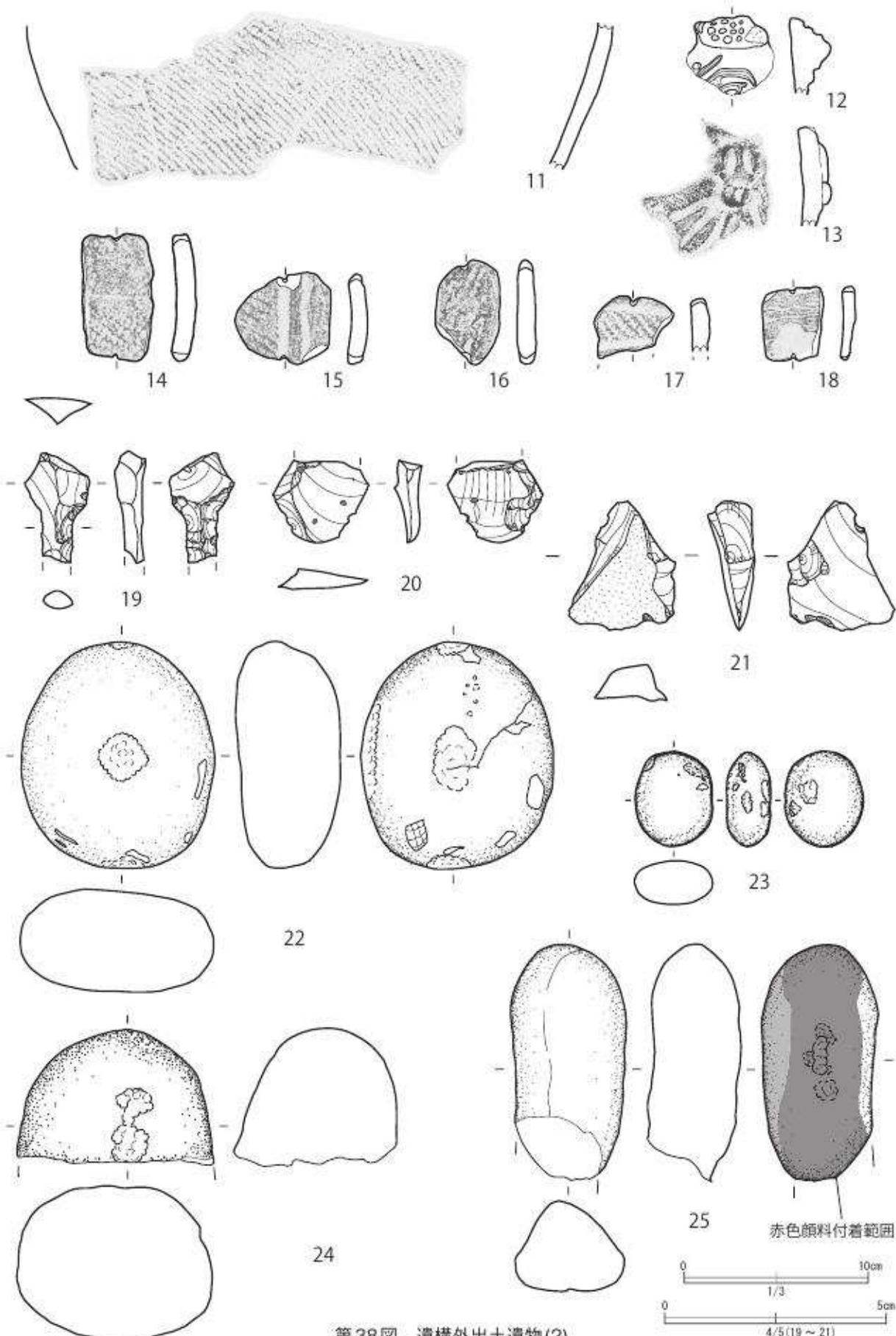
1は扇状把手の破片で阿玉台IV式。2は隆帯によるクランク状の文様がみられる加曾利E1式。3は隆帯に沿って沈線が引かれる土器で加曾利E式であろうか。4～8は磨消縄文の施される土器で、加曾利E2式。4は復元口径29.2cm、残存高22.6cmを測るキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯に橢円形の区画が見られる。5もキャリバー形深鉢の胴部片であろう。6は底部付近の破片だが、磨消縄文に加えて粗い格子目状の条線文が施される。9は破片上端にわずかに隆帯や沈線がみられる胴部片で、加曾利E式の鉢であろう。10は無文の底部付近、11は地文縄文のみが施される胴部片でともに中期であろう。12は波状口縁の波頂部で、平坦な頂部に多数の刺突が施される。波頂部の下には沈線により渦巻き文が描かれる。文様から東北地方に分布する大木9式であろう。13はY字状の突起をもつ波状口縁部片で、波頂部の口唇部にはキザミが施される。口縁部は単節RLの帶縄文、ブタ鼻状粘土粒の貼り付けが見られる。安行2式か3a式であろう。

14～18は土器片錐である。いずれも中期の土器片を利用している。

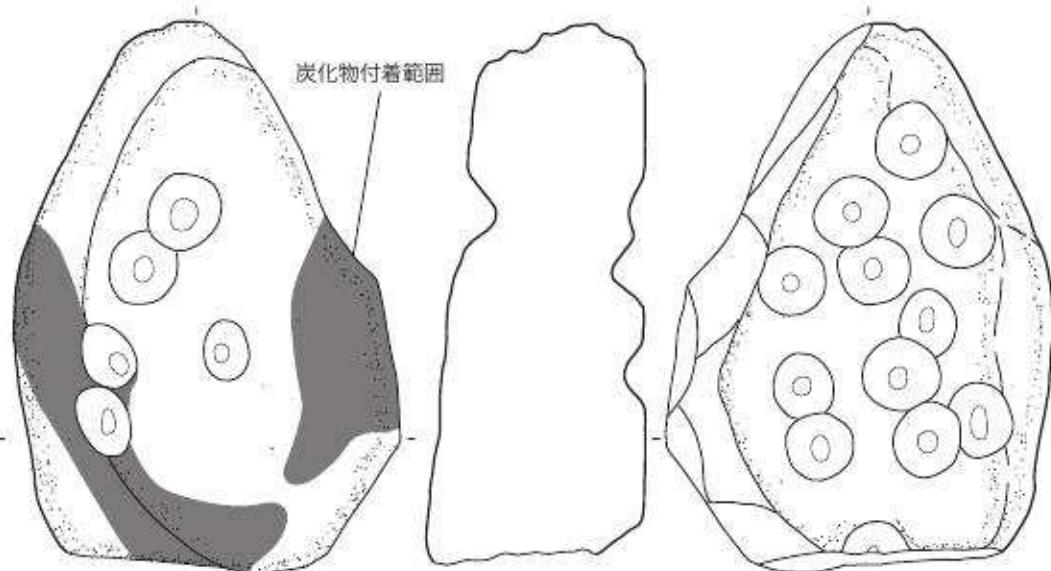
19はチャート製の石錐で、刃部先端が折れている。刃部の押圧剥離が不規則なことから製作途中で折れたものであろうか。20は黒曜石製の使用痕のある剥片で、左側縁上側と右側縁に微細剥離が認められる。21は背面に蝶面を大きく残すチャートの剥片。22は安山岩製の磨石・敲石で、扁平な円蝶を使用し、表裏上下両側縁の6面いずれにも敲打痕が認められる。敲打痕以外の部分はよく磨られており平滑である。23は円蝶の側縁や角に敲打痕が見られるもので、打製石器製作のハンマーであろうか。24は22と同様の、敲石・磨石の破片。25は断面三角形を呈する安山岩の棒状蝶を利用した磨石・敲石。平坦面に敲打痕、研磨痕がみられ、この作業面に赤色顔料が付着している。顔料を磨り潰す用途で使用されたのだろう。26は石皿破片である。磨面は平滑で、中央に向かって深くなる。磨面縁辺部には敲打による凹部が認められる。裏面は全面に凹部が認められ、蜂の巣石状を呈する。花崗岩製。27は平面三角形を呈する雲母片岩の板状蝶で、表面5箇所、裏面1箇所の凹部が認められる。この凹みは敲打で作られたものではなく、棒状工具を錐のように回転させて作られたことが、凹部内の擦痕から推定される。また表面には鋭い線刻が残され、裏面はよく研磨され平滑である。発火具の一部であろうか。



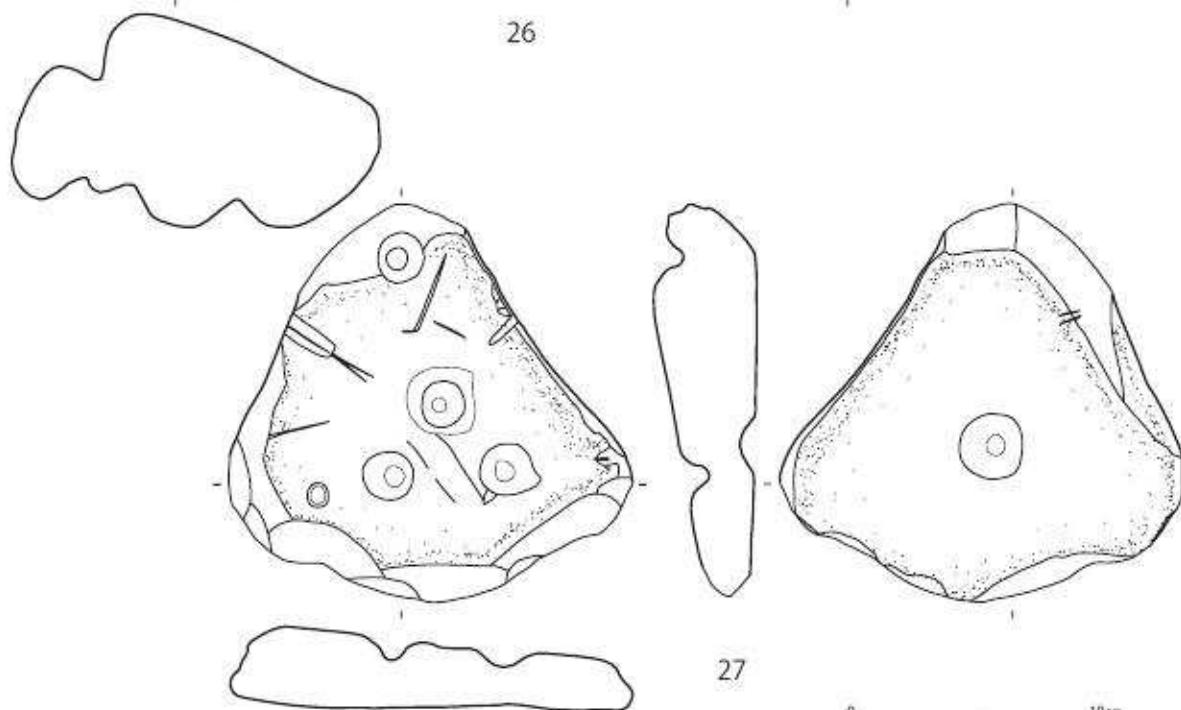
第37図 遺構外出土遺物(1)



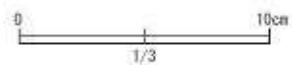
第38図 遺構外出土遺物(2)



26



27



第39図 遺構外出土遺物(3)

第9表 遺構外出土土器片錐観察表

番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	文様	時期
14	土製品	土器片錐	35.5	6.8	3.8	1	沈線で無文帯を区画。単節RL磨消繩文。	加曾利E2
15	土製品	土器片錐	27.8	4.9	5.1	0.8	口縁部に平行する二本の沈線、単節LR繩文。	加曾利E
16	土製品	土器片錐	19.3	5.6	3.4	1	繩文のようだが摩耗により不明。	中期
17	土製品	土器片錐	15.1	4.0	4.1	1	沈線で無文帯を区画。単節RL磨消繩文。	加曾利E2
18	土製品	土器片錐	12.8	4.0	3.3	0.7	条線文。	中期

第10表 遺構外出土石器観察表

番号	種類	器種	重量(g)	縦	横	厚さ	整形の特徴	石材
19	石器	石錐	1.8	2.3	1.5	0.8	刃部先端は折れている。刃部の押圧剥離は不規則で、製作途中で折れたものか。	チャート
20	石器	使用痕のある剥片	1.6	1.9	2.1	0.6	左側縁上側と右側縁に微細剥離が見られる。上端は折れている。	黒曜石
21	石器	剥片	4.6	2.9	2.35	1.1	背面に疊面を大きく残す。	チャート
22	石器	磨石・敲石	299.3	8.1	7	3.7	表裏、上下、両側面のそれぞれ中央部に敲打痕が残る。敲打痕以外の部分はよく研磨されており平滑である。	安山岩
23	石器	敲石	71.9	5.1	4.2	2.4	円盤の側面や角に敲打痕が残る。打製石器製作のハンマーか。	安山岩?
24	石器	磨石・敲石	259.4	(4.2)	(7.0)	4.4	表裏両面、両側面、上面のそれぞれ中央部に敲打痕が残る。表面と裏面はよく研磨されており平滑である。	安山岩?
25	石器	磨石・敲石	136	(8.4)	4	3.3	棒状疊の平坦面に研磨痕がみられる。この作業面に、赤色顔料が広く付着している。研磨痕は明瞭ではないか。顔料を磨り潰す用途に使用したと思われる。	安山岩
26	石器	石皿	約3.5kg	21.4	14.7	8.5	石皿破片。表面は平滑で中央に向かって深くなり、縁辺部に敲打による凹部が認められる。また、スス様の炭化物の付着がみられる。裏面は全面に凹部がみられ、蝶の巣石状をなす。	花崗岩
27	石器	凹石	1035	15.6	15.8	4	平面三角形を呈する板状の礫に、表面5箇所、裏面1箇所の凹部が認められる。この凹みは敲打で作られたものではなく、棒状工具を繰り返し回転させて作られたことが、凹部内の擦痕から推定される。また表面には鋭い縦刻が残され、裏面はよく研磨され平滑である。発火具の一部であろうか。	雲母片岩

第2節 中世

調査の結果、中世の地下式坑を3基(SX1~3)と不明遺構1基(SX4)を、詳細な時期が不明の土坑(SK17・19)を2基発見した。SX4はSX2の付属施設の可能性もあるが、堅坑として形状と規模が合わないため、不明遺構とした。

第1号地下式坑【SX1 第40図】

位置 調査区北東隅部に位置し、全体の約2/3が調査区に収まる。規模と形状 堅坑を南東に設け、平面觀が横長長方形状を呈する主室を東西に配する。主室と堅坑を結ぶ主軸は最大で378cm、主室の東西は調査区内遺存長だけで最大310cmを測る。主軸方向 N-40°-W

覆土 主室と堅坑の最下層に堆積したローム土は、旧天井部が崩落したものと考えられる。主室下位の南北壁は遺存高よりも奥にえぐれており、築造当初に掘り残した部分が遺存している。壁面には壁面を削った工具の跡が残る。深さは確認面から約220cmあり、最下面是常総粘土層に達する。出土遺物(第43、44図、第11~14表) 覆土中からの出土で瓦質土器風炉、古瀬戸折縁皿、常滑甕がある。特に常滑甕の一部はSX3出土片と接合しており、両者が同一時期に機能・廃絶した可能性を示す。年代は一部に鎌倉後半のものを含むが、他は15世紀代の遺物である。**所見** 出土遺物から15世紀代に機能・廃絶した地下式坑である。

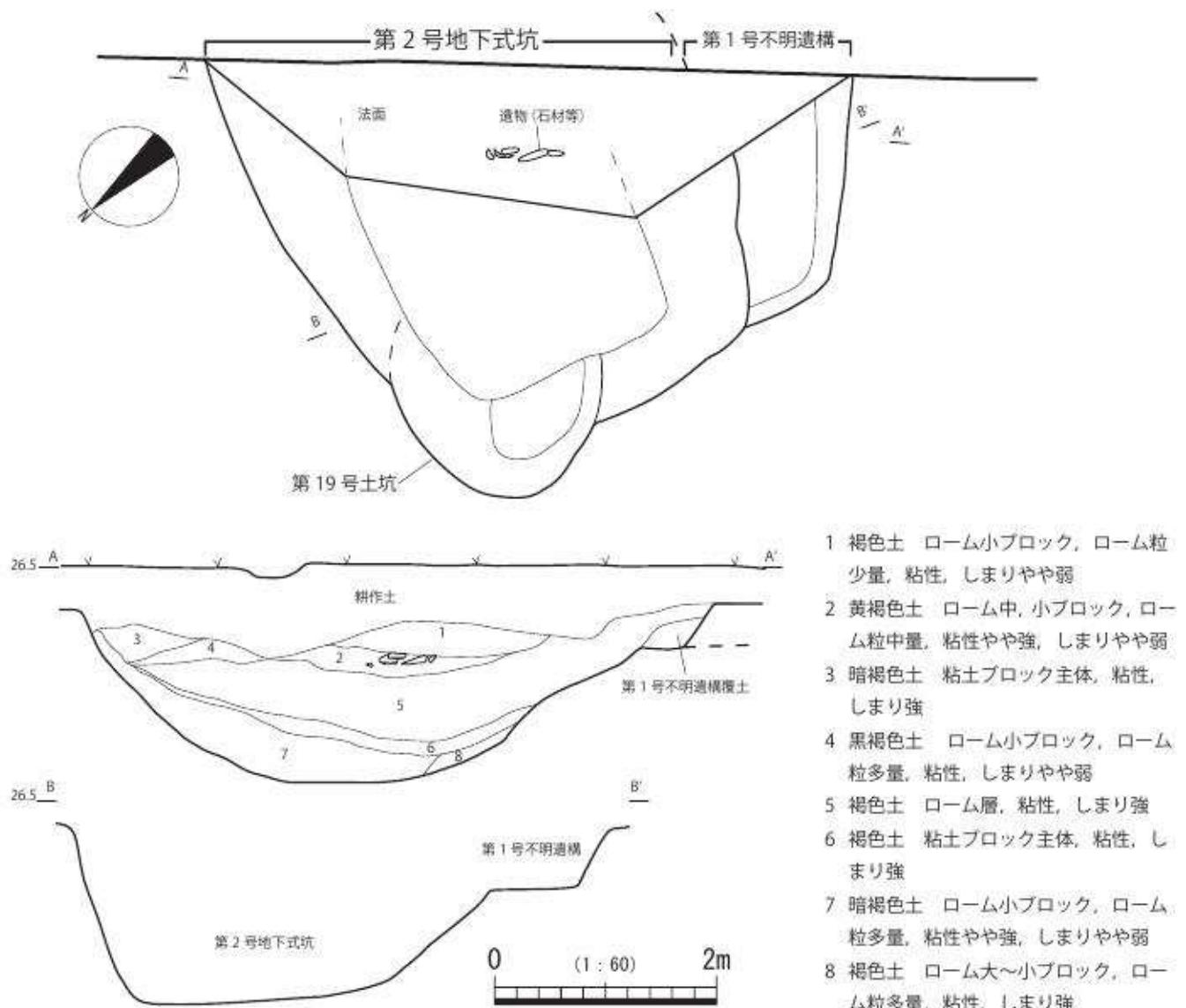
第2号地下式坑【SX2 第41図】

位置 調査区東壁に接し、主室左半全体の約1/2が調査区に収まる。規模と形状 主室が平面觀横長の長方形を呈する地下式坑である。堅坑は調査区外に存すると推定される。主室の幅は南北短軸で約365cm、東西長軸で遺存長350cmを測る。主軸方向 N-12°-E 覆



第40図 第7号土坑・第1号地下式坑

土 上層は褐色土、中層以下はローム主体の土で埋まる。下位に薄く粘土ブロック主体の層が堆積する。出土遺物(第43,44図、第11~14表) 覆土中層から白磁四耳壺口縁部と古瀬戸灰釉鉢が出土した。報告対象外だが上層からは雲母片岩の石材片や土器皿片も出土している。白磁は伝世品であろう。所見 出土遺物から15世紀代に機能・廃絶した地下式坑である。主軸がSX1・SX2と異なるため、両者とは別時期に機能していた可能性がある。



第41図 第2号地下式坑、第1号不明遺構、第19号土坑

第3号地下式坑【SX3 第42図】

位置 調査区南東隅部に位置し、主室全体の約1/2が調査区内に入る。
規模と形状 壺坑を南側に設け、平面観横長長方形の主室を東西に配した地下式坑である。調査区の隅に地山（関東ローム層）が遺存し、この地山よりも西壁・南壁とも下部に覆土が入り込んでいることから、主室がそれぞれ連続し、地山は壺坑に通じる隅部と判断した。遺存長で主室の東西長軸395cmを測る。
主軸方向 N-22°-W
覆土 最下層に天井部の崩落と思しきローム土が約60～80cm堆積している。その直上にはローム土を交えた硬化面が形成されており、地下式坑の機能喪失後に二次的な使用をしていた可能性がある。硬化面は更に上の遺構確認面前後にも痕跡が確認されている。深さは確認面から約220cmを測り、深さ約170cmの時点で地山が常緑粘土層に移り、更に約50cm掘り込まれる。出土遺物（第43,44図、第11～14表） 覆土上・中層にかけて、また下層から多数が出土している。下層出土遺物からは、

厚手の手捏かわらけとロクロ糸切のかわらけが並存し、白磁皿・内耳土鍋・古瀬戸祖母懐壺の年代が15世紀代を示すこと、鉢が在地産土器ではなく常滑II類であること等から、15世紀中葉よりも古い遺物相と考えられる。 所見 15世紀前半から中葉にかけての地下式坑である。出土遺物の接合関係と主軸方位の近似性から1号地下式坑と同一時期に機能・廃絶した可能性が高い。

第17号土坑【SK17 第42図】

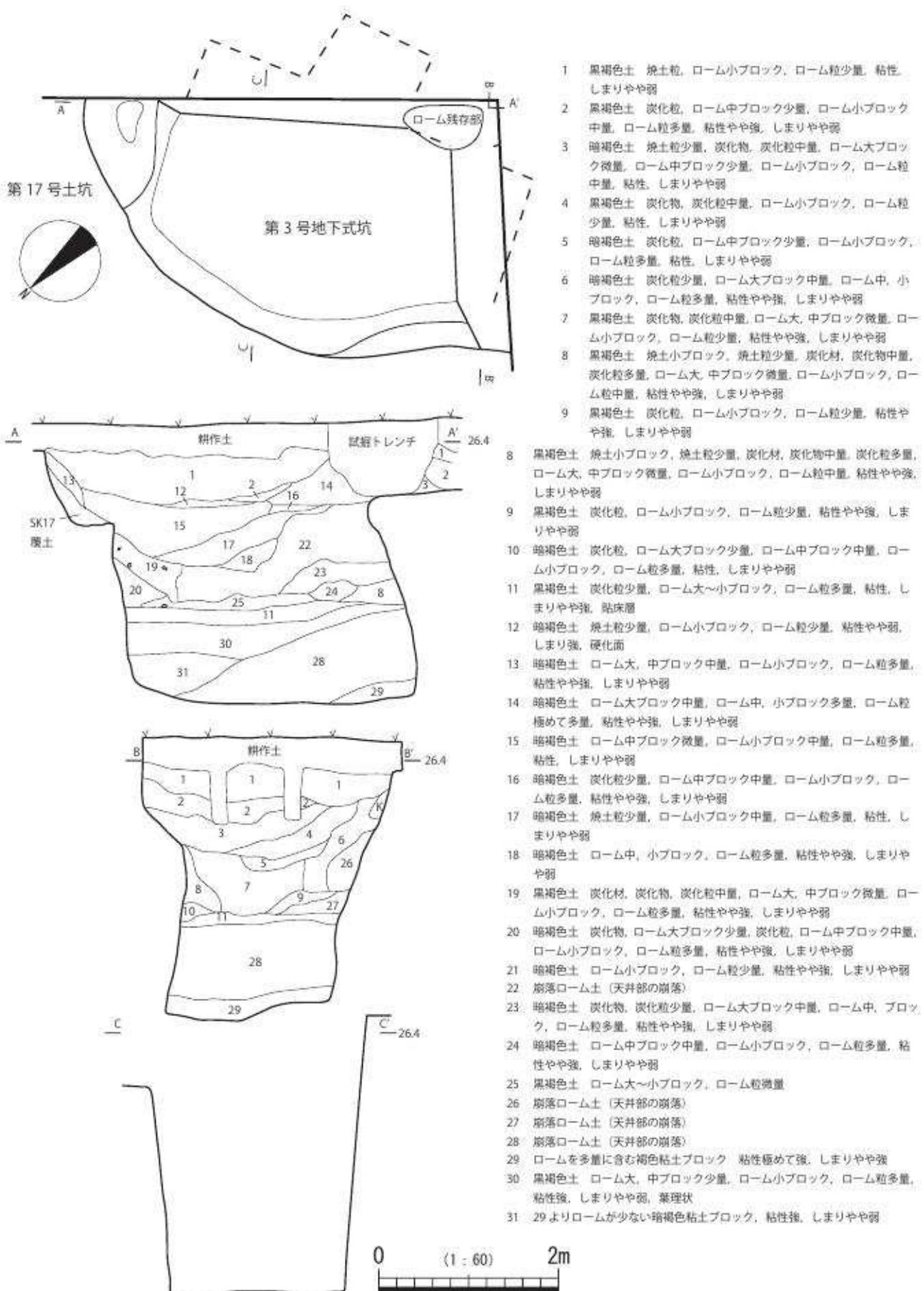
3号地下式坑に東壁で切り合う土坑。3号地下式坑より古い。縄文土器の摩滅した小破片以外に出土遺物は無く、時期は不明である。

第1号不明遺構【SX4 第41図】

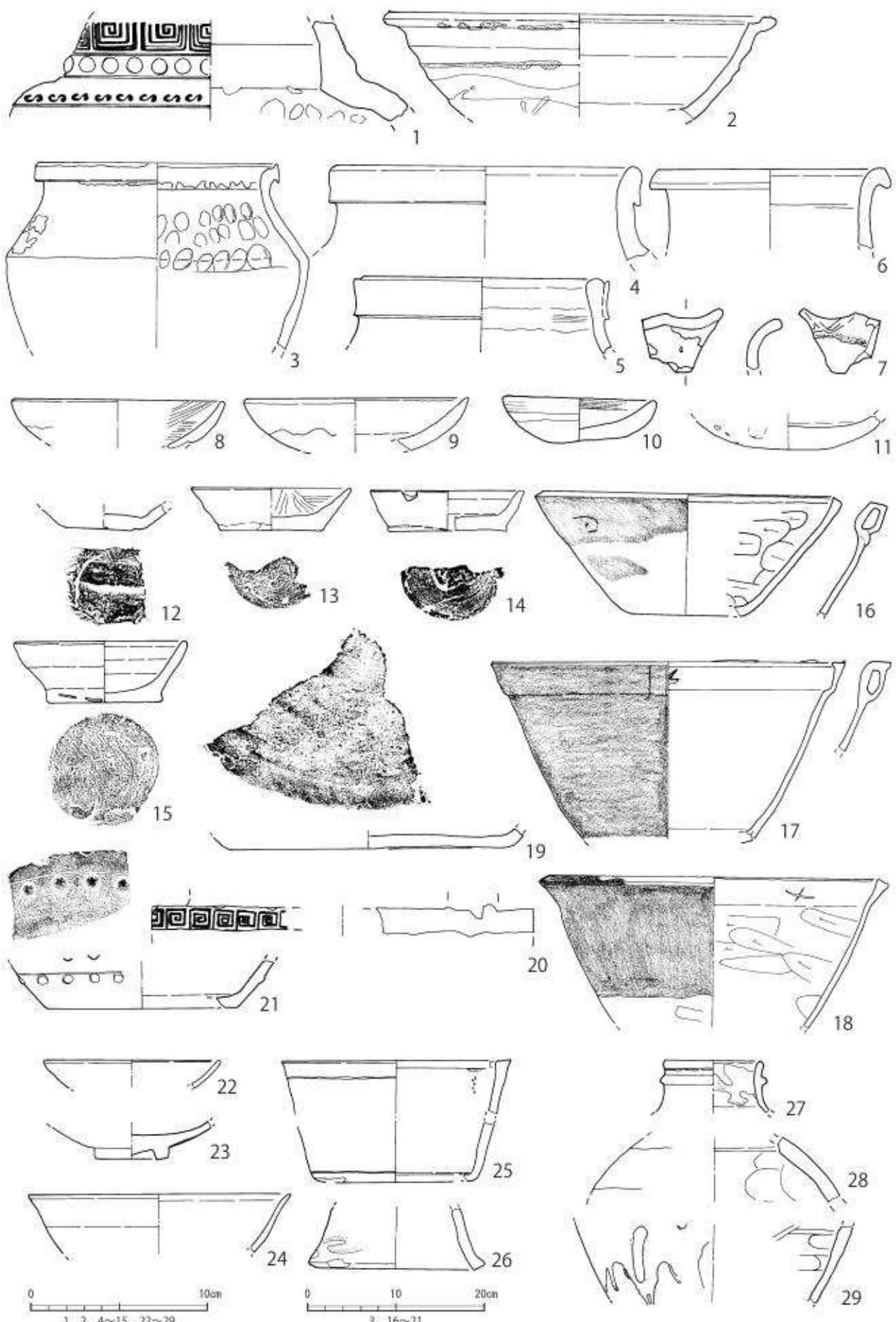
第2号地下式坑主室と南壁で切り合う土坑。第2号地下式坑の付属施設の可能性もあるが、豊坑としては位置と深さが不整合となるため別遺構として報告する。 出土遺物 第3号地下式坑出土資料に類する土器皿が1点出土。 所見 第2号地下式坑が機能した時期とほぼ同時期の遺構であろう。

第19号土坑【SK19 第41図】

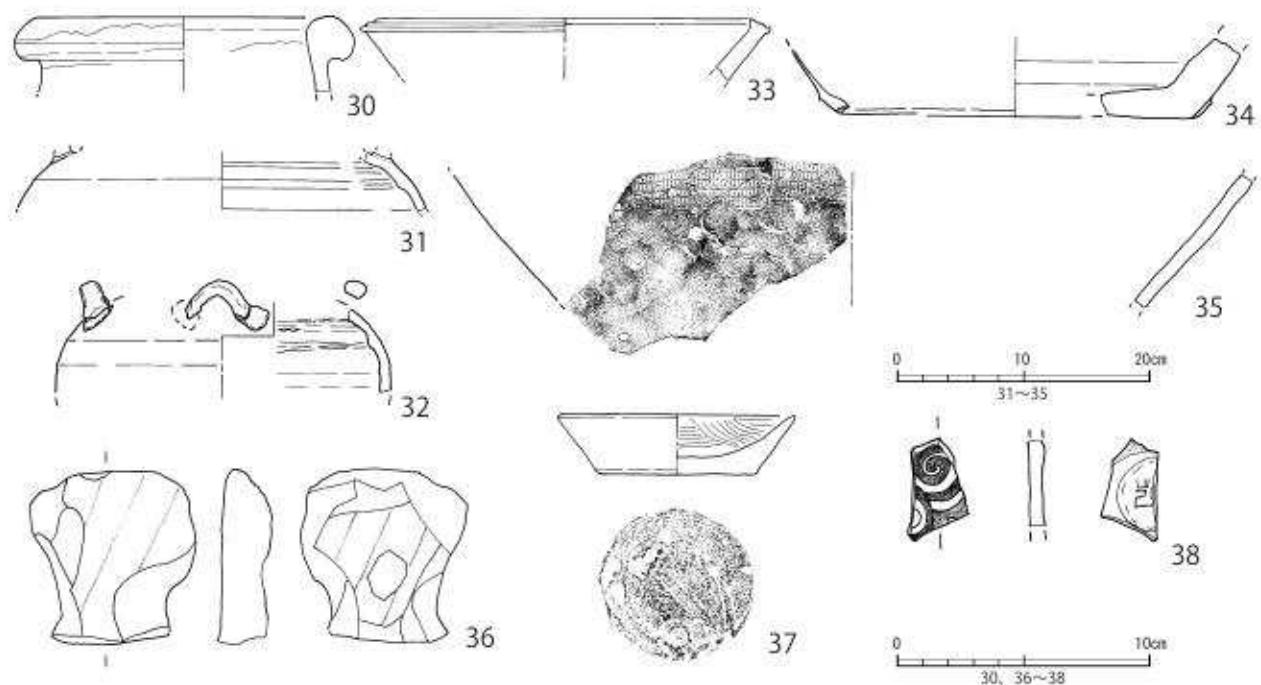
第2号地下式坑主室北西隅部で切り合う土坑。第2号地下式坑の付属施設の可能性もある。調査時に、壁部が地山と異なり、ボソボソとしたローム主体の覆土が広がりを見せたため別遺構とする。底面高は第2号地下式坑とほぼ等しい。出土遺物は無く、時期は不明である。



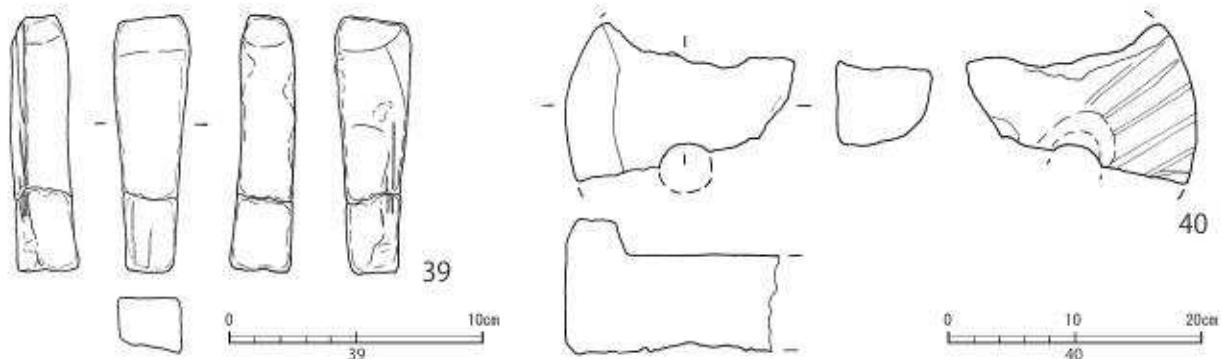
第42図 第17号土坑・第3号地下式坑



第43図 地下式坑等出土遺物(1)



第44図 地下式坑等出土遺物(2)



第45図 地下式坑等出土遺物(3)

第11表 地下式坑等出土遺物観察表(1)

No.	器種 器形	法量 [cm]	胎土	焼成	色調	器形・技法状の特徴	出土位置・残存率 ・備考
1	瓦質土器 火舎	C (5.6)	石英・白雲母 長石・赤色粒 を含む	良好	外面：黄灰色 胎芯：にぶい黄 褐色～暗灰黄色 内面：にぶい黄 色	体部から肩部にかけての破片。丸味を持つ体 部から斜め方向に立ち上がる。内面に剥落あ り。内部には荒いヨコナデ。S字の押印が肩 部に巡る。体部には沈線間に珠文の貼り付け。 上部に雷文の押印が巡る。	SX1覆土 10%
2	古漸戸 灰釉折縁深皿	A [22.5] C (5.7)	良土	良好	釉：淡黄色胎 芯：浅黄～にぶ い黄橙色	口縁部から体部片。体部は丸味を帯びて立 ち上がり、口縁部が水平方向に外折し、水平な 端部上面を形成する。体部外面底部を除き施 釉。	SX1覆土 10% 古漸戸後1期
3	常滑 甕	A [26.8] C (20.7)	良土	良好	釉：灰オリーブ 色外面：灰色内 面：灰赤色	口縁部から体部下半片。肩部を有する。口縁 部と内面に横ナデ。外面の肩部には斜め方向 のヘラナデ。灰赤色の器面の上から縁釉。自 然釉付着。	SX1覆土中とSX3 上層出土片で接 合。 6A型式
4	常滑 壺	A [17.5] C (5.1)	石英・長石・ 赤色粒を含む	良好	外面・胎芯：灰 黄褐色内面：暗 赤褐色	口縁部片。口縁上部を玉縁状にして縁帯を形 成する。外面は赤褐色の発色がよくない。内 外面に横方向のナデ。	SX1覆土 25% 11型式
5	常滑 甕	A [28.2] C (8.3)	良土	良好	灰黄褐色	口縁部片。口縁を折り返してN字状にしてお り。縁帯は頸部に接着する。内外面に横ナデ。	SX1覆土 25% 10型式
6	白磁 四耳壺	A [12.8] C (4.5)	精良	堅穀	釉：灰オリーブ 色胎芯：灰白色	口縁部片。頸部は直立気味に立ち上がり、口 縁部は上端が折り返される玉縁状を呈する。	SX2中層 30% 12～13世紀中国産
7	古漸戸 灰雜鉢	C (3.6)	良土	良好	釉：暗灰黄色胎 芯：灰白色	片口部のみ。釉薬の剥落が多い。	SX2覆土
8	土師質土器 皿(手づくね)	A [12.0] C (2.7)	長石・赤色粒	普通	灰黄褐色	口縁部片。内面全体と外面の口縁部に横ナデ。	SX3 3層
9	土師質土器 皿(手づくね)	A [12.6] C (2.9)	赤色粒・ 白雲母	普通	赤褐色	口縁部片。内面に横ナデ。外面は口縁近くの み横ナデ。下半分はナデ。	SX3覆土 25%
10	土師質土器 小皿(手づく ね)	A (8.6) B (2.8) C (2.5)	白雲母・ 砂利がわずかに混入する	不良	にぶい黄橙色 (全体的に被熱 により黒く変 色)	全体的に厚い作り。外面は口縁部付近のみ横 ナデ。胎土はラミナ状に剥離しかける。内面 には赤褐色の付着物が点々と着く。内面は内 底部をのぞく全體ににぶい黄褐色の物質が塗 布。ナデが切られる。	SX3下層 90%
11	土師質土器 皿(手づくね)	B (4.0) C (2.0)	長石・赤色粒 が入る	良好	橙色	底部片。ナデがみられる。内外面に黒色の被 熱痕あり。	SX3覆土 25%
12	土師質土器 小皿(ロクロ)	B (4.4) C (1.4)	長石・黒色粒 含む。石英わ ずかに含む。	良好	にぶい黄橙色	体部。内外面に横ナデ。外面底部に右回転糸 切痕。底面と内底面の外縁に沈線をめぐらす。 糸切痕の半分は削られてスノコ状の圧痕を有 する。	SX3下層 50%
13	土師質土器 小皿(ロクロ)	A [9.0] B [5.8] C (2.4)	赤色粒多量	良好	浅黄橙色	斜め上方に短く立ち上がる。底部に糸切痕が 認められるが、磨耗により方向不明。	SX3覆土 50%
14	土師質土器 小皿(ロクロ)	A [8.6] B [6.5] C (2.3)	長有入る。赤 色粒ごくわず か	良好	にぶい黄橙色内 底面がやや黒い	斜め上方に短く立ち上がる。内外面ともに口 唇部近くに横ナデ。外底部に右回転糸切痕。	SX3上層 75%
15	土師質土器 皿(ロクロ)	A (9.9) B (6.6) C (3.4)	長有と石英入 る	良好	にぶい黄褐色	底部に右回転糸切痕が認められる。内外面に ナデ。内底部は全面が赤く被熱し、一箇所が 黒く焼ける。外面も外底面のみが黒く焼ける。	SX3下層 75%
16	土師質土器 内耳鍋	A [32.4] B [12.0] C (13.4)	長石・白雲母 入る。赤色粒 微量	良好	内面：褐色外 面：暗褐色	口縁部から体部下半片。斜め上方へ直線的に 立ち上がる。器壁に孔を空けて粘土紐を差し 込み耳部を形成。内面は横ナデ。外面は縫が 多量に付着。口唇部は外側に面取り。	SX3下層 50%

第12表 地下式坑等出土遺物観察表(2)

No	器種 器形	法量【cm】	胎土	焼成	色調	器形・技法状の特徴	出土位置・残存率 ・備考
17	土師質土器 内耳鍋	A [39.0] C (19.5)	長石と雲母多 量に含む。赤 色粒ほほなし	良好	にぶい赤褐色	口縁部から体部下半片。内耳は粘土紐を貼り付けて成形。口縁部を平坦に成形した後に余った粘土を軽くつぶしたような痕がある。体部内面にはうっすらとした横ナデ。体部外面は全体的に煤が付着。	SX3下層 50% 交差線のヘラ書き 有
18	土師質土器 内耳鍋	A [39.0] C (16.6)	長石と雲母多 量に含む。赤 色粒ほほなし	良好	明赤褐色	口縁部から体部下半片。器壁に孔を空けて粘土紐の下半分を差し込み耳部を成形。耳部の上端は孔を開けずに口縁部に接着している。口縁端部を面取り。内面全体にヨコナデ。外面は口縁部近くのみヨコナデ。煤が外面全体に付着。	SX3下層 50% 交差線のヘラ書き
19	土師質土器 内耳鍋	B [31.2] C (2.2)	白雲母・長石 ・赤色粒多量	良好	内面：にぶい赤 褐色 外面：にぶい褐 色	底部片。底部外縁から器壁にかけて、内外面ともに横ナデ。	SX3下層 50%
20	瓦質土器 火舍	B [10.7] C (1.3)	石英・白雲母 ・長石。赤色 粒微量	良好	にぶい黄褐色～ 灰黄褐色	体部片。側面には雷文の押印が配置されるほかは荒いナデが器面に認められる。漆と思われる黒色の付着物が破断面に認められる。	SX3下層 25%
21	瓦質土器 火舍	B [21.0] C (5.2)	石英・白雲母 ・長石	二次 焼成	灰黄色～にぶい 赤褐色	底部片。二次焼成によって赤く変色しており、一見すると土師質にみえる。沈線直下に4点の珠文。沈線上に菱形状の押印の一部が3単位認められる。	SX3 3層 10%
22	白磁 小皿	A [10.0] C (1.5)	精良	堅緻	釉：灰白色 胎芯：にぶい黄 褐色	口縁部片。比較して黒味がかったり。	SX3 3層 10%
23	白磁 皿	B (4.2) C (2.1)	精良	堅緻	釉：灰白色 胎芯：灰白色～ にぶい黄褐色	底部片。底部外面が尖る。灰色の点描。高台は無釉。	SX3下層 10% 森田編年のD類か
24	古瀬戸 灰釉平碗	A [14.7] C (3.3)	良土	堅緻	釉：オリーブ黃 色 胎芯：にぶい黃 色	口縁部片。体部中段に弱い棱が認められ、口縁直下が窪む。灰釉が全面に施される。	SX3 30% 古瀬戸中Ⅰ期
25	古瀬戸 灰釉筒形香炉	A [12.8] B [9.2] C [6.8]	良土	堅緻	釉：灰オリーブ 色 胎芯：黄灰色	体部が外傾する筒形香炉。口縁部端が内外側両面に張り出し、やや内傾する平坦な口唇部を形成。器壁外面の口唇近くと底部近くに1条ずつ鉢茎の下に沈線文施される。底部は無釉。	SX3上層 10% 古瀬戸後Ⅱ期。
26	古瀬戸 灰釉花瓶	B [9.8] C (3.5)	良土	堅緻	釉：オリーブ黒 色 胎芯：にぶい黃 色	複部片。接地面をやや太く成形している。内側に横方向のナデ。底部端は無釉。	SX3下層 10% 中Ⅱ期
27	古瀬戸 灰釉瓶子	A [5.4] C (2.9)	良土	堅緻	釉：灰オリーブ 色 胎芯：灰黄色	口縁部片。肩部がごくわずかに残る。弱く内傾し、頸部を突帯が巡る。口唇部と内面下半分は無釉。	SX3覆土 20% 後Ⅳ期。
28	古瀬戸 灰釉瓶子	C (3.7)	良土	堅緻	釉：オリーブ黒 ～オリーブ褐色 胎芯：浅黄色	口縁部片。肩部がごくわずかに残る。弱く内傾し、頸部を突帯が巡る。口唇部と内面下半分は無釉。	SX3 10% 後Ⅳ期。
29	古瀬戸 灰釉瓶子	C (8.6)	良土、鉄分多	堅緻	釉：黑褐色～黑 色 胎芯：暗灰黄色	体部下半片。内面にはヨコナデと斜め方向のナデが施される。黒褐色の灰釉の上から黒色の鉄釉をたらす。	SX3 上層と3層 20%
30	古瀬戸 鉄釉粗母懷 茶壺	A [12.0] C (2.9)	良土	堅緻	釉：灰褐色 胎芯：暗灰黄色	口縁部片。弱く内傾する頸部の端部を折り込んで玉縁状にする。	SX3下層 30% 後Ⅰ期
31	古瀬戸 鉄釉粗母懷 茶壺	C (4.5)	良土、鉄分多	堅緻	釉：黒褐色～オ リーブ褐色 胎芯：灰褐色	肩部から耳部片。肩部に横耳が付される。内面はナデ調整がなされる。	SX3下層 30% 後Ⅰ期

第13表 地下式坑等出土遺物観察表(3)

No.	器種 器形	法量【cm】	胎土	焼成	色調	器形・技法状の特徴	出土位置・残存率 ・備考
32	古瀬戸 灰釉祖母懐 茶壺	C (8.8)	良土、鉄分多	堅緻	釉：黒～黒褐色 胎芯：褐灰色	肩部から耳部片。肩部に横耳が付される。内面はナデ調整がなされる。	SX3下層 20%
33	常滑 鉢II類	A [29.0] C (4.7)	良土	堅緻	釉：淡黄色胎 芯：浅黄～にぶい黄橙色	口縁部片。口縁部直下は直線的で、口縁部端が内外面に張り出し平坦面を形成している。	SX3覆土 10% 10型式
34	常滑 壺	B [14.0] C (3.2)	良土	堅緻	外面・胎芯：明赤褐色 内面・口縁部：にぶい赤褐色	底部片。内面は回転ナデ調整。外面にk黑色の鉄錆が1条重れる。	SX3下層 20%
35	常滑 壺	C (12.9)	良土、径5m m以上の大粒 の礫入る	堅緻	外面：にぶい赤褐色 胎芯・内面：にぶい褐色	体部下半。内面にはハケ目調整。外面は細密な正格子上に交差線文が重複する押印がある。	SX3上層 20%
37	土師質土器 皿(ロクロ)	A [9.4] B (6.2) C (2.3)	黒色粒・赤色 粒微量	良好	橙色	幅広の底部から口縁部の立ち上がりは短い。 体部内面は左回りのナデ。底部に糸切痕(右 回転)	SX4覆土 80%
38	青花 小皿	縦3.9 横2.3	精良	堅緻	明緑灰色 呉須：表は黒青 灰色、裏は青色	底面部の破片で、内面には渦巻状の文様が呉 須で描かれる。外面一部露胎。	SX1覆土 10%

上記のうち、古瀬戸製品は『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』と藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』、常滑製品は『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑系』、白磁は森田勉1981『鎌倉出土の中国陶磁器に関する』『貿易陶磁研究No.1』を参照した。

第14表 地下式坑等出土遺物観察表(4)

No.	種別	法量【cm】	石材	色調	特徴	出土位置・残存率 ・備考
36	不明石製品	縦 (6.8) 横 (6.3) 厚 (1.9)	細粒砂岩	灰黄色～にぶい 黄色	撥状を呈し、中央部がやや凹む。平坦な面が裏 表に残る。用途は不明である。	SX3覆土
39	砥石	長 (10.1) 厚 (2.5) 幅 (2.9)	細粒砂岩	灰白色	研磨面4面。うち1面は自然面がわずかに残る。 研磨面のうち正面の1面が特に凹む。 2面には削痕が5条長軸方向に平行に走る。	SX1覆土 90%
40	研き臼	長 (17.9) 厚 (12.2) 幅 (10.4)	安山岩	灰色	平坦な研磨面から垂直に立ち上がる研き臼の上 部。くぼみと上縁、供給口が認められる。研磨 面に溝溝が5条平行に走る。	SX1覆土 10%

第4章 まとめ

今回の発掘調査では、縄文時代中期の堅穴建物4軒、土坑13基、中世の地下式坑3基、不明遺構1基、時期不明の土坑2基が発見された。以下に時代ごとの調査成果をまとめる。

第1節 縄文時代

神立遺跡において、これまでの試掘確認調査や工事立会で出土した縄文土器はいずれも中期で、五領ヶ台式から加曾利E2式に及ぶ。遺跡範囲南西部における工事立会では、阿玉台III・IV式から加曾利E1式の土坑5基が検出されている（上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2007）。今回の調査では加曾利E2式を中心とする堅穴建物、土坑を検出した。第1号堅穴建物は、加曾利E1式の第8号土坑に切られていることから、それ以前の住居跡と考えられる。第2～4号堅穴建物は、南から北に向かって拡張した一連の住居跡で、出土遺物から加曾利E2式の遺構であろう。第2号堅穴建物では石圓炉が検出されている。筑波山麓で産出する雲母片岩や花崗岩の板石を不整円形に並べたもので、地床炉が一般的な土浦市内の中期住居跡のなかでは珍しい。類例としては赤弥堂遺跡5区SI01があり、こちらも雲母片岩を用い、四角形の平面形を呈する（勾玉工房Mogi編2011）。また、第2号堅穴建物では石鎌をはじめ、剥片石器がある程度出土している。石鎌は小型の凹基無茎鎌で、素材剥片が小さかったか、あるいはリタッチが進んで小さくなつたものであろう。剥片には両極技法による剥離が施されたものが認められ、住居内で石鎌製作を行っていた可能性がある。これらの石鎌、剥片にはチャートや玉髓に加え、黒曜石が用いられている。市内における黒曜石製石器の原産地推定の結果、縄文時代中期には神津島産黒曜石が圧倒的多数を占める（池谷2008）。本遺跡では蛍光X線分析による黒曜石の原産地推定は行っていないものの、神津島産黒曜石が主体となり、信州産黒曜石や、高原山産黒曜石とともに使用されていたものと考えられる。土坑のほとんどは出土遺物が少なく性格が不明であるが、第2号土坑からはまとまった量の遺物とともに、小規模な貝集中地点が検出されている。市内の中期遺跡では、明瞭な住居内貝層や斜面貝層が発見されておらず、既に指摘されているように貝類利用の低調さが特筆される（上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2007）。

今回の調査によって、遺跡範囲北東部に集落が展開していることが確認された。これらのことから、神立遺跡は中央窪地を取り巻くような環状集落を呈すると考えられる。

第2節 中世

中世の遺構では、地下式坑3基と不明遺構1基を発見した。平面プランの推測では、1号と3号地下式坑は主軸を等しくする。両者間では一部の遺物に遺構間接合がみられ、遺物の生産年代もおおむね同時期である。これらを踏まえると1号と3号はほぼ同時期に機能し、埋没に至る時期も重複する可能性が高いと考えられる。近隣に住む住民の方に話を伺うと、当調査区周辺に広がる畑からは不自然に地面に穴が空いた箇所が複数みられるという。推測だが、神立遺跡内にはより多数の地下式坑群が展開しており、それらの中で天井部を残し十

分埋まりきっていないものが現代になって崩落したものと考えられる。

遺物量は3号地下式坑が多い。一般的に地下式坑は倉庫または埋葬に伴う地下室の性質が強く、出土遺物は遺構の機能と直接関わらない覆土中の出土が多数をしめる。天井崩落後の主室の窪みを廃棄土坑としての利用、埋没過程での豊坑からの遺物混入も多い。当例も覆土下層からの出土はあるものの、底面直上や中世利用時のまま遺棄された出土状況では無い。天井崩落後の一定期間のうちに廃棄または混入したものと考えられる。

出土遺物の様相としては、在地産の土師質土器のうち、①皿類にロクロと手づくねの2者が並存している点、②器高の高い内耳鍋が複数ある点が注目される。①では、手づくねかわらけの器厚が高く、全体に荒いナデ調整が残る点は、手づくねかわらけの末期的様相を示している。ロクロかわらけも直線的に短く立ち上がるものが多い。②では、内耳鍋の口径と器高比が1/2～1/3以内に収まる。

土浦市内の中世土器は、古瀬戸後Ⅳ期古段階平行である般若寺跡溝3出土資料が良質で、15世紀中葉頃の指標となる（比毛2009）。溝3出土資料は手づくねかわらけを含まない点から、3号地下式坑の土器は一段階古い様相を残していると考えられる。換言すると古瀬戸Ⅱ～Ⅲ期平行、15世紀前葉頃の様相を反映しており、覆土中からは該期の資料も伴出している。しかしながら同遺構出土資料には、続く後Ⅳ期のものや常滑鉢Ⅱ類に新期の資料も見られることから、3号地下式坑出土資料が成立するには一定程度の時間幅を想定する必要がある。今後は、崩落後の主室跡に複数回の廃棄があったか、廃棄過程では新旧混在する状況で一度になされたかを視野に入れながら、他事例の検討を踏まえ、中世土器様相の細分化を進めてゆきたい。

最後になりますが、神立遺跡第1次調査の遂行にあたり、多大なるご指導ご協力をいただいた各位の皆様に衷心より感謝申し上げます。

引用文献

- 池谷信之2008「常総地域出土黒曜石製石器の原産地推定結果について」『千葉縄文研究』第2号 69-91頁
上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2007「神立遺跡」『土浦市 上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第12号—2005(平成17)年度 43-53頁
勾玉工房Mogi編2011「赤弥堂遺跡(西地区)」土浦市教育委員会
比毛君男2009「土浦市域の中世土器様相」『土浦市立博物館紀要』第19号 1-20頁

写 真 図 版



調査区全景



第1号豊穴建物、
第6,8~13号土坑



第2~4号豊穴建物、
第18号土坑

PL2



第 1 号土坑



第 2,5 号土坑



第 2 号土坑貝集中地点



第3,4号土坑



第1号地下式坑



第2号地下式坑,
第19号土坑

PL4



第2号地下式坑セクション

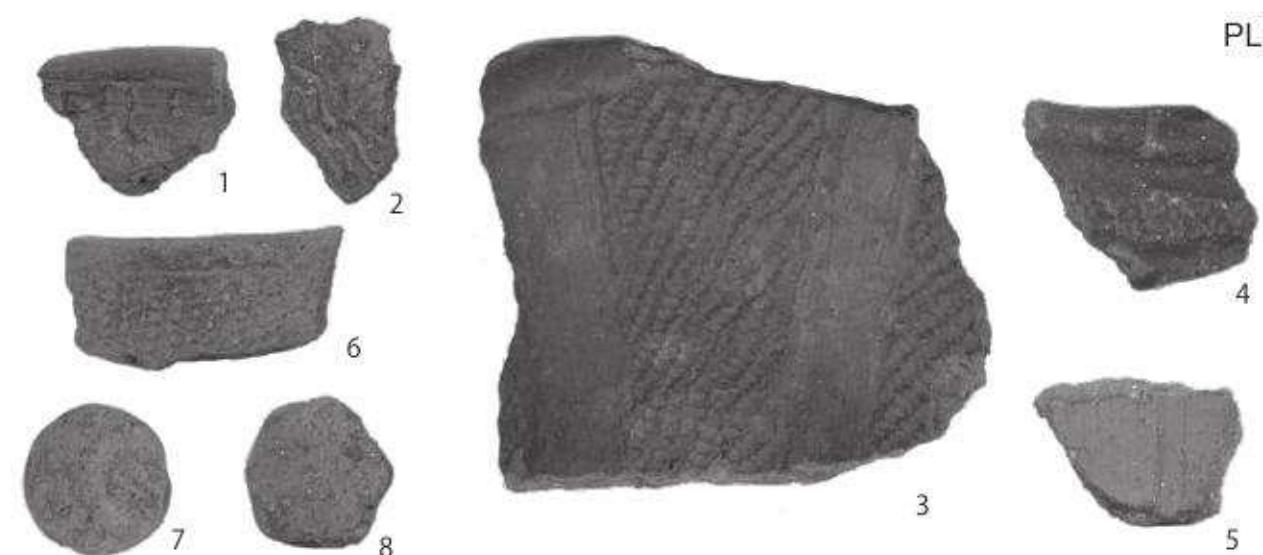


第1号不明遺構

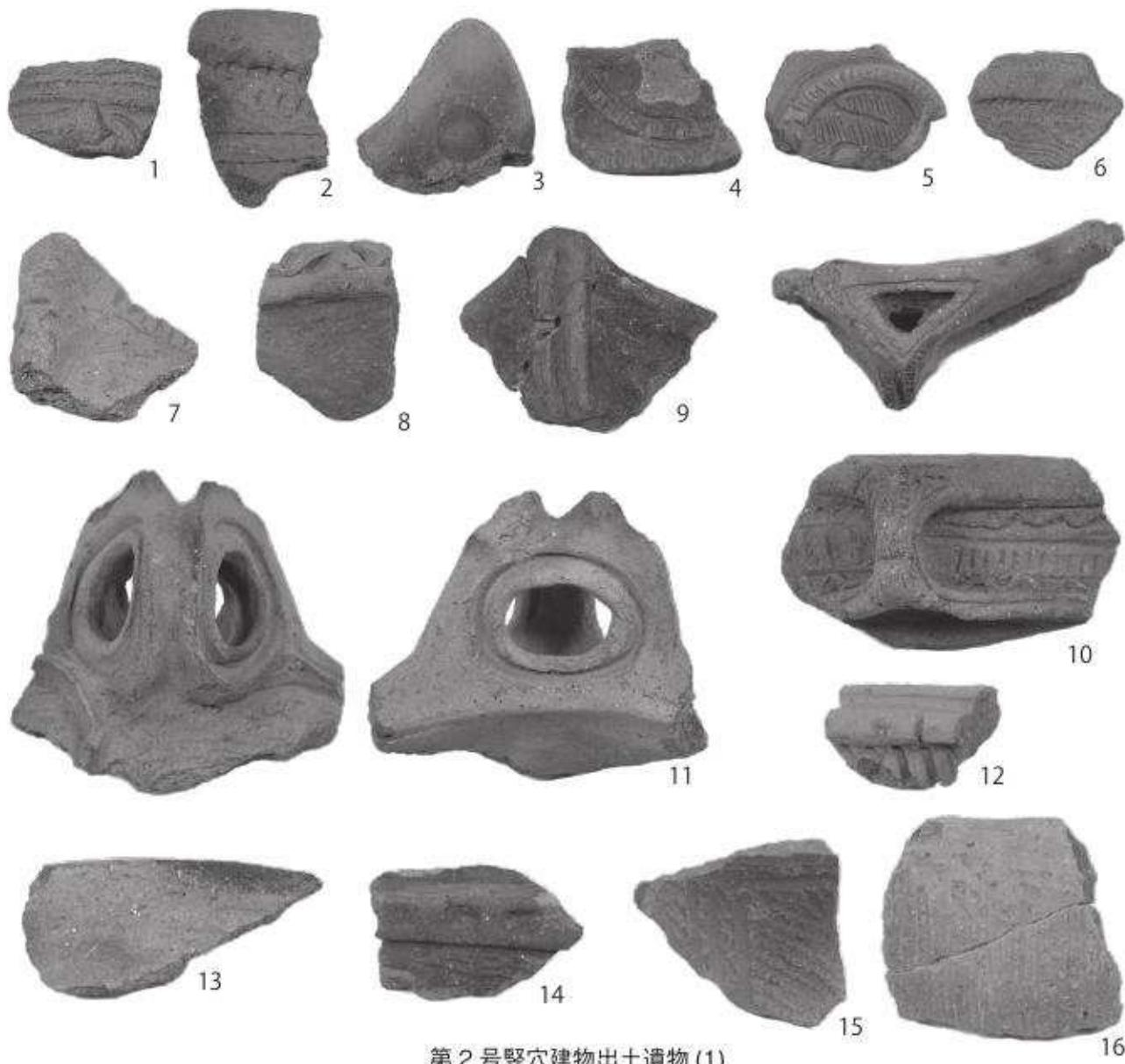


第3号地下式坑、
第17号土坑

PL5



第1号竖穴建物出土遺物



第2号竖穴建物出土遺物(1)

PL6



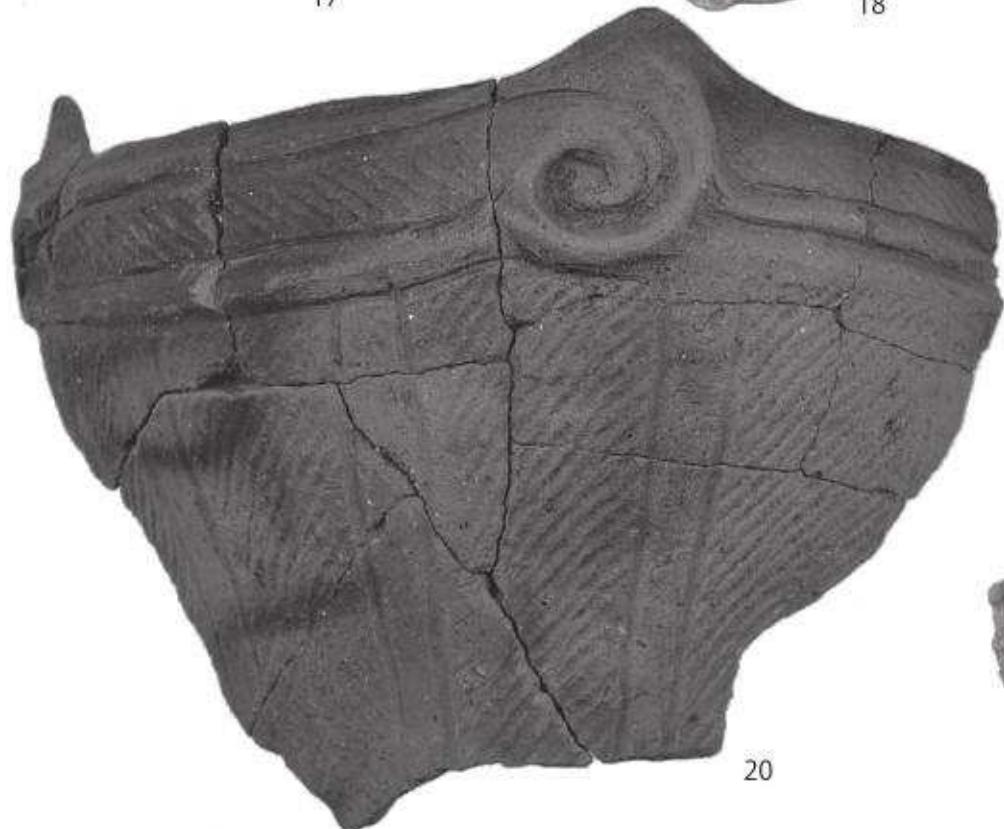
17



18



19



20



21



22

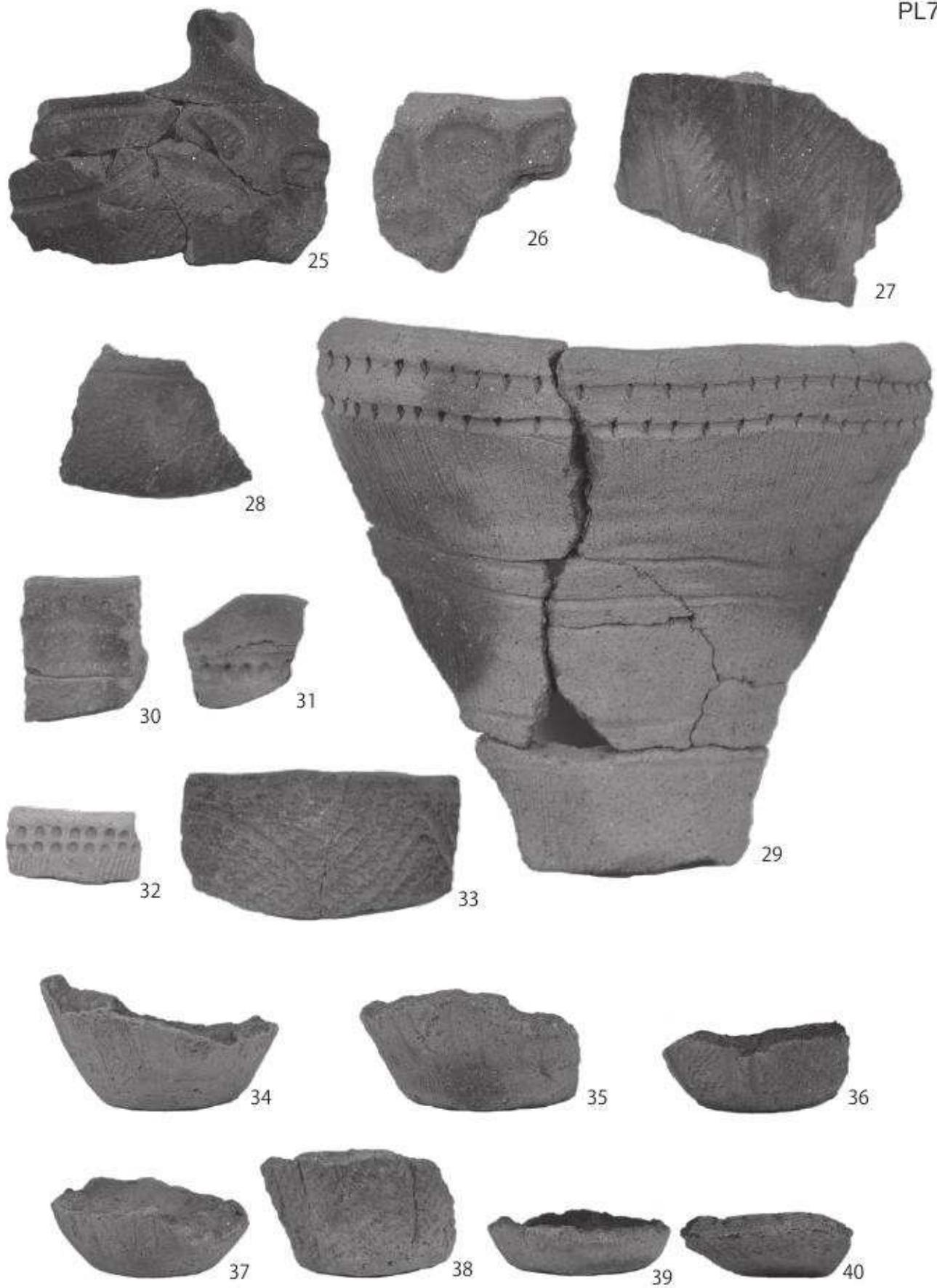


23



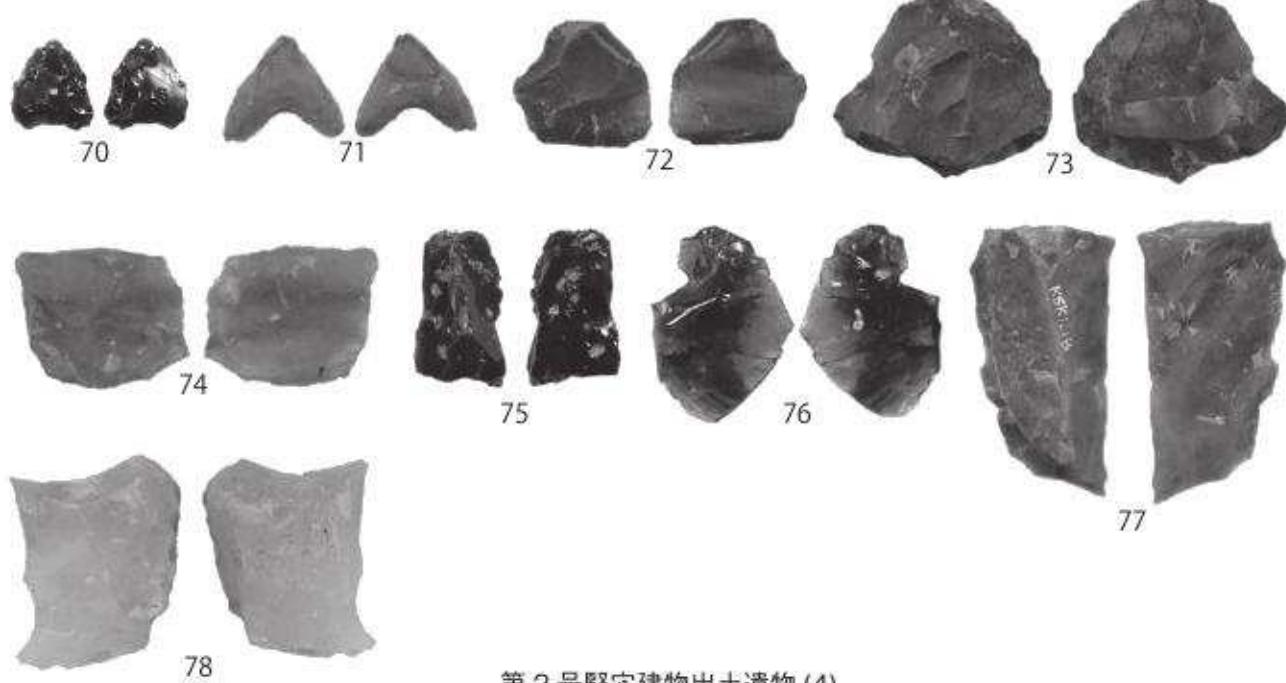
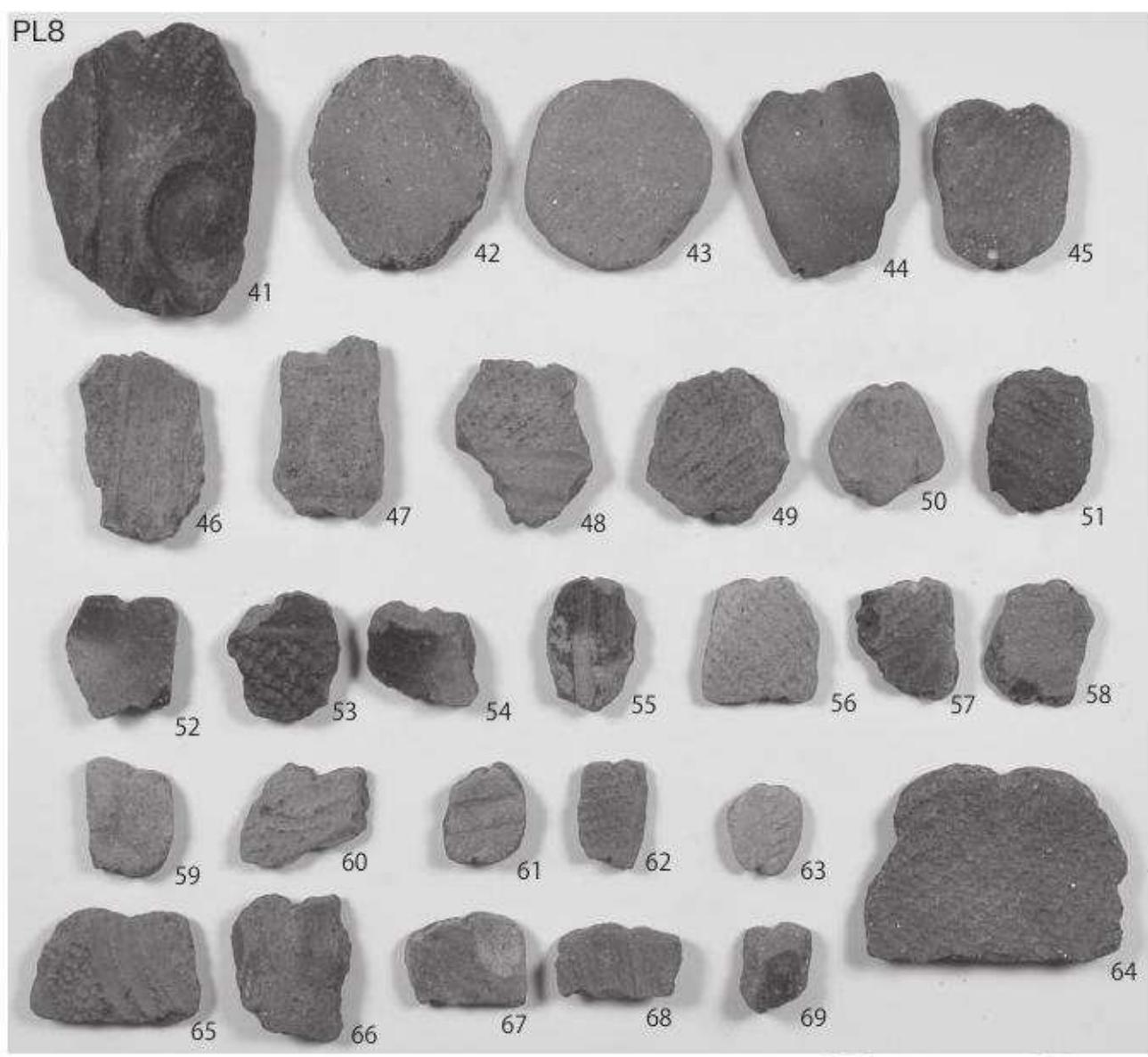
24

第2号竖穴建物出土遗物(2)



第2号竪穴建物出土遺物(3)

PL8



第2号竪穴建物出土遺物(4)



79

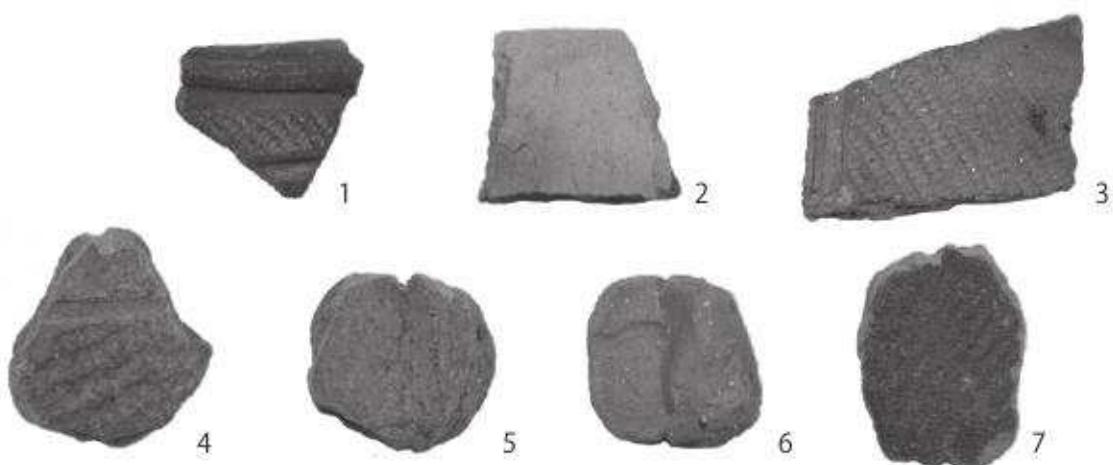


80

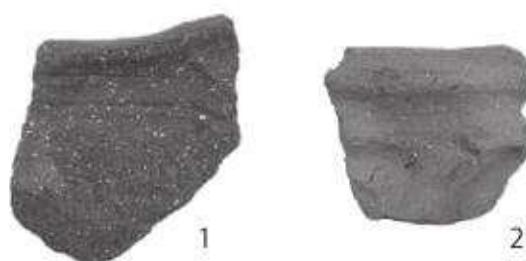
PL10



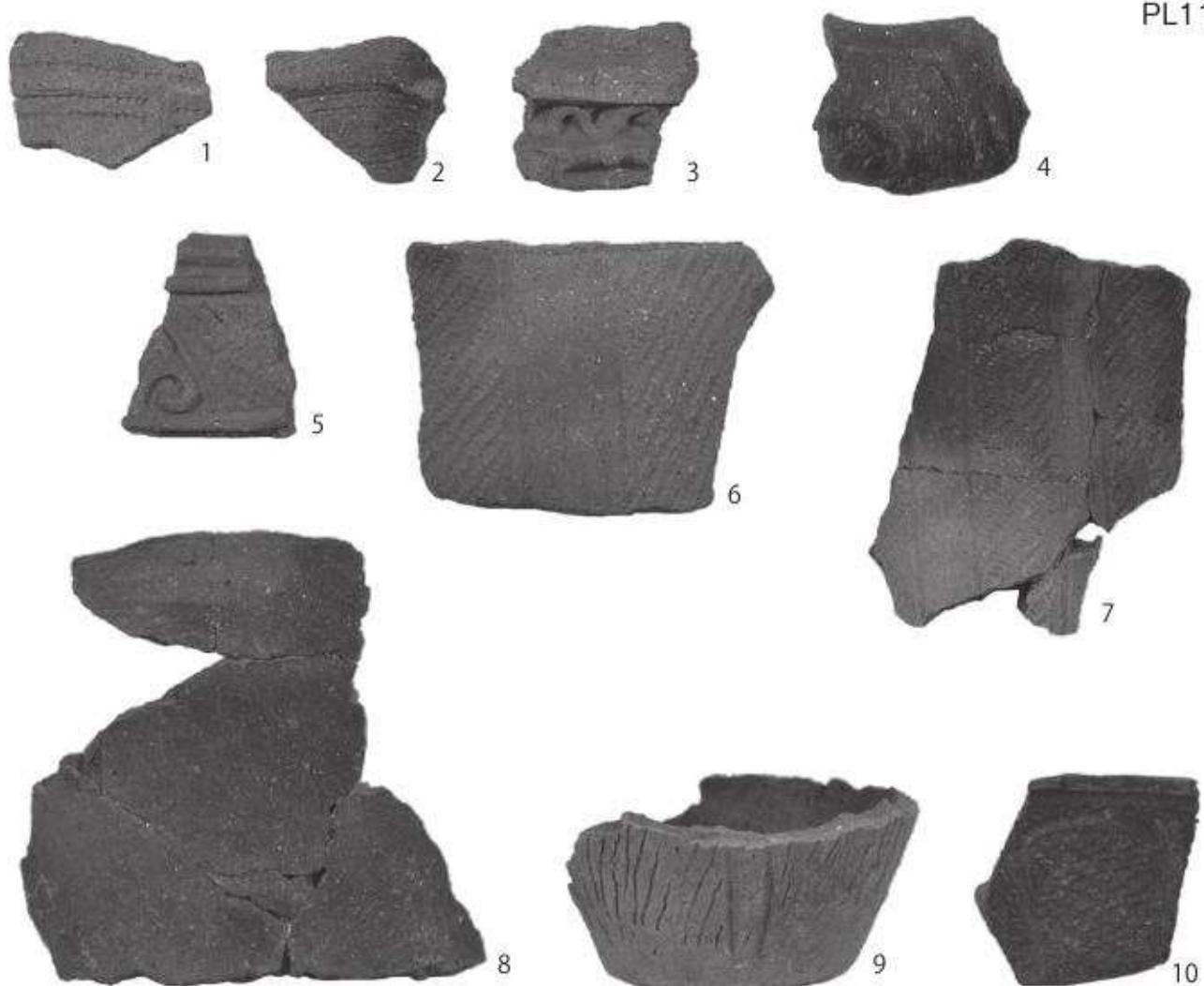
第3号竖穴建物出土遺物



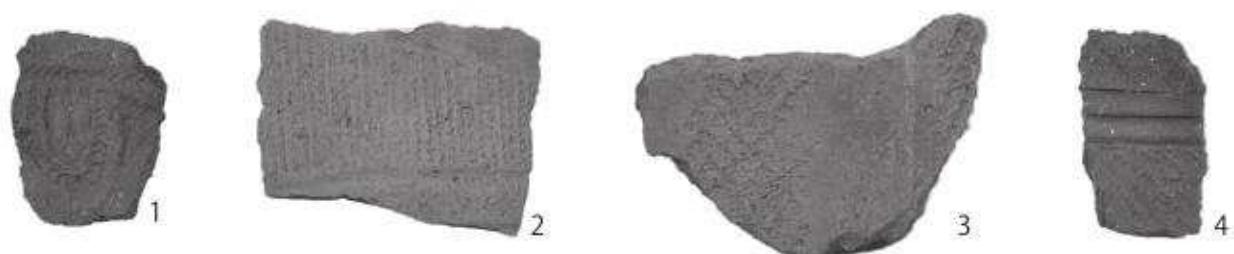
第4号竖穴建物出土遺物



第1号土坑出土遺物



第2号土坑出土遗物



第3号土坑出土遗物

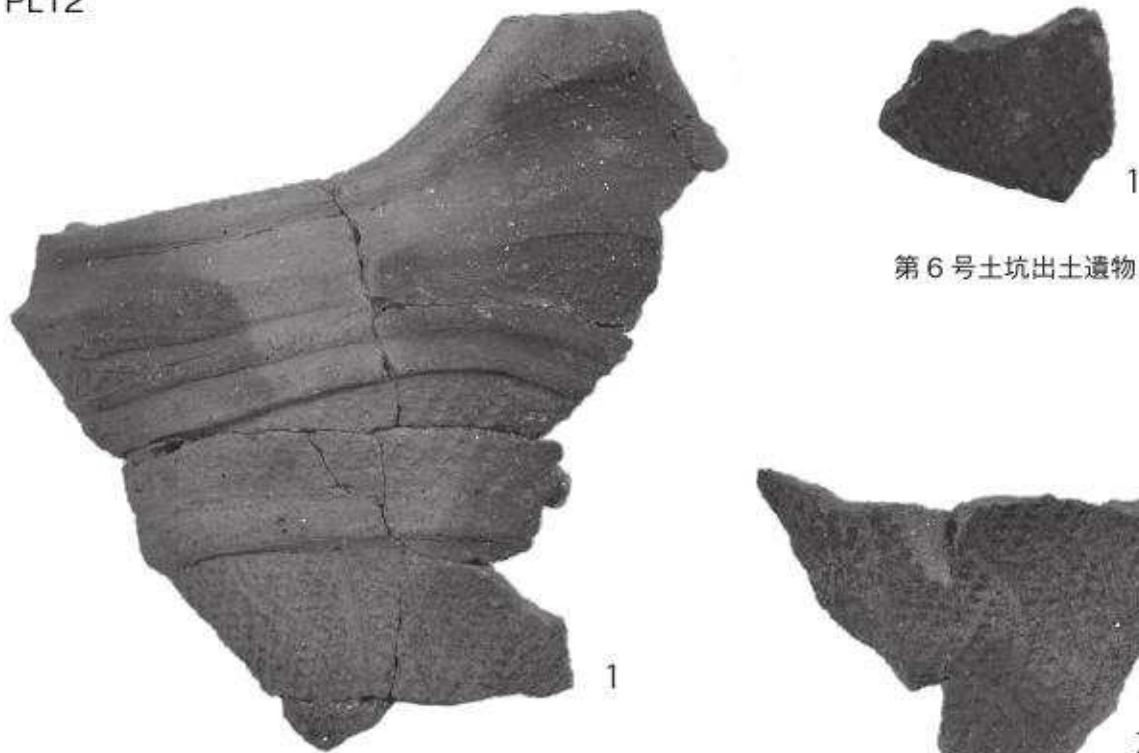


第4号土坑出土遗物



第5号土坑出土遗物

PL12

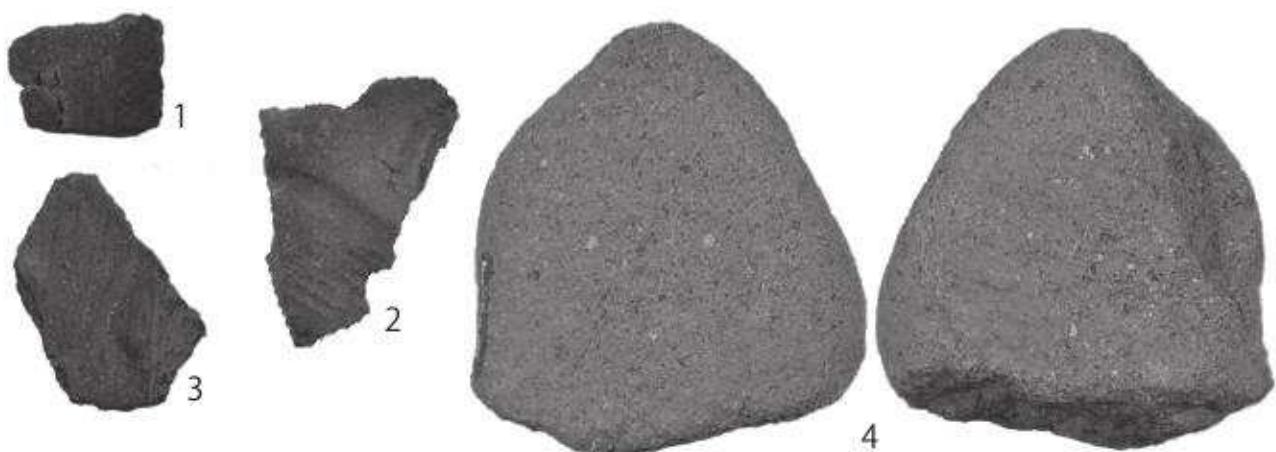


第 6 号土坑出土遺物

1

2

第 8 号土坑出土遺物



第 9 号土坑出土遺物



第 10 号土坑出土遺物



第 11 号土坑出土遺物

PL13



第 12 号土坑出土遺物



第 18 号土坑出土遺物



第 13 号土坑出土遺物



1



2



3



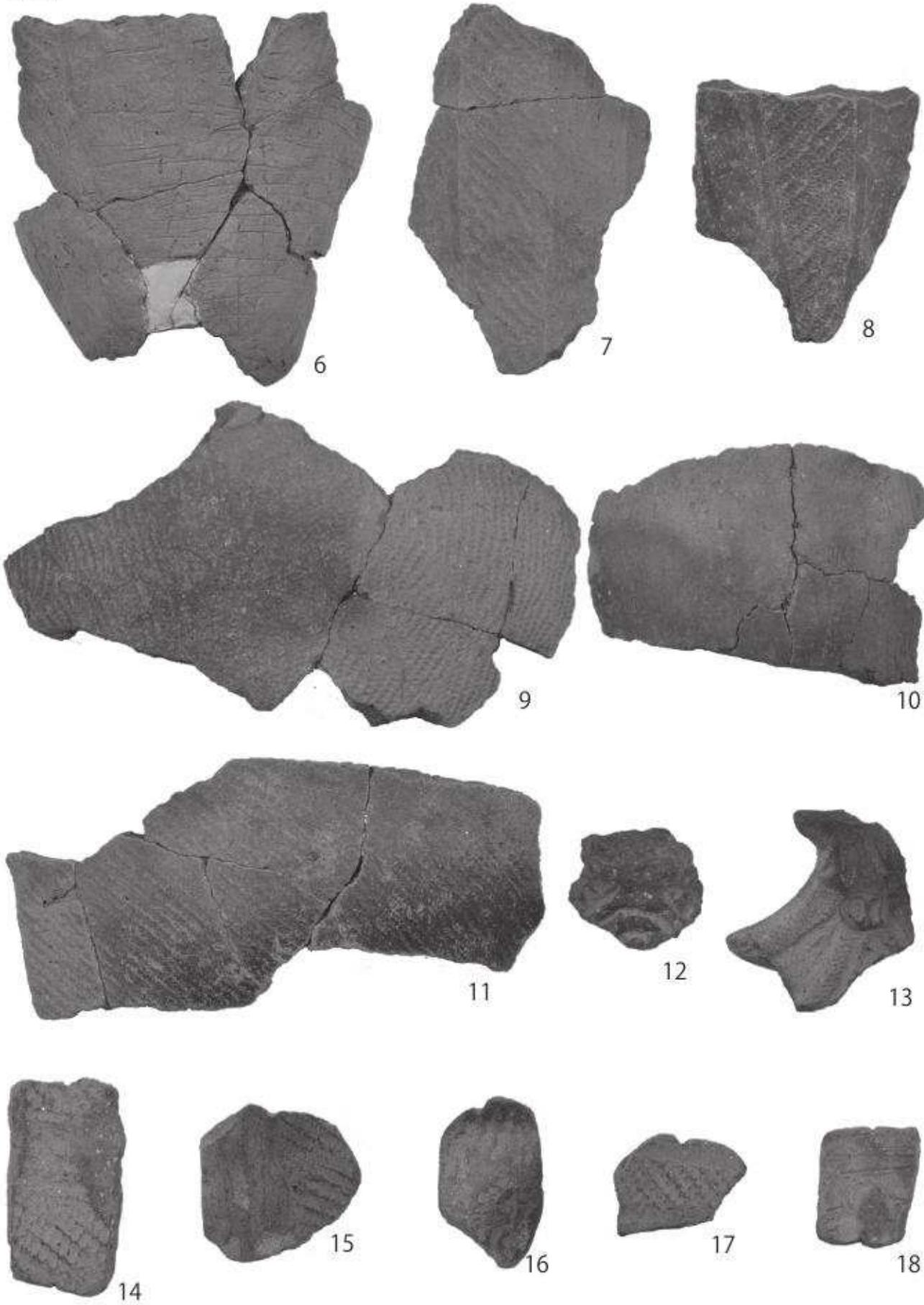
4



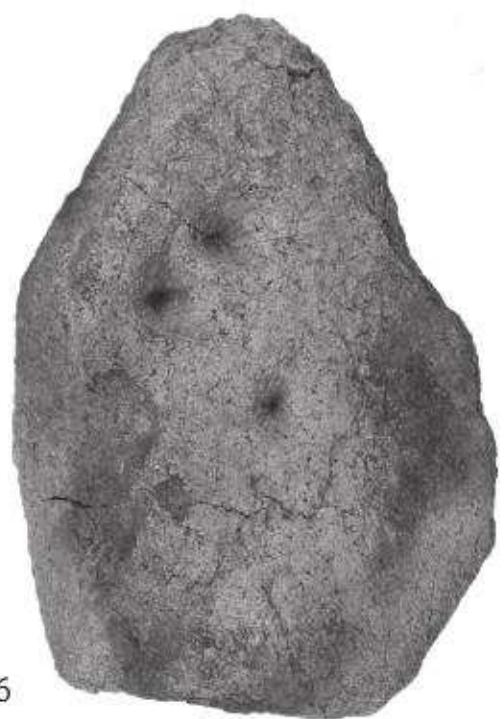
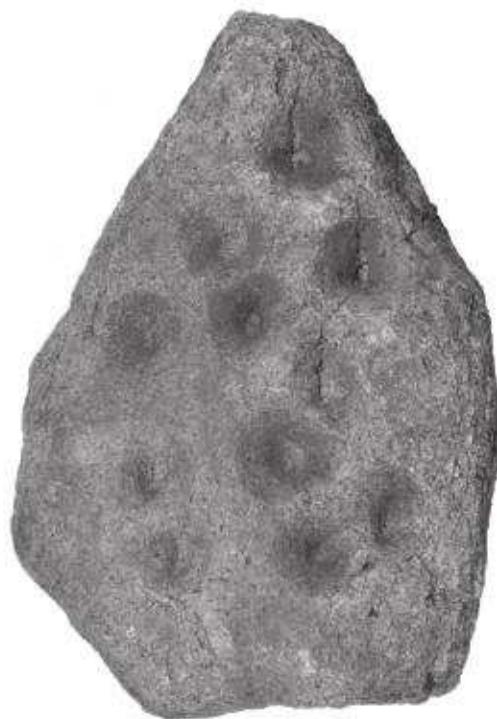
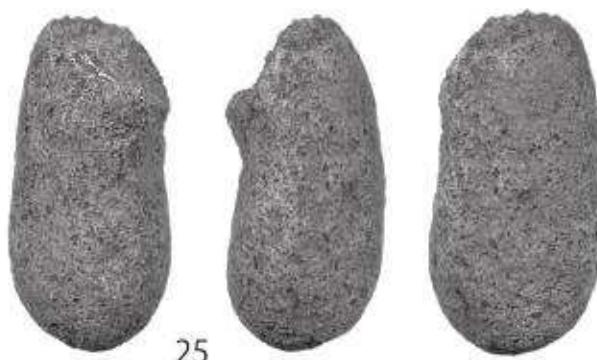
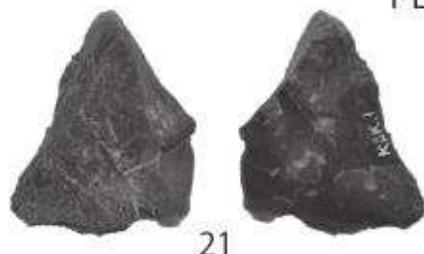
5

遺構外出土遺物 (1)

PL14

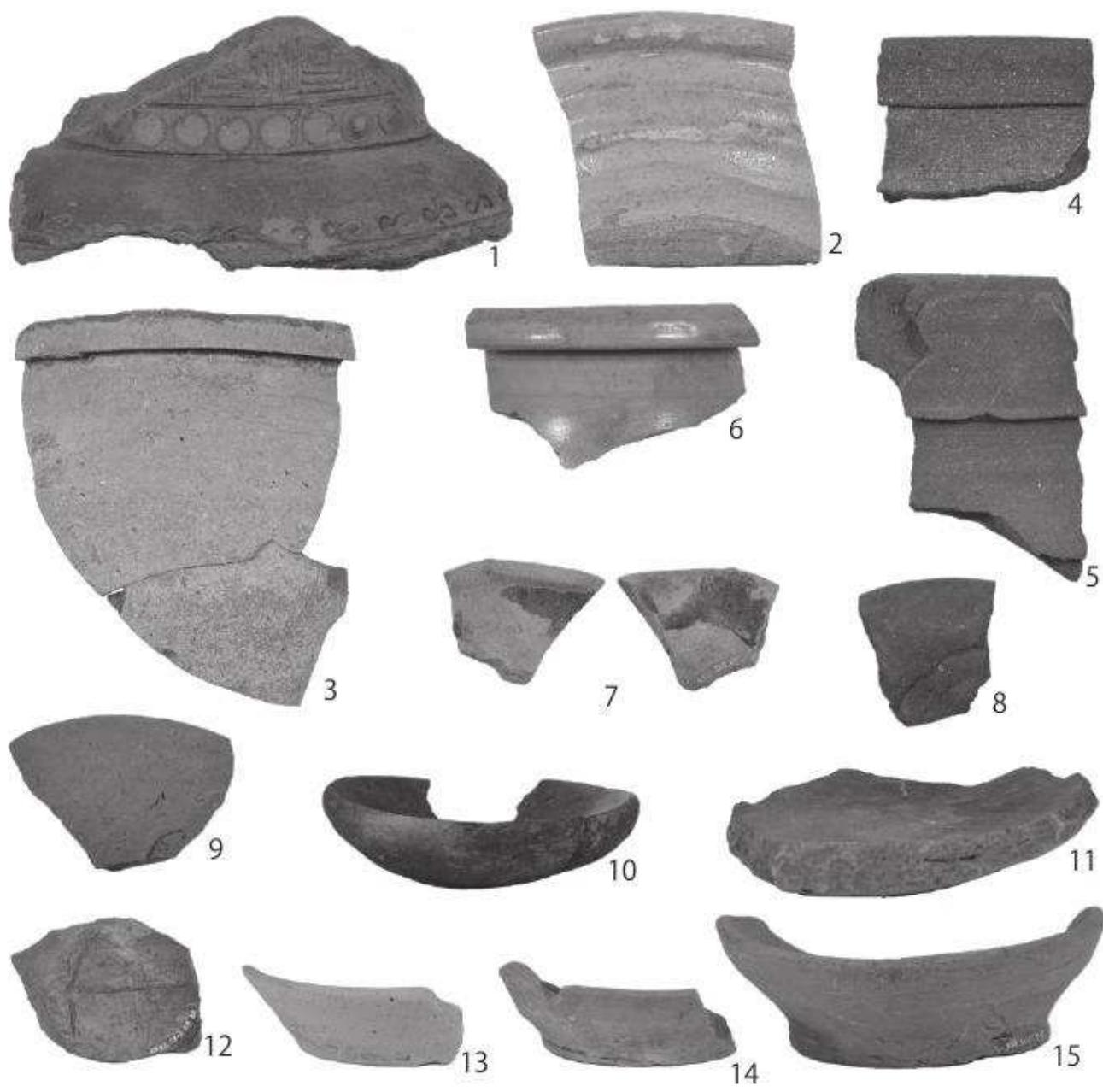
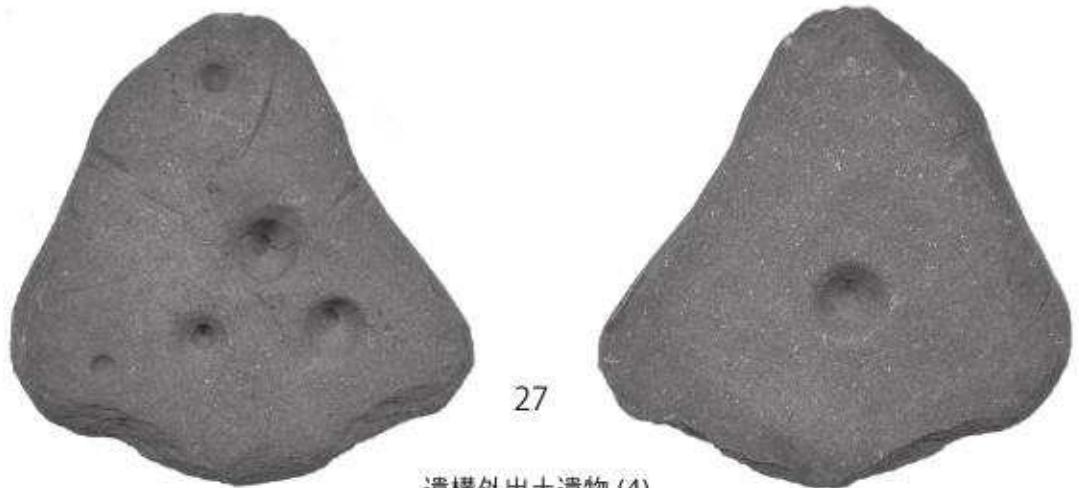


遺構外出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)

PL16



地下式坑等出土遺物 (1)

PL17



16



17



18



19



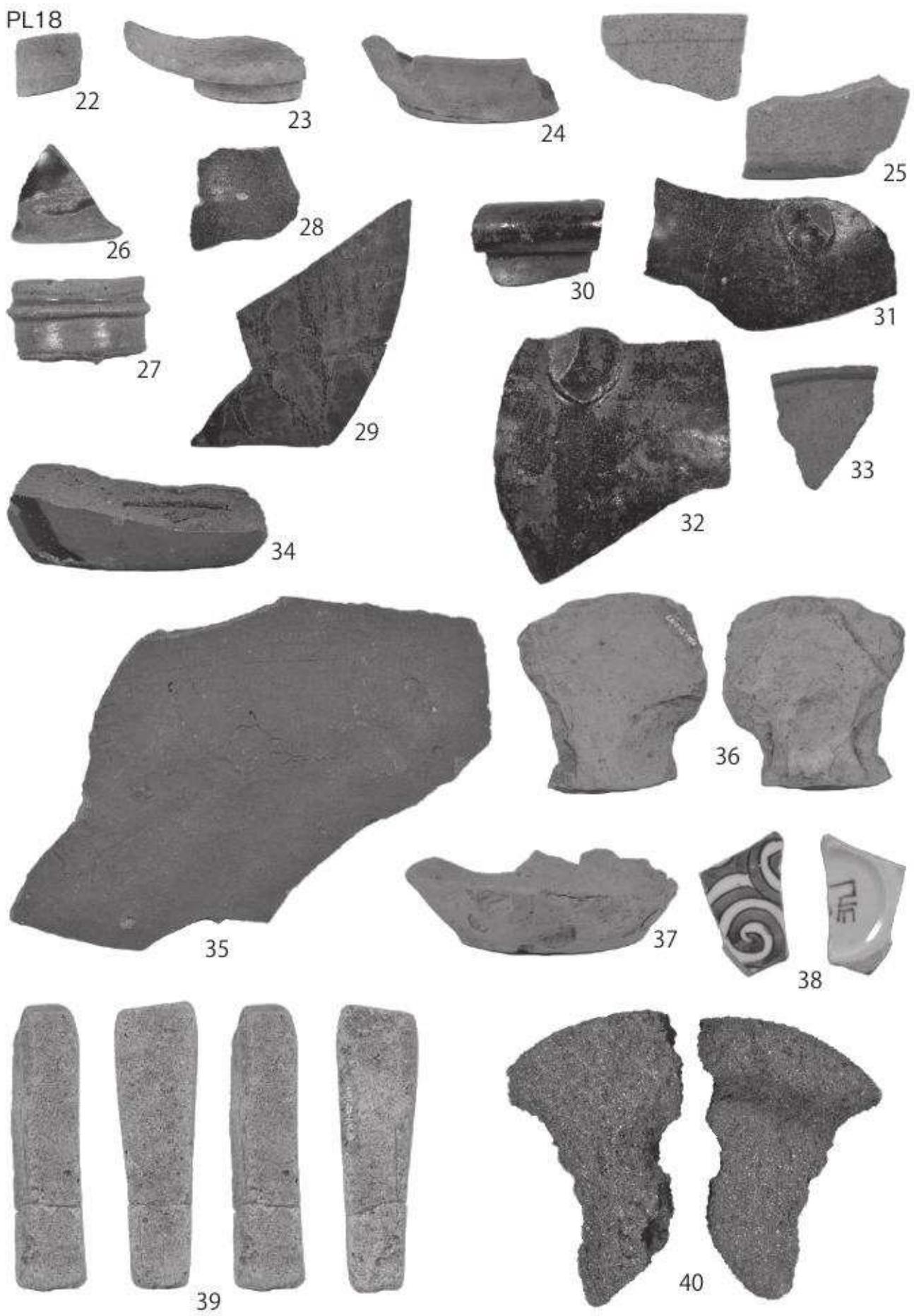
20



21

地下式坑等出土遗物 (2)

PL18



地下式坑等出土遗物 (3)

報告書抄録

ふりがな	かんだついせき										
書名	神立遺跡										
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
編著者名	亀井 翼	著者名	比毛 君男・亀井 翼・島崎 達也								
編集機関	上高津貝塚ふるさと歴史の広場										
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843 Tel 029-826-7111										
発行機関	土浦市教育委員会										
所在地	〒300-0036 茨城県土浦市大和町9番2号 Tel 029-826-1111（代表）										
発行年月日	西暦2018年（平成30年）3月31日										
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コ一 卡		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
神立遺跡	土浦市神立町 字新田前748 番1外	市町村	遺構番号	36度 6分 46秒	140度 14分 9秒	2015年 9月29日～ 11月17日	約200m ²	店舗建設			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項				
神立遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物4軒 土坑14基		縄文土器、土製品（土器片錘）、剥片石器（石鏃、石錐、剥片）、礫石器（石皿、敲石）		加曾利E2式を中心とする集落。石門炉をもつ竪穴建物を検出。				
		中世	地下式坑3基、不明遺構1基、土坑2基		青花（皿）、白磁（皿）、古瀬戸（瓶子、茶壺等）、常滑（壺・甕・鉢）、瓦質土器（火舎）、土師質土器（皿、小皿、内耳鍋）、石器（石臼、砥石）		地下式坑3基を検出した。出土遺物から15世紀代前半から中葉と推定。				

神立遺跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成30年3月31日

編集 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029-826-7111

発行 土浦市教育委員会
〒300-0036 茨城県土浦市大和町9番2号
TEL 029-826-1111（代表）

印刷 株式会社 横山印刷